轍

16号

プロローグ

慣例のように発行を続けてきた毎年の轍を君たちは何のこだわりもなく手にしていることだろう。しかし、現在我校の内にどす黒く低迷した諸問題に対処するには、この小冊子ではできない。そこで、メインテーマを〝サボリ〟に定め、ただサボリに限るだけでなく、それを誘発する根源をアンケート、生徒からの論文などを土台に探り深めていった。轍ではサボリの是非を判定することはできない。ただできることは、諸君と共に考えていけることだけだろう。

もちろん、サボリと題してさいたページ数はあまり多くはない。その理由として〝サボリ〟の問題は大まかにみると個人の内面への問いかけになりがちであるが、実際には、内的なものよりもむしろ外的要因が作用しているのを見逃しやすい。そこに我々の本当の問題が秘んでいるといえよう。

自由論文・創作には、我々のもっている不安感が漂っているものも多くあった。ここにある論文・創作によって今の新宿高校における問題や求めゆく方向も見つけられることだろう。

逃避〈サボリ〉反抗

轍　委員会

第16号　目　次

プロローグ ……1

特集『サボリ』

逃避≪サボリ≫反抗 ……5
省察（先生方のアンケートより） ……15
雑感 ——サボリ—— ……須賀晶彦…16
さぼり ……打田宏…17
さぼり——ある日の日記から ……MANTIS…18
「遊び」小論 ……三本悟…19

自由論文

ある視点から ……平塚公平…27
安全に自転車に乗るために ……大谷純一郎…29
葛藤 ……本田真也…30
自由のために ……大久保剛史…35
家庭科からひとこと ……杉浦文世…37

創作

ばちなんてあたるもんか ……佐藤広行…38
おろかなわたし ……林宏親…39
傀儡（くぐつ） ……斎藤成…40
反吐 ——ヘド—— ……伊東重明…43
…… ……菊池洋史…43
告白 ……花井達也…44
反抗の詩 ……花井達也…45

研究発表

七二・五・一五 ……栃谷泰文…46
——アジア<沖縄>日本——　（沖縄歴史研究会）

報告

クラブ活動報告 ……人文科…51
芸能科…53
理数科…54
同好会…55
体育科…56
委員会報告 ……各種委員会…65
特別委員会…66
特殊委員会…70

その他

週番日誌 ……1学年…71
2学年…74
ひとことスピーチ ……卒業生…78
新宿徒然草 ……63・77・88
年間行事 ……89
表紙のことば ……中久木均…91

表紙　中久木　均
カット　三ノ輪利郎ほか

特　集

サ　ボ　リ

逃避≪サボリ≫反抗

現在新宿高校に特に多くなってきた授業のサボリについて現象面や、教師側の意見なども取り入れ、この問題から発展してサボリの本質をえぐろうと試みた。

次第に顕著になっていくサボリが一般に言われている生徒の退廃・三無などが本当に原因であるのかをもう一度再考する必要がある。

しかし、ここで無意識・無自覚なサボリが肯定されるように論を進めたいのではない。そうなったのでは、甘っちょろい機関紙と化してしまう。轍が言いたいのは、そこまで追いやる本質を考えてほしい、サボリは肯定できるものだろうか。それを決定するには轍ではできない、というより決定してはいけないことなのだ、本当の決定は諸君らの心がするものだ。

一、はじめに

「高校が一流校から何流校まで格差づけられているなかでは、上の方の学校の生徒ほど勉強も好きで学力も高く、下の方の学校の生徒ほどそうでないと考えるのは常識であろう。事実、一般的には授業のなかの活発さは、前者の方が後者よりもずっと高いと言ってよいし、少なくともこれまでは、〃有名〃校の方が生徒会活動も比較的活発だったということがある。しかし、よく調べてみると、その〃常識〃は、〃有名〃校の生徒については、ただ試験の成績が良い、あるいは比較的詰め込みに強いといったこと以上のことを意味しているわけではない。―中略―受験体制というものは、それが何年も繰り返されるなかで生徒の疎外感を深めていくことによって、かつては、〃底辺部〃の学校であったような現象を次第に格差の上の部分にまで押し上げていく。学校からはみだしてしまったような生徒の間にあった退廃現象が、今日では〃エリート〃校の内部にもほとんど公然とはいり込んでいるし、学習意欲や自治活動についても同じような現象がここ三、四年来急速に現われているのであるその意味では現在の生徒は〃エリート〃校、〃非エリート〃校を問わず、すべて〃学校〃から押し出され、あるいははみだしつつあるといってよい」

（田代三良著「高校生」）

〃斜陽の名門校〃と言われる新宿高校。その現実の姿は、この文章の中にはっきりと示されている。「比較的詰め込みに強い生徒」「学校からはみだしつつある生徒」それらの生徒を我が校から捜し出すのも簡単になってきつつある――これが現実の姿なのだ。私達はこの現象をどうとらえていったらよいのであろうか。

さて、サボリとは、いうまでもなく現実からの逃避である。しかし、それは現実への反抗であるともいえる。もしサボリを〃逃避〃とみれば、それは自己への甘さを意味するが、サボリを〃反抗〃としてみれば、それは現在の学校の中になんらかの問題点があることを意味するだろう。私はサボリの中には、常にこの両方の側面が存在していると考える。

いま、轍編集委員会がサボリということを〃特集〃として取り上げるのも、私がこの原稿を書いているというのも、サボリを単なる現象として終わらせてしまうのでなく、もっと別な角度から、もっと深く掘り下げて見てもらいたいからなのである。

二、授　業

。勉強する為に高校に入いったのであるから、サボった分だけ自分自身が堕落する

。サボるなどふとどきなことをするものは、学校に来る必要もなく、来させるべきではない。僕は彼等の学校追放を願う

。サボる人は高校生としての自覚が足りないと思う

これは轍編集委員会の行なったサボリについてのアンケートから引用したものであるが、この人達からみれば、サボリは単なる授業からの逃避であり、〃快楽〃への指向にすぎないのだろう。

さて、ちょっとこれを読んでもらいたい。

「ぼくは、非行は相対する二つの岸辺から、夢の国へ向かって

なされるものだと思っている。一方に、夢に参加できない貧しい人達がいる。この場合、貧乏が夢をさまたげる。もう一つには、夢のなかに浸りきってかえってその実体を見失い、けだるい騒音にまき込まれている人達がいる。―中略―彼等は、しばしば真実を探りあてようとして盗み、傷つけ、殺す。彼等は生まれながらにそなわった快楽という無からの脱出をはかって、また本ものの痛み、手ごたえのある結末に触れようとして、ゴム張りの壁に頭を打ちつける。快楽の内部にいようと、その外にいようと、いずれにしても快楽が支配する世界は幻影にすぎぬ」

（「無目的時代の非行者たち」）

この文章はアメリカの劇作家アーサー・ミラーの書いたものであるが、彼によれば、非行という問題は、基本的には今の文明の発達（本当の文明かどうかはどうも疑問である）における人間の〝尊厳〟についての考え方の喪失、すなわち、金と快楽が支配している現代の社会の〝人間失格〟の問題に他ならない。

現代がこのような社会であるから、学校はもはや知的修練の場ではなくなり、一日を無為に過すためのたまり場が、大人になってから〝良い生活〟ができる為の手段として行くところとなり下がっていく。もっとも、この場合の〝良い生活〟とは、何かに意義を求めて楽しむ生活ではなく、冷暖房でいつも適温に保たれたようなけだるい生活にすぎないのだが。

「授業に出ても、あったのはただ無気力だけ。それでは、といってサボってみてもそこにあったのは快楽の幻影」――単にサボルだけでは心は満たされない。でも、なにをやっていいのかまったく見当がつかないのである。

(一) 授業・ひとりごと

① machine

そのいち

手の早い先生の時には、我々は黒板に書いた文字を必至になって写すだけである。もちろん、先生は授業（とてもためになる）をしているつもりなのであろうが、我々にとっては、そんなもの聞いている暇なんか全くナイ。我々の使命は黒板を写すことにある。ゆえに、ひたすら鉛筆を走らせる。―「そんな姿は、まるで機械であります。」―頭脳なんか全く不必要なのだ。ただ早く、正確に字が書けえすればそれでよい。我々にとってその時間の〝勉強〟は家に帰ってノートを開いたときに始まるのだ。

そのに

「あー、こんなことならはじめっから黒板に書くべきことをプリントにでもして配ってくれたほうがよっぽどありがたいのになあ」――いすにデンと腰掛けて、先生とにらめっこしよう。まわりのやつらは、ノートを写すのに精いっぱい。でも俺は、ノートはいつも授業が終わってから誰かにみせてもらうことにしているのだ。ちょっとばかりたいへんだけど、そのかわり授業はバッチリである。もし授業中ノートなんかとってたら、俺はきっと授業がまるっきりわからなくなってしまうだろう。

② 本　質

いやだ、いやだ。なんでこんな。かったるい授業ををやるんだろ

うか。ちっとも教科書と違わない授業。よく「予習が大切だ」なんていうけど、これじゃ、もし「予習」なんかやって授業に出たら「授業で習うこと」なんてありゃしないよ。こんなんならアンチョコ買って読んだ方がよっぽどためになる。生徒と先生なんて、教科書と読み手の関係でしかないのだろうか。それじゃいくらなんでも味気なさすぎる。もっと、その勉強の〝本質〟というか〝おもしろさ〟というか……。僕等はそれを望んでいるのに。

③ ノート

次の授業の為に隣のクラスへ行って〝ノート〟を借りてきた。隣のクラスはずいぶん授業が進んでいる。もし先生に指されたら、このノートをみて答えよう。答えられないで恥をかくのだけはいや。私にはプライドがあるもの！

④ 窓の外には…

独りで窓の外をながめる。（俺のまわりでは「一に勉強二に勉強」。あいつらはやりたくてやっているのかな…。）欲しいのは将来の安楽な生活だけ、それとも一流大学へいって優越感を味わいたいのかな。あいつらは勉強だけで今という時間を費している。今、俺達のまわりの世界で何が起ころうとしているかも知らないで。でも俺だってそれを知っているだけ。知っているだけなんだでなんにもできやしない。一人の力なんてはちっぽけなものだから、俺も何も知らないふりをして窓の外をながめる。俺にはこれが似合ってるヨ。

⑤ じぶん

他人をけなすのは簡単なこと。だから先生をけなします。〝勉強〟するのはめんどうなこと。だから今の授業を否定します。自分をけなすのは簡単なこと。だけど自分だけはけなしません。自分は可愛いものです。

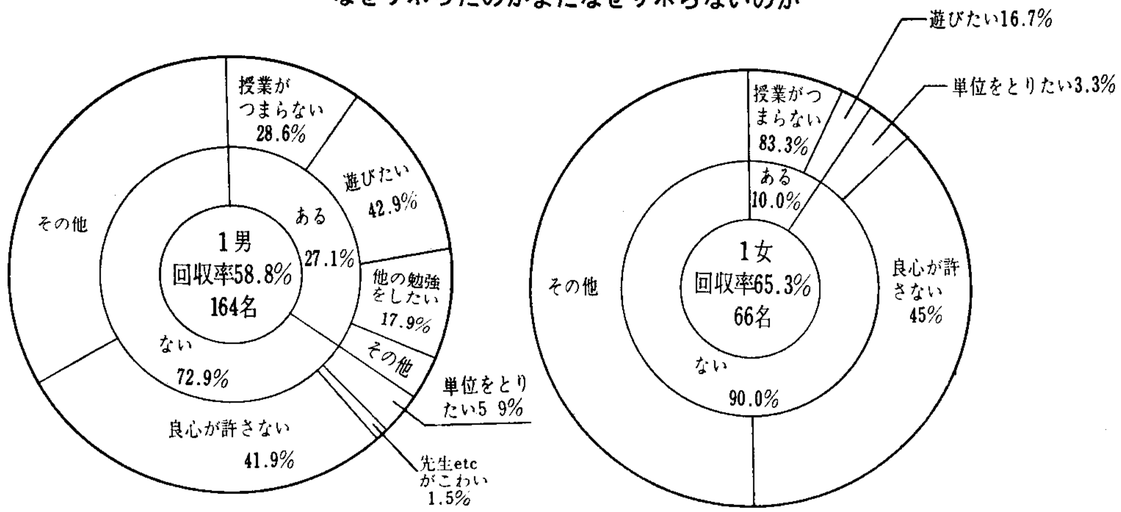
サボリなんてこんなもの。こんなものです。

○

「授業中ふと無意味さを感じたら、もう勉強なんかうわの空で、頭はボーとなってしまい、何も考えていない。皆がずっと遠くに感じられる。そして何となく生徒と先生と黒板を眺めている。はっと気がついて無気力と闘おうとするけど、もういけない。一度外へはみ出たら、空虚さが増すばかりで、先生も生徒もかわいそうに思えだす。先生も商売している。生徒も商売の手ほどきして貰っている。これ以後の授業は退屈で退屈で、重苦しくって、胸に何かがつかえたようで我慢できなくなる。そんな時、先生におこられるのは承知でサボる。サボらずにはおれないのだ。……」

二、サボリに関するアンケート集計結果

サボったことがあるかないのか
なぜサボったのかまたなぜサボらないのか



サボリに関する意見

1　男

- サボリの善悪は各自で判断し、サボるサボらないは各自の意志にまかせる。
- サボリとはサボった経験のある人でなければわからない。
- 授業を聞いていないのならサボってもよい
- サボることはよくないと教えられてきたし、そう思っている。
- 親のすねをかじって学校に来られるのに、無駄にしてはいけない
- 学生の本分は勉強であるので、サボりたいがサボらない。
- サボってうしろめたさを感じるのなら、サボらなければよい。サボるなら堂々とサボりたい。
- サボリとはスリルを味わったり、解放されたいという気持ち、また自分自身のあせりの表われである。

1　女

- サボるサボらないは各自の意志にまかせ、やりたくない者に、無理に勉強させる必要はない。
- サボる気のおこらないような環境にしていくべきである。
- 授業料がもったいない。
- サボる理由としていくらでもきれいごとを並べられるが、実際、当人はそう考えていない。
- サボリとは、次元の低い無知な生徒が権力への意志表示の欲望の転位として表われたものである。
- サボリによって自己の存在を見つける。
- 単位がとれればサボってもよい。

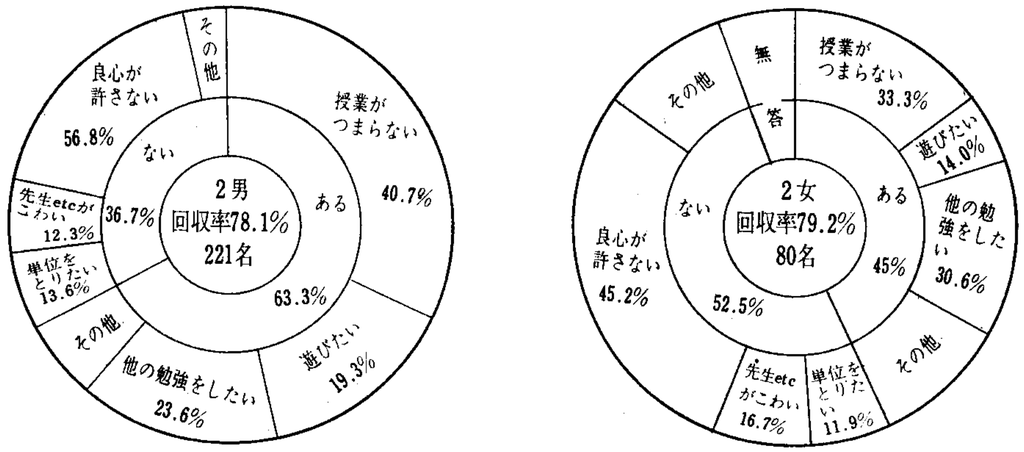
サボリに関する意見

2　女

- どんな理由があろうともサボリはいけないことである。
- 自分でその時間が有意義だと思えるのなら悪いとは思わない。
- 教師側にも問題があるので、討論会を開く必要がある。
- 自分で責任がとれるのならサボってもよく、他人がとやかくいうすじあいのものではない。
- 憂鬱な気分で授業を受けるより、サボっている方がよい。
- 伸び伸び生きられる手段なら、サボってもよい。
- 与えられた授業を受けることは当然の事であるし、自分の為でもあるから、サボるのはよくない。
- サボることに関し何とも思わなくなったら危険である。
- 他人に逆惑をかけないのなら何をしてもよい。

2　男

- サボるサボらないは個人の自由意志にまかせればよい。
- サボることは絶対にいけないことである。
- 有益ならどんどんサボってよい。
- サボリとは現授業体制に問題があることの表われである。
- 欲求、忍耐度の爆発の一つの表われである。
- サボらないでいられるのが不思議である。
- 試験勉強の為にサボらなければならないとはなげかわしい。
- 勉学は学生の義務であり、サボるということは義務を果たさないことになる。
- 学校に来るのさえ随性でるべきである。
- 単位がとれる程度までならサボってもよい。



サボったことがあるかないか
なぜサボったのか

（昭和47年１月実施）

三、義務と良心

このアンケートを見ると、今さらのように、そのサボる人の多い事に驚いてしまう。が、それだけで終わらずにもう一度よく見直して欲しいと思う。〃なぜさぼらないか〃という質問に対して、ほとんどの人が〃良心〃が許さないと答えている。質問の仕方がまずかったのもあるだろうが、はたして、〃良心〃という意味をはっきりと理解して答えてくれた人が何人あっただろうか。私にはその〃良心〃という言葉が妙にひっかかるのだ。

高校において、授業を受ける〃権利〃と〃義務〃があるとよくいう。

憲法第二十六条（教育を受る権利）

「すべての国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する」

教育基本法第三条（教育の機会均等）

「すべて国民は、ひとしく、その能力に応ずる教育を受ける機会を与えられなければならないものであって…以下略」

私は、〃権利〃とは、この教育を受ける権利の事だと考える。それでは〃義務〃は、と尋ねてはっきりと答えてくれる人は何人いるであろうか。確かに答えられないのも無理のないことだろう。それが小学校や中学校なら「学校で授業を受けるのは義務教育だから」と答えれば済むが、なにしろ高校は義務教育ではないのだから。

高校に入学する時、書類の中に「誓約書」というのが入いっていたのを覚えているだろうか。

「右は、このたび全日制第一学年に入学許可をうけました。ついては校則を堅く守らせることはもちろん、在学中の同人の身上に関する一切のことは、私どもで引き受け、学校の指示に従って処理することを誓約いたします」

これがその内容である。このことを頭においといてもらいたい。

ルネサンス時代、ホッブスはその著書「リヴァイアサン」の中で、人間を情念のままに行動するものとして定義し、その状態が人間にとって最も自然な状態だとした。しかし、それでは人間は他の人間と利害のために常に争わなければならない。そこでその人間の持つ〃自然権〃を〃国家〃に総て渡すことによってその争いをさけてきた、と〃国家〃の成立を説いた。この場合、個人の自然権は〃国家〃にすべてあずけられたのであるから、当然個人は国家に絶対服従しなければならないものとされる。

高校生の〃義務〃も同様に考える事が出きるのではないだろうか。すなわち、高校内での生活において私達の〃自然権〃を総て学校にあずけたと考えるのである。ゆえに、授業を受けることも当然〃義務〃と解釈できるわけである。

前にもどって考えれば、〃良心〃とは、その〃義務〃を守ることに他ならない。それからいえば、サボるという事は、そして〃良心が許さない〃という考え方は、確かに一理ある。いや、二理も三理もあると思っている。しかし私には、それではサボリを〃逃避〃という側面でしかとらえていないように思える。もっと学校と私達を違う立場からみることはできないだろうか。

四、権利として

先程、ホッブスの国家論を簡単に述べたが、そのホッブスの四〇年程後に生まれたロックは、国家を、みんなで契約して特定の者に各人の自然権の一部を委託したものだとした。そして、委託を受けた者は権力をもち、法を執行し、みんなはそれに従う。この場合、この法は人為的なもの、すなわち契約によってできた法であるから統治者といえども従うものであり、その法をはずれて勝手に権力を行使することは許されない。では、もし統治者が法に従わないときはどうするのか。ここからロックの〃抵抗権〃という考え方が生まれた。それは、統治者が権力を乱用して国民の権力を侵害することになれば、国民はその統治者に抵抗すると共に統治者を交代させることが出きる権理を持つというものである。

私は誓約書をその委任状と解釈する。そして学校と個人を契約という関係から考えたいつまり私達には学校を批判したり、抵抗したりする権利がそなわっているということをいいたいのである。

アンドレ・モーロアは、幸福論のなかで「具体的な幸福を定義する前に、まず幸福を妨げるものの表をつくって、問題をぐるりと取り囲んでみる方が、おそらく、いっそう容易だ」と言っている。いったい「私達が真の教育の姿を捜すより、それを妨げるものを捜し出していく方がずっと容易だ」ということが、私達のまわりでいえないだろうか。

あるクラスの週番日誌に、こんな事が書いてあった。

○近頃クラスの中は乱れに乱れている。文化祭を中心に少しずつ変動して来たようだ。誰しも、各々悩みを持ち、自ら苦しんでいる。もっとみんなで話し合い、理解し合うべきだ。授業をサボっても、悪いとしかるよりも、「何故サボった」のか聞いてあげる方が、数倍の価値があると思う。

（僕のひとりよがりの考えより）

○我々はもうおしつけられたものにガマンができなくなった。我々は、新しいものを知る必要があるのだ。そして、我々は知る。おしつけられたものの虚しさを、創造の喜びを。何を創らなければならなかいという義務感は心の憔悴を招く。そして、苦しんで、苦しみぬき、またもとの忍耐の生活へもどるだけ。もっと注意して私達のまわりを見まわしてほしいと思う。まわりには問題だらけなのに、私達はもうすっかり慣らされてしまっているだけなのである。

五、高　校

「高校三原則」という言葉を知っているだろうか。それは「総合制」「男女共学」制「小学区制」の三つで、これは日本の敗戦後、アメリカの占領軍が日本のこれからの教育の方針として示したものである。最初は伝統ある旧制の中学校や女学校をなんとかして残そうと反廃を続けたが、次第にその意義がわかってきた。そして、教育という見地からは、決して反対すべきものではなく、むしろ卒先してやっていくべきものだと思われるようになったのである。

ここで一寸その三つの意義を説明しておきたい。

まず総合制というのは、普通課程と商業・工業などの職業課程も総て同様に、将来の進路や男女の別なく共通必修の課程を学び、その上に個人の適性・進路に応じた選択教科を自由選択するという仕

組みである。

男女共学制とは、説明の必要もないと思うが、戦前は、貝原益軒の「男女七歳にして席を同じくせず」という言葉があたりまえのように言われていた時代だから「男女共学制」ということは特筆すべきことであったろうと思われる。

最後に小学区制だが、これは簡単に言えば、「一つの地域から、一つの高校へ」という考え方なのである。だから、小学区制であれば地域によって自動的に進学する高校が決まっているのである。そして成績の良い者も悪い者も、平均して各学校に入ることになる。

もし一学区に数校という中学区制や、十校以上もある大学区制になってしまうと、どうしても、〃学校を選択する〃ということが起こってきて、一流校・二流校というような見方がされるようになる。それが長い間には、学校にはっきりとした格差をつけてしまうのである。

さて、この三つのなかで、根本は「総合制」なのである。それを各地域のなかに保証し、男女平等なものとしていく為に「小学区制」「男女共学制」が当然必要になってくる。こういう具合に、この三つは相互に密接な関係をもっているのだ。

私は、この「高校三原則」が絶対に守られるべきものと信ずる。しかし、現在の高校の姿をみてもらいたい。〃総合制〃の高校がいったいどこにあるだろう。高校に入る時の〃学区制〃だって、それは「小学区制」でなく「中・大学区制」である。「男女共学制」も疑問がある。例えば、我が新宿高校と駒場高校である。いったい男女の比が三：一とか一：三という値はどこから出てくるのだろうか。

「高校三原則」の破壊、それは簡単なことである。三原則がそれぞれ密接にかみあわさっているだけに、そのうちの一つが少しでも崩れてしまうと、それは時計のなかに入ったゴミが最後には時計を狂わせてしまうように、三原則を総て狂わせてしまうのだ。そして実際にそうであった。

昭和三十一年、全国に先がけて、愛知県では〃小学区制〃が〃大学区制〃に切り替えられた。これは実に特筆すべき事件である。なぜなら、それ以後は他の県でもどんどん「中・大学区制」にあらためられ、それが今にまでおよんでおり、その「中・大学区制」こそが今の受験体制の礎になっているといえるからである。

愛知県教育委員会は、「大学区制」の理由をこう記している。

(一) 小学区制をはずせば、子供達は希望する学校へ行ける。それが、教育の機会均等である。小学区制は進学希望者に選択の自由を与えない。これは民主社会における自由精神に反することになる。

(二) 学校を自由に選ばせることは若い者の希望と向学心を正しく伸ばし発展させる。

(三) 大学区制にすれば、もぐり入学がなくなる。

(四) 大学区制によって入試競争が激しくなると、小・中学校の教師が教育に励むようになる。

(五) 義務教育がゆがめられると言うが、これは制度の問題ではなく、運営の問題であり、教師の自覚さえあれば防止できる。

これらの理由は、一寸みると正しそうだが、実際問題として考えるとかなりの疑問点があるのだ。

(一)では、まず「選択の自由」という言葉が目につく。この〃選択〃

とは何をさしているのだろうか。もし、「あの学校には良い先生がいる」というようなことならば、それは先生の質を高めていく方法を捜すべきである。「小学区制」においては、総ての学校の格差をなくし、独自のスクールカラーを作り出すことが目的のはずだから、もしそれが、各校のスクールカラーを指しているのなら、「選択の自由」には確かに一理あるだろう。けれども、それも「希望の自由」にとどまってしまうだろう。なぜなら、結局、その学校に入学できるのは「特殊な、優秀な生徒」だけになってしまい、それでは本当の教育機会均等にはならないからである。

(二)についていえば、この場合の〃向学心〃とは、入学試験の為だけのもので、それでは単なる競争心と同義になってしまう。ちょっと余談になるが、イギリスの思想家で「原水爆禁止」のアピールで知られているバートラン・ラッセルはその幸福論のなかで競争についてこう述べている。

「禍は個人のなかにあるのではなく、人生は競争であるとする現代人の人生観にある。優勝者のみに尊厳が払われるという人生観は、感性を犠牲にして意志だけを不当に養おうとしている」。

現代において向上するとは、競争にうち勝っていくい事に他ならなように私には思える。

(四)は現実の問題として考えてみたい。教師が入学試験のために必至なのは事実だと思う。しかしそれは〃励んでいる〃のでなく〃激んでる〃のではなかろうか。

教　師

① 何よりもまず教え、育てることに最大の喜びと熱情とをもち生徒ひとりひとりと互いに心が通い生徒に無限の愛情を注ぐ人。

② 既成者としてでなく、目的に向かい、理想を目ざして絶えまなく精進する、よき意味での「夢みる人」たること。

③ それゆえに、精神が若々しく、接するすべての者が励まされより高く、美しく、真実な世界に目を向けざるをえなくさせられるような人。

教師は教育の本質に近づくうえでの努力をする必要がある。しかし、(四)の教師の問題は、受験勉強を教師が激しくやる結果を招くだけであって、それは教師が教育に励む事にはならないであろう。受験勉強は教育の本質とは全く異質なものであるから。

最後に(五)であるが、これはまわりをよく見わたせば答えはすぐにでてくると思う。やはり、いくら教師の自覚があっても、いくら努力してもその力には限界がある。たとえ、その授業が本来の姿であったとしても、授業を受ける者は、受験に役立つか役立たないかで位置づける。そうはっきりと断言はできないが、そうはっきりとなりやすいのは事実である。結局は、まわりの力におしつぶされて受験勉強になってしまう。やはり、義務教育の学校の予備校化や教育の歪を教師の自覚によって防ぐことは、無理な要求ではないだろうか。たとえ一つの学校のなかに〃教育〃があっても、〃受験〃のあるかぎりそれを保つのは至難の技なのだ。

こうして、ともかくも「小学区制」は「大学区制」へ移っていった。そして、それに共なって「男女共学制」「総合制」も崩れるにいたったのである。

六、多様化

「中等教育が中学校と高等学校とに分割されていることに伴う問題を解決するため、これらを一貫した学校として教育を行ない、幅広い資質と関心をもつ生徒の多種多様なコース別、能力別の教育を教育指導によって円滑かつ効果的に行なうこと」

これは文部省の「学校教育の改革に関する基本構想」の中に書かれている。世の中にはできる生徒とできない生徒がいる。ここに、教育というものがある時、教育は、できる生徒のためにあるのではなく、できない生徒のためにあるべきものである。これには誰も異論がないと思う。しかし〝多様化〟はそういう目的ではない。「できる者とできない者を選別して、それぞれに適するコースをあてがってやれば、みんなは満足して勉強についていくことになるだろう。そして社会での人材需要も〝多様〟なのだから、多様なコースをそれに見合ってしつらえておいて、〝適切〟なふりわけに従っていけば、就職も有利になっていく」

どうだろうか。これが〝多様化〟の姿なのである。「多様なコース別・能力別」というのは、できる生徒とできない生徒の別であり、それを「円滑かつ効果的に行なう」というのは、結局のところ、「中学校からできる生徒とできない生徒により分けて教育していきますよ」ということなのである。それが「総合制」という理念になっているかどうか、一目両然である。すなわち答は、断じて否！

今の教育は　私達とは無関係に進んでいる。そして、私達が〝将来〟を保障される為には、何がなんでもその流れにのっていかなければならない。私達の目の前には、大学受験という壁がまちかまえている。そして、好むにしろ、好まざるにしろ、結局はその中に入いっていかなければならない。入いっていかなければ、ばかをみるのは結局自分自身なのだから。

〝受験〟は現代の多様化のなかで重要な位置をしめている。ではそれは無くてはならないものなのだろうか。

「新制高等学校は、入学者の選抜は、それ自体望ましいものであるという考えを、いつまでももっていてはならない。入学希望者をできるだけ多く、全日制か、定時制かのどちらかに収容することがっ結局望ましいことなのである。新制高等学校は、その収容力の最大限度まで国家の全青年に奉仕すべきものである。これまで一部の人々は、新制高校は、社会的、経済的および、知能的に恵まれた者から、よりぬいた者のためにのみ存在する。きわめて独善的な学校であるべきだと、実際に信じていたが、学校の教師、校長、または教育委員会の委員や教育長が、理論的にも実際的にもこの考えに同意するようではいけない。選抜をしなければならない場合も、これはそれ自体として望ましいことではなく、やむをえない害悪であって、経済が復興して、新制高等学校で学びたい者に適当な施設を用意することができるようになれば、直ちになくすべきものであると考えなければならない。」

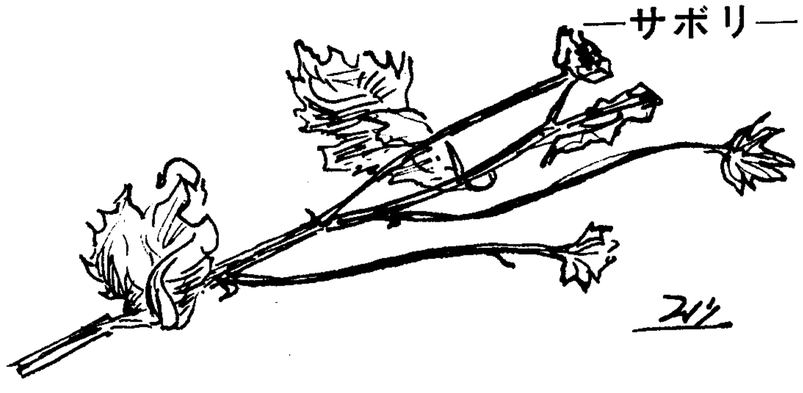
（一九五一年　文部省『新制高校望ましい運営の指針』）

「受験はないことが好ましい」その通りである。しかし現実にはおおっぴらにそれが行なわれている。―この現実―

サボリがいいのか悪いのかわからない、〝逃避〟と〝反抗〟とが自分の中で矛盾しないで共存している。しかし、サボリについて考える。それが精一杯なのだ。

テーマ論文

―サボリ―



省　察

先生方のアンケートより

「さぼり」ということばは、いちがいには定義づけられないが、ここでは一般的に「授業をさぼる」という意味で考えてみたい。先生方に対して個人的に話しを聞いてみたが、その概要は次のとおりである。

…「さぼり」をどう受けとめておられるか。

★基本的には許されるべきことではない。生徒はあくまで勉強を目的として自ら試験をうけてこの学校へ入学したのであるから常に、勉び知識を吸収するという態度を忘れてはならない。しかしながらその時々に応じて個人的に理由があるはずだからいちがいに悪いとは言えない。

★そのことば自体もうすでに意識的に行動していることとなるから成否を問うしろものではない。

★もしその授業よりも意義あると思うならさぼってもかまわない。人間どこまでもどんな風に成長するかわからない。おさえつけることによって必ずしも芽が出るとは限らない。

★どうでもいいねェ。オレには関係ないもん。

こちらから見る限りにおいて、教師の反応はほとんどない様に思える。さぼってもあまりしかられない。きつく問いただされない。平気である。何を考えているのかさっぱりわからない。

生徒が「サボル」原因について

★昔と学ぶ姿勢がちがって来ている。勉強したくてするのではないようだ。
★生徒にきいてもらえぬ様な授業をする教師にも責任があるが、生徒も学ぶ立場として、やらなければならぬことをしていない。多少甘えている点がめだつ。
★やりたいことが他にあるのではないか。
★自分が何をすべきか自分自身どうすべきかがわかっていないようである。思想をもってやる、というよりは中ぶらりんの状態のようだ。
★そんなことオレが考えたってしかたないじゃないか！
その解決方法として
★先生と生徒との相互の話しあいによるところが一番ではないだろうか。
★わからない⬇出ない⬇なおわからない、ではどうしようもない悪循環である。始めの「わからない」時点で努力をはらうべきである。
★授業中先生にあたる。
★単位おっことしそうになったら注意してやるよ。

ことばや理くつの上では先生方のおっしゃってることは的を得ているし正しい。しかしどこかちがっている気がしてならない。なるほど〃相互の話し合い〃確かに理想的ですばらしい。しかし現状はどうであろう。互いに何の働きかけもしないし、しようともしない。生徒の方ではもう先生に対して何の望みも持ってはいないのだ。大人の経験者が考え出してくれたカリキュラムの編成も今の私たちには、必修単位、卒業する資格のためやむおえずあるものでしかない。現在の授業のあり方にも問題がある、という指摘が教師の方から出ていたが、我々は授業というものを改善しようと意欲をほとんど失ない学校教育そのものに対する問いかけも全くしようとしていない。あらゆる要素を含む〃サボリ〃を解決するには先生、生徒が共に、高校とは何なのか教育とは何なのかという根本からの問いかけが必要ではないだろうか。

雑感＝サボリ

二年G組　須賀　晶彦

「サボリ」は必要から生まれる。

精神的に肉体的に何かしら必要があって、時間的・空間的に学校・授業と関係なく行動することが余儀なくなった時、人々はその原因・理由にかかわらず、その行動のみをとらえ総称して「サボリ」という。

よって、「サボリ」の形態は数限りなくあるが、それを単に羅列しても意味はないだろうから、ここではサボリを弁護する立場を取ってみることにする。

しかし、サボリの絶対的正当性を述べるのが目的ではなく、絶対的に悪いものではないことを述べるだけであり、それと同時に諸君に別の観点に立ってサボリについて考えることが可能であることを示すだけである。

生活の無目標が、認識と価値の分離・主体性の欠如を生み出し、身につけていても何の役にもたたないと思われる余計な知識を学ぶ

ために、一日の大半を費やさなければならない。変わりばえのない日々の連続である。いつでも何らかの不安が感じられるのは、自己の存在をはっきりと認識していないためであろう。それは自分が自由にできる時間が少ないことにも関係ある。無用の知識を学ぶ時間を現実に身に迫って感じられる問題の解決のために使って悪いわけがない。

ボケーッと何もしないで過ごすことのできる時間がないことや自己の存在について考える余裕がないことなどに疑問を感じないでいるのは、僕たちの中から何かが喪失してゆくことを暗示している。

積極的に問題解決の行動をしなくても、今まで何の疑問も感じなかった日常性について考え、少しでも変えることにより認識が深まり、主体は自らのものとなるだろう。例えば、授業をサボルことによってもそれは可能であろう。良い天気の日に教室の内にいることの無意味さを感じたら、授業をさぼって陽の当たるところを歩きながらでも、それについて考えてほしい。何故という疑問を持つことにより、「サボリ」も有意義なものとなる。

人間らしさを失わないためには、自分の存在について考えることが必要であり、「サボリ」もそのために重要な役割をもちうることを示しておきたい。

さぼり

二年F組　打田　宏

この問題については是非よりも、社会的な動きの中で考えたい。まず、一番身近な社会である学校でも、又、職場においても、社会一般に自由になって来た（みせかけではあるが）。学校での現われとして長髪や自由服があり、又男女交際もある。その自由の現われやそれをできない人達のうらやむ気持ちは、過去の道徳感（儒家的）に反していると思いながらも人間的であり解き放された状態であると感じ自分に焦慮に襲われるのです。多くの人は今人間的であることと道徳的であることに葛藤を感じていると思う。それは、組織社会と人間本質との戦いなのです。

十八世紀においては一般民の思想はナショナリズムで、十九世紀はヒューマニズムであり、二十世紀はリバリズム（自由主義）だとある人がいいました。これは現在においては正しいでしょう。

特にアメリカでは組織社会に対する不信感がベトナム戦争で、増大してゆき、組織社会の非人間性を感じ、戦争の影は、刹那主義を発生させる温床となった。そのような所から、ヒッピーらも増えて来た。社会よりも自分を大切に、命を大切に、そう考え、社会からはみ出してしまった。アメリカにおけるヒッピーを中心にしたフリークアウトの世界は多方面に広がり、主に芸術だが、フリークアウトという都市的、機械的であったジャズも田園的になったりクラシックをとり入れたりして脱都市を訴えている。最もフリークアウトで中心的なのがロックであり、早い時期からヒッピーの思想と一致していた。その歌詩の内容も、ビートも、ボリュームも、すべて過去の道徳的な社会を破壊する意図がある。

ヒッピー達がしている物、そのフリークアウトの行動は何かを求めている。オートバイ旅行、原始生活、マリファナ、ロックコンサート、フリーセックス、禅や仏教の東洋思想のブームや、キリストブーム（新しい姿でのキリスト）、これらは彼らの腐敗ではないの

だ。社会の腐敗に対する食菌作用だと思う。しかし、矛盾が大きすぎる。コンクリートの町の中の公園で、体に花の絵を書いている彼らに、非常に大きな悲しみを君は感じることができるだろうか、これらのことは私達にかけはなれているように感じられるが、そうじゃない。全面的でなくても本質的には同じだ。「イチゴ白書」―「YOU」―「イージーライダー」このつながりに、自分達の身近な問題であることに気がつく。

ノンポリから学園紛争、そして、古いアカデミックな教育と、学問と芸術、そして社会への反発と脱出、そして社会の制裁による死これは私達にそっくりあてはめられる。

人間らしく高校ロボット工場をやめよう、大学の予備校をやめよう、友情あふれ、太陽が輝やく、花一ぱいの学校と学園の理想を持っていた（旺文社によって作られた気持もしないことはない）ところが挫折、その後に学友に対する不信感は高校教育だけでないことを知り、失望する。そこから、個人的なつきあいの親しい少数の友人とつきあって学校では全く、他人を無視する。気の許せる少数の友人と、友情を深めるために又は、一人の寂しさをまぎらわすために、マージャンや喫茶店へ行ったりする。わけのわからない雑誌を作る、思想を論じ会う。組織社会に対する失望は、今まで勉強勉強のいい子ちゃんでやってきた私達の価値感の崩壊、それでいながら、生活のために勉強せねばならない。

刹那的でデカダンな精神状態から「サボリ」は生まれた。たとえ授業に出たって、聞いてないなら、さぼっていた方がいい息抜きになるというわけである。いくじなしと大人はいうだろう。しかし、さぼっても心は空ろで、タバコをくわえて、マージャンをする、私達の姿が、ヒッピーのボディペインティングと同じ悲しさがある。人類滅亡も近い。

さぼり―ある日の日記から―

MANTIS

三月三六日　以下の文章は誰にもナイショですよ。今日はいつもどおり学校へは行きました。ちゃんといつもどおりの電車に乗って。一時間目にはまにあいました。ちゃんと○○には出たんですから。でも本当は行きたくなかったんです。ただ、だ性で行ったにすぎませんでした。何かに反発してみたかったんです。自分の位置がわからなかったんです。性格的に、次の次の見通しが立たないうちは、次に行きたくないらしいんです。本当にこまった性です。一度、もう一度、小さな自分にもどってみたかった。だから、二時間目が始まる前に学校をとび出しちゃいました。学校へ急ぐ、いろいろな人に会いました。南口の近くで木唐行典氏に会ったけど、彼、気づかないで行っちゃった。とにかく、ナンダカシラナイケド、小田急の駅に、ぽつねんとして居る自分があったんです。Mは、多摩川べりでねころんでようと思いました。でも次の瞬間、移動している空間の先頭で、Mは、丹沢山系に行こうと確信してたんです。ただどこかへ行きたかった。それをはばんだのは社会です、人間です、そしてM自身でした。

次の時、Mは母にTELをしてました。「今新宿、今から新宿図書館へ行くヨ」って！（伊勢丹の電話機はこわれてます。）十時三十五分のバスで大山へ向いました。六十円なり。あえぎながら登っていく、バスの右手の紅葉が鮮でした。ケーブルを横目に見ながら、まださめやらぬ朝の冷気の中を、下社へ。途中、一人だけサラリーマン風の人をぬいただけで、すこぶる静かなものでした。コースタイム五十分を約三十分で登り、下社の休息所で、一杯百五十円ナリのソバを食べました。なぜか夢中だったんです。文字通り息つくひまもなく上社へ。一丁目から二十八丁目までかけ登っちゃいました。一時間三十分のところを、約五十分で登っちゃったんですから。山頂でお茶いっぱいと、ケーキ二ケ、計九十円ナリ。遠足の中学生たちが、ぞろぞろと、物見台のほうへ降りていきました。霜柱が、日かげにパラパラと立っていました。暖冬異変の為か、ひよわで、息を吹いたら、融けて到れちゃいました。山頂のぐるりを回っても、何もありませんでした。折りから雲で急に寒くなりだした山頂をあとに諸戸へ。初めてのコースでした。たしか。下り一直線、ササのトンネル。二、三回ころんだかナ。ここも、本当におりづめ。夢中で降りちゃいました。そして、ゴマ化せばいいんだな、って考えてました。大声で、知っている歌をうたいました。西に傾きかけたお日様を見ながら、おうちに帰りました。三十七日は、ちゃんと教室で授業を開いてました。あーあ、つまらないな。

「遊び」小論

二年F組　三木　悟

はじめに

僕がまだ子供だった頃は（今はもう子供ではありません）、「はないちもんめ」だとか、「かごめかごめ」だとか、今ではもうほとんど覚えていませんが、そんな遊びがまだいっぱいあって、近所のガキどもと一緒によく遊んだものです。小学校の二年坊主が確かガキ大将で、僕などはまだ小学校にもあがっていないチビ助でしたが、そんなチビ助達がガキ大将を中心にひとつのグループ（まるでやくざの一家のようなものでした）をつくっていました。そのころの様子を想像するとホントにおかしくなってしまいます。

ところで、この間ある図書館に行った時のことです。何か面白い本はないかと本棚を眺めていると、何か言いながら二人の子供が、（たぶん小学校の二三年だと思いますが）近くにやってきました。別に無理に聞く気はなかったのですが、彼らの声が大きいのと、ちょっと内容が僕にとってはショックなものだったので、つい聞き耳をたててしまいました。彼らが何どいったかはっきりとは覚えていないのですが、どうやら口ゲンカをしている様子でした。どっちがケンカが強いとか何とかだったと思います。しかし、唯それだけなら、僕らだってよくやったものですから、大したことはないのですが、その言い方が何ともキツイのです。僕もケンカの時は相当口汚くののしったけれども、こんなにイヤラシイことは言わなかったとその時思いました。昔のことだから何となくよく思いたがるという気持があるのかもしれませんが、僕らの場合いくらケンカをしてもそれは相手が自分をかまってくれないといったことが原因になってるものがほとんどで、まるで、ズルクて、イジワルな大人同士のケンカみたいなものでは決してなかったと思います。勿論昔もそういうことはあったろうし、その日僕の出会った子供は特別だったのかもしれませんが、僕はとても嫌な気分になってしまいました。そし

てこの子供達はいったいどんな遊びをしているのだろうと思ったのです。どうしてそんなことを思ったのか分りませんが、そう言えば今の子供が「かごめかごめ」をしていることなどみたことがないなと思って、だから今でも子供達がどんな遊びをしているのか知りたいと思っているのです。ホントに今の子供はどうやって遊んでいるのでしょう。田舎の子や、公園がすぐそばにある子供はまだいいだろうけれど、都会の真中で公園も何もない所の子はどうしているんだろう。裏通りも、此頃はやっと「裏通り作戦」とかいって車は少くなったんだろうけど、やっぱり危いことは危いんだろう。僕らの頃は車も少なかったし、第一空が輝いていたっけ。

さて、今度の轍のテーマは「サボリ」でした。この小論のテーマも実は「サボリ」のつもりなのです。いわば、「サボリの勧め」とでもいったものなのですが、こんなことを言うと、真面目な生徒諸君にはおこられてしまうかもしれません。けれども、とにかく一応は最後まで目を通してみて下さい。

人間疎外の風景

覚えていますか。昨年の暮（十二月八日）水俣病患者の家族の人達が、チッソに対し自主交渉をせよと、すわり込みを始めました。しかし、チッソは、その訴えを全く無視し、通路に鉄格子を築いたり、あるいはチッソの子会社を訪れた患者代表をふくろだたきにするなどの仕打ちをしたのです。以下は一月八日付毎日新聞からの抜粋です。――水俣病新認定患者の川本さんら三人は八日、東京のチッソ本社を訪れ、七日午後にチッソ石油化学の従業員が川本さんらに暴行して負傷させたことに抗議した。川本さんらは「暴行の命命を下したのはだれか、暴行したのはだれかを明らかにして陳謝せよ」という抗議文を手渡した。しかしチッソ側はこの日も同本社のある四階のエレベーターをノンストップにし、「中に入れろ」という患者の要求に、警備隊長の河島人事部長が拒否、「社長はいまどこにいるのか」との問いには「日本のどこかにいる」と表情ひとつ変えずにいってのけた。ラチがあかないため、川本さんは患者を代表して抗議文を読み上げたが「川本は十日間のけがをし、けさは痛みのため首がほとんどまわっていない」というくだりにさしかかると、約三十人の警備の従業員から「ワッハッハ」と爆笑が起った――。この記事を読んだ時、僕は、あの図書館で感じた何ともいえない嫌な気持ちと全く同じものを感じました。あの子供達が大人になったら、きっとこのチッソの従業員達のような人間になるのだろう。全くやりきれなくなってチッソの人間が憎いように、その子供達も憎いと思うのですが、それ以上に子供達をそんな風にしてしまう何かに対して怒りを覚えます。子供は本来、善でもなければ決して悪でもありません。子供を悪くするのはいつも大人達にきまっているのです。そしてその大人達のつくっている世の中に目を向けてみるとほら、何とチッソのような人間達の多いことか。何とみじめでイヤラシイ出来事ばかりがあることか。そんな中で、人間はちぢこまって、自分の作った社会の中から今にも追い出されようとしている。疎外された人間の抜けがらだけが、毎日毎日、同じ時間に、同じ電車で同じ場所へと、人形のような、そして、疲れ切った顔をして進んでいく。ゾロゾロと、まるで死者の行列のように。ちょっと大げさに書きすぎたかもしれないけど、時々、ホントにそう思うことがあります。

今、現代は疎外された人間の社会だというようなことを書きましたが、それは僕らの周囲をちょっと見回わせば、すぐ理解できるように思います。新宿の街をみてみれば公害が、そしてまた産業、あるいは観光開発という名の自然破壊。ちょうど僕らの学校をぶち抜いて通るという高速道路もまたそれと同じものではありませんか。人間は自己の生み出した科学の力によって自己自体の生存をあやうくしている。しかしこれは単に公害という、自然対人間の直接的な関係の中にのみ、見い出すことができるのではありません。現代の人間疎外の根は深く、それは、自然を保護することによって解決することができるといったものではない根本的なもの、現代を形作ってきた近代合理主義の思想そのものに根ざすものであることを、我々は明確に認識しなければなりません。会社という組織を頂点とする管理社会の非人間性。会社、あるいは工場によって端的に示される分業制の殺伐とした風景は資本主義のもつ固有の性質といってしまうことはできないように思われます。何故ならば、近代の合理主義的思考を考えた場合、そこにこそ、人間の存在に決定的な変化を与えるであろう、そして現実に与えているところの要因を見い出すことができ、資本主義社会も、あくまでもその思想の上に立脚しているひとつの社会系体に過ぎないものだといえるからです。ではこれから、この思想の底にあるものをみながら、人間疎外の背景とそれに関連して「サボリ」の意味を考えていくことにしましょう。近代の西洋哲学は一応デカルトに始まるといっていいようですが、さらにその源をたどると、ギリシャ文明とキリスト教文明にまで逆のぼることができます。このギリシャ文明というのは、分析を非常によくやったといいます。牛やら豚やらを解剖したり、人間の解剖までしていたということですが、とにかくそういった分析を何の躊躇もなく行う、要するに、客観的な事実を知ることが彼らにとっては極く当り前の、よいことだったのです。それが、近代の西洋文明の中に受け継がれてきて、何でも分析してやろうといった対象を単なる物質としかみない傾向が表われてくるのですが、その物質が在る一方で、思惟する自我というものが在る。その思惟する自我の中には死の観念というものはなく、あたかも自我が永遠に存在するかのような錯覚をおこしてしまっている。それが、他の動物の生命に対する無関心さとなって、あるいは自分自身の生命に対する無関心さにさえもなってくるし、同時に彼らの自然を客観的にみることによって真実を発見するという「知」とは、根本的には、自然を支配して、自分の利益に役たてようという考えであってそのために実に綿密な計算やら、実験やらをやるわけです。だからそこには自然に対する畏敬の念や、美しい自然に接した時の喜びといったものは、大した意味をもたなくなります。夕焼に染まってピンク色になった雲を眺めていても、あれは高層雲だとか積雲だとかいったことだが彼らにとって意味あることなのであって「きれいだなあ」という感情さえも、あれやこれやと分析しようとする。なんとも哀れな人種が彼らであり、また現代に生きる人間達なのです。ここでちょっとある人間を頭に思い浮かべてみて下さい。彼はある観光会社の社長だとします。彼は北海道かどっかへ旅行にでかけて、そこで雄大な自然に出会ったとします。広大な原野を流れる一筋の河、どこまでも続く地平線。そして今まさに地平線に沈まんとしている夕陽と、その光にそまった茜雲をみて、彼は何を思うでしょうか。偉大なる大自然を前にした人間の存在のはかなさに、ひしひしと胸に迫る感慨を果して抱くでしょうか。僕はそうであってほしいと思う。けれど

も、それはたぶん無駄な望みだと思います。その時彼の頭に浮ぶものは、たぶん、この土地をいくらぐらいで買って、それから何をつくればいちばんもうかるか、ホテルか、それとも大娯楽場か、等といった考えに違いありません。これは悲しいことだと思います。しかし、これが現実なのです。

死の無視と生の喪失

先程、デカルト的な近代的自我の中には、どうも「死」の観念がないのではないか、ということを書いたのですが、デカルトについて詳しく勉強した訳ではないので、本当はなんともいえないのですが、どうもそんな気がするのです。死をみつめないということは生きることができないことだと思います。自分があたかも永遠に存在する主体のような幻想におちいって過ごした人間の一生は一体何なのでしょうか。彼にとって、彼の死は何であったのか。それは彼の幻想にピリオドを打ったということなのでしょう。そして彼の一生は、それによって、完全に幻想に過ぎなかったことを示されるのではないでしょうか。現代人は極端に死をきらう傾向があるそうですが、それは、まるで自分が限られた存在であることを信じないと自分にいいきかせようとしているかのようにみえます。このような「死」の喪失がこの観光会社の社長さんにもありありとうかがえるのですが、少しこの現代の「死の喪失」について話をすすめていきたいと思います。確か「創造の世界」という本の中に「現代における死の意味」という報告が載っていました。この中にロスアンゼルスでは、重態の病人を家族とあわせず、病人が死んだ後は即ちに葬儀屋の手で飾られて、家族は最後にちょっとみることができる、ということが書いてあったのですが、何故、病人を家族に会わせないかというと、その方が生理的に病人によいからなのだそうです。これに対して市川亀久弥さんが「このような所から現代人は科学とか合理主義の名のもとに人格無視を公然と行っている」と憤慨しておられましたが、彼の怒りは全く正当なものです。現代にとって、死は絶対の恐怖であり、少しでも長く生きる――いや正確には決して死なないこと――だけが意味をもっている。それは人間が死ぬ最後の時間、現代では酸素吸入やら何やらで非常にあわただしい、静かに死ぬということがないということにも、また以前ならば完全に死んでいる人間を生理学的に生きているということで、スイッチひとつによって命をたもたせているということにも表わされているし、同時になるべく死から遠ざかろうとして、死体を死ぬとすぐ焼場へ直行させる。

以前、死体洗いが、最も値のいいアルバイトだと聞いたことがあります。ベトナムから送られてきた米軍兵士達の死体を洗うと一日に四、五千円になるのだそうです。それにしても、死体洗いとは、何ともキツイ話ではないですか。こんなことを平気でやる人がいるなどとは、とても信じられないと思ってよくよく自分はどうかと考えてみた時、僕は自分の中に、もしかしたらそんなことでもやるかもしれないもう一人の自分を見つけてゾッとしてしまいました。実際、今でも僕は自分が絶対にそれをやらないという保証をしかねているのです。「目をつぶって鼻に綿でもつめれば、何てことはないじゃないか、とにかく五千円は大きいよ。」とでもいいそうな自分が、どこかにいるような気がして仕方ありません。いや、確かにいるようなのです。ゴヤのカプリチョスという絵の中に絞首刑になった男の歯には魔法の力があるという迷信を信じた女が歪んだ顔をそむ

ながらも、死刑囚の口の中に手を入れてその歯を抜こうとしている場面を描いたものがあります。この女と死体洗いのアルバイトをしている人間の姿とは、どこにも違いがない。自己の利益の前には、人間の死さえもが何の意味ももたない、そんな人間の姿がカプリチョスの中の女であり、死体洗いであり、そしてそれは、遊ぶ金のために殺人を犯すこととどんな違いがあるというのだろうか。

死者を目の前にした時、人間は一体何を思うでしょうか。戦争は人間を狂わせるという。確かに戦争は人間に人間を殺させないではおかない。だが戦争は常に、爆弾によってバラバラにされたベトコン兵士の上半身を掲げて笑っている米軍兵士のように、死者の意味を失わせてしまうものでしょうか。いや、だが、もしそうだとしたら、人間は今の時代には存在しないはずではないか。芥川龍ノ介の「羅生門」に出てくる老婆は死者の髪の毛を抜かなければ生きていけなかった。その時老婆は死者を無視し切っていたのだろうか。同じように戦争においてさえも、人間を殺さずには生きていけない人間は、同時に死者を無視できないでいるはずではないか。例えば、先頃、芸術院会員になることを拒否した大岡昇平氏のように、死者は生者の中に永久に失われることなく有り続けている。黒ずんだ肉塊が、そして、その肉塊の放つ鼻をつく異様な腐臭が、人間に人間の存在を決定的に知らすはずである。その時、人間は自己の存在を消滅させ、そしてまた再び自己の存在を決定的なものとしえるのではないだろうか。

しかし現代の人間にとって、死者はどんな意味をもっているでしょうか。死者は人間の存在を、あたかもピカドンの焦燃によって焼きつけられた人間の影のように、生者の中に完璧に焼きつけるという、その役割を果たすことができるのだろうか。カプリチョスの女の中に、死体洗いの男の中に、そしてあの観光会社の社長の中に。自分の意志によらずに生まれ、また自分の意志に関係なく消滅していく存在、つまり時間的経過の中における自己の認識によって、人間は自己の欲望の空しさを知るだろうし、それによって初めて「生きる」ことが可能になるのではないでしょうか。対象を全て物質化して分析していく近代の科学的精神は必然的に死の喪失につながっており、それは必然的に「生」を消滅させる。そうして失われた生の空虚が、現代の人間に死を恐怖させているに違いないのです。「欲望という名の止まらない電車」現代を表現するのにこれ程適切な言葉はありません。自己の欲望のためには何ものをも顧りみず、自分以外のすべてのものからも閉鎖され、無限に進んでいこうとする電車の中にいる人間たちにとって、全てのものは自己の目的を達するための手段となる。人間関係においても、自然との関係においても、あの観光会社の社長は自己の利益のために、自然に対する感動を忘れてしまったし、同じく自分が生きていることの感動さえ忘れてしまっているようにみえます。

サボるということ

さて、いよいよここからがこの文章の核心に触れてくるわけなのですが、そこでまずは僕の個人的な体験を語らなければならないかもしれません。といっても別にたいしたことではなくて極く極く当り前のことなのです。要するに僕は今十七歳なのですが、その十七年間に小学校に入り、卒業し、中学校に入学し、卒業し、今、新宿高校の二年に在学中だという唯それだけのことなのです。が、唯そ

れだけであるがために、それは僕にとっていや人間にとって全く特殊な体験であるように思うのです。およそ過去の人間の歴史において、生まれてから十七年もたった子供達が労働もせず、一日の内のほとんどの時間を家あるいは校舎などといった建物の中ですごしていた時代など存在しませんでした。たぶん大部分のいわゆる庶民の子供達の中にもこのような子供がでてきたのは、一〇〇年も昔のことでないでしょう。なぜこんなことをいうかというと、僕は今、自分が十七歳だということどうも信じられないような気がするのです。果たして自分は十七年間も生きてきたのであろうかなどと考えると、全くいやになってしまいます。ハッキリいって、そんな実感がひとつも湧いてこないのです。これはなんと悲しいことではありませんか、空しいことではありませんか。小学校までは結構嬉しいことがいっぱいあったのでよいのですが、中学校から今までのことを僕は全く覚えていません。この五年間は僕にとって、カッコよく言えば空虚なのです。僕の人生にはやくもポッカリ穴があいてしまった、と自分では感じているのですが、考えてみれば、今まで僕の歩いてきた道というのは、あらかじめ決められた、小学校、中学校というレールの上に、さらにもう当り前のようになっている高校進学というレールなのであってその中では、いちいち何を何時間学ぶかなどということがキチンと決ってしまっている訳です。そんな訳で僕は僕達が、「あらかじめ失われた恋人たちよ」という映画がありましたが、あらかじめ作られた人間達ではないかと思うのです。「サボる」ということはひとつはこの決められたレールからはずれようとする試みであるように思います。（衝激の告白！ 僕は実際よくサボります。）がそれでは、今まで書いてきた「欲望の無限追求と生の喪失」とこの「サボリ」とがどのように関連しているのか、これから説明していきましょう。大ていの人は「脱サラリーマン」現象という言葉をきいたことがあると思います。此頃はあんまり言われないような気もするけれど、以前、よく使われた言葉です。サラリーマンという極端に管理化され、自分でものを創ることの決してできない存在、その存在から脱しようと、ラーメン屋のような、手づくりの仕事を求めること、それが「脱サラ」だと僕は思っています。つまり彼らにとって、会社の「仕事」はもはや何の意味ももたない、そこに何の歓びも感じることのできないものだということができます。何故ならば現代においては、全てのものは自己の利益を満たすための手段なのであって、手段自体には、何の意味も与えられないからです。要するにサラリーマンにとって、会社の仕事とは、「よい生活」をするための手段にすぎず、仕事自体には歓びなど存在しないのです。昔、労働は単なる「よい生活」のための手段ではなかった。旧石器時代の猟師は仕事である猟それ自体の中に歓びを見い出していました。その証拠には人は今、レジャーだといって狩猟を楽しんでいるではないですか、また新石器時代の農夫もさらに後の時代の職人達も、労働はそれ自体実に大きな意味を持っていたはずです。現代の日本にも、極く少数のになってしまいましたが、職人達がいまだに生き続けています。彼らの仕事には決して営利目的とはいえない何か、職人魂というようなものが在ります。職人は彼の仕事の中に彼の魂を込める。頑丈な使いやすいものをつくる、つまり、いい仕事をするのです。それは、仕事が単なる手段ではないことを意味しています。けれどいつの間にか、仕事は「よい生活」の手段になり下がってしまった。それが現代であり、

「会社の仕事」なのです。それと同じことが僕らの所謂「勉強」にもいえそうです。当初勉強自体の中にあった意味というものが、失われて目的とは、「いい生活」で「勉強」はその手段となってしまった。勉強はあくまで「いい生活」のための手段であってそれ自体には何の意味もないといったことが、当然のような現状。そこで、「いくら目的が変質したといっても、勉強という手段をとる以上、その過程において、勉強の歓び（目的）は感じることができるはずだ」という疑問が出てくるとおもうのですが、それは次の理由によって、否定されます。それは手段の自己目的化というやつで、ある目的を達するための手段、あるいは形式に過ぎないものが、いつのまにか、それ自体が目的のようになってしまうもので、例えば、宗教における儀式のようなものです。もともと、勉強は目的と手段とを分離できるものではないのですが、目的が別のところに現われた（いい生活のため）と同時に、形式（頭をテストに使うこと）が、本質を離れて、独自に存在できるようになり、それが、自己目的化して、形式＝勉強ということになってしまったのです。つまり、勉強の本質ではない単なる形式、頭を使うこと、知識をえること、が「勉強」といわれるようになり、学校で行われている授業がそれのように思います。勉強しようという内発的欲求、自然発生的な意欲の意義は無視され、将来の地位であるとか、財産であるとかが、その唯一の目的と化すのです。このような状態において、学生は「勉強」の中に何の意味も見い出し得ず、勉強を放棄するか、いやいやながらも将来のために勉強するかのどちらかになり、これがサボリと「欲望の無限追求」との関係だと僕はいうわけです。「欲望の無限追求」それは、また自分の「勉強」という行為に対して、何らかの空虚を感じさせずにはおかないように思われます。勉強を形骸化させてしまったのは僕ら自身である以上に学校であり、教育体制であり、ひいては、現代社会の底流をなす思想なのです。自己の利益、欲望のためにあらゆるもの――労働も、勉強も、人間の死も、そして人間自身さえも――ただの手段と化してしまう、近代の合理主義的思想、あるいはその上に立つ資本主義社会の中にこそ、我々が立ち向わなければならないものがあるように思います。僕らの中に、「確かに受験勉強は苦しく、厳しいものだし、皆が青春を謳歌したいという気持はわかるが、この厳しさに耐えてこそ、人間は成長できるのだし、このような困難に正面からぶつかっていくこと自体が青春といえるのではないか」という人がいるだろうけれど、彼自身、実は受験勉強あるいは普段の勉強の中に歓びを見い出せないでいることは、彼自身の言葉によって明白です。しかし、それでもなを、彼は将来のためには受験勉強しないわけにはいかず、一方、自分がそのような打算で生きていることを認めることもできない。そこでなんとか受験勉強というものの中に意味をみつけようとし、自己を正当化する。そうしてみつけた意味が厳しさなのでしょう。しかし、厳しさは、その厳しさを超える大いなる歓喜を持つ時に初めて意味を持ち得るのだと思います。初めに歓喜があり、それによって、あるいは同時に、厳しさは生まれるのです。彼が受験勉強の厳しさの後に感じるものが空しさだけでなければいいと思います。しかし、だからといって皆に授業をサボろうという訳ではありません。「サボリはいけない」といって、決してサボろうとしない仲間を僕は尊敬する。彼らはきっとこう言うでしょう。「現代に生きるあら

ゆる人間達が、重くるしい工場で、冷たい会社の中で、苦しみ、生きているのに、なぜ自分達だけが楽をすることができるのか。」あまりにも真面目である彼らは決してサボることができない。彼らには何もいえない。しかし、その真面目さ故に、彼らを縛りつけ、苦しめる奴らを僕は憎む。サボリは、現代の人間疎外の状況から逃れようとするあるいは抵抗しようとする心だ。しかしそれは退廃と紙一重の位置にある。退廃は、社会から逃がれようとしながらも社会に順応していかなければいられない人間達の姿なのだ。彼らにとってサボリは、人間疎外の世界からの逃避ではなく、人間の世界からの逃避だ。彼らは、疎外の今以上の進展を妨げることすらできないばかりか、彼らこそが、人間の疎外を完璧なものとするに違いない。

おしまいに

では、勉強自体にある意味とは何でしょうか。その本質は、それは「遊び」ではないでしょうか。勉強するのは、それがとても楽しいから。勉強することは歓びであってそれ以外のなにものでもあるべきではない。人は狩りをし、土をたがやし、同時に楽しんでいたし、土を耕すのは、唯、米をつくりたいからではなかった。「私は田を耕やし、その田に米はできる」生きるのは「今」であって未来ではない。だから今を生きたいように生きる。それが遊びだと思う。結果がどうなるかわからない。けれど、たぶん田を耕せば、米はできるだろう。でも米ができるかどうかなどは別にどうでもよい。「それでは君は人類に原始時代に戻れというつもりなのか」と問うかもしれない。確かに僕は、人類が原始時代に戻ればいいと思っている。けれども、また同時にそれが不可能であることも知っているつもりだ。子供のままでいられるものならば、子供のままでいたい。だが、子供には子供の、老人には老人の生き方があるように、人類にも年に応じた生き方というものがたぶんあるのだろう。子供にはやはり子供しかなれない。

今、人間はひたすら「知識」を求めている。近代科学、合理的精神に基づいたそれはあくなき知識の追求だ。そこには「人間のための」などという目的意識はない。あくまで知識のための知識なのだ。しかし、そこに生の消失した欲望が結びつく時、欲望の無限追求が生まれる。あくなき知識の追求、それはちょうど人間のある時期に似ている。やたらとものを知りたがる時期が人間にもあるではないか。だが、その時期をすぎ、人間がやがて、青年の時代を歩むように、人類もまた青年の時代を歩まなければならない。人間の人間であることの生命活動、あるいは、生きるがままに生きること、それをあえて「遊び」といいたい。遊びとしての学問とは、学びたいという欲求のままに学ぶということであり、芸術も遊びでなければならない。子供の生活は「遊び」そのものだ。しかし僕らは子供にはなれない。僕らにのこされたものは遊びを求める心だと思う。僕らが意識を持ってしまった以上、遊びも意識しなければならないのだ。そこに人間は互いの人間を認めるはずであり、時間的経過の中にある自己を認識することによって、祖先の魂を永遠の彼方へと語り継ぐことができるはずである。今、僕たちは遊ぼう。いや、遊びを知ろう。正に生き残るために。

自由論文

ある視点から

二年B組　平塚　公平

戦争などで、その悲惨な状況が報道されると、多分に同情心を含めて、「罪の無い人々が、無惨にも殺されていく……」と、いう文章が見られる。一体、戦争に於いて何を罪と言い、誰を罪の無い人々と呼ぶのだろうか。

その多くの場合、罪とは、国家、国民を、戦争の導いた事を指すと考えられる。戦犯と呼ばれる人々は、この罪を犯した人々を、言う。戦争を、罪であると決定的にみなすならば、この事は成り立つ。そこで、戦争という罪を犯したのは、果して、導いたという罪を犯した人々だけなのだろうか。そういった人達だけであると、限定し、断言して良いのだろうか。確かに、そういった方向づけ――具体的には、戦争の為の物的準備と参戦意識の高揚、その他――をしたのは、一部、指導者階級の国民であったかもしれない。しかし、その方針を受け入れ、それに従い、その結果、戦争への接近に加速度を与えた責任、言い換えれば、戦争を許した責任は、全国民にあると考えなければならない。何故ならば、その方針を受け入れず、従わず、そして、加速度を与えなかったとしたら、それは、逆にブレーキとなって、戦争は起こり得ないはずである。

「知らないうちにこうなっていたんだ」「気づいた時は、もう遅かったんだ」「こうなると知っていたら……」そんな無関心と意識の欠如は、国民であるがゆえに、許されない。

戦争は罪であるという意識が、国民自身にあるとすれば、罪は芽

生えた時に摘み取っておかなければ、戦争を許した事になる。そして、これも、当然罪になる。一体、戦争へ導いた罪と、戦争を許した罪とは、結果的に、何らかの異なりがあるだろうか。戦争を許した罪は、その行為が依存的、受動的、消極的、あるいは、無関心であった為、積極的な、戦争へ導いた罪とは、心情的に差があったとしても、戦争と言う罪の前に、それらを並べたとしたら、それらは何の差も無くなってしまうのだ。だから、罪のある人々とは、一部の国民のみに限らず、一般の国民にも言える事なのだ。ただ罪の芽生えを摘み取ろうとした者のみが、無罪と言えよう。しかし、彼らさえも、戦争という現実が起こった時には、その反戦運動は、何の意味も持てなくなり、ただ単に、罪を犯さなかったか、あるいは避けられただけに、過ぎなくなる。――おそらく、戦争が起こった時、彼らの運動方針とか手段が、問われる事になると思うが――これは、ベターであって、決してベストではない。不可避と思われた戦争を何とか食い止めた者、戦争の芽生えさえ許さなかった者が、戦争という罪に対して、正当な行為を為し得た人間と言えるだろう。

以上の事は、日本のように平和な(?)少なくとも、たった今、戦火を味わっていない国の人間のみが、言う事を許されていると思う。何故ならば、戦争国にとって、そういった思想を許した体制のままでいたならば、つまり、戦争が罪であるという意識を取り除かないでいたとしたなら、勝つ事が根本であるはずの戦争に、たとえ負けなくても、勝てはしないではないか。もっとも、「戦い」そのものを目的とした戦争をやっているのなら、話は別であるが。だから、目的を果す為には、当事者達にとって、戦争を行なわない事を罪とし、行なう事に正当性を持たせる必要が生まれてくる。全ての戦争を正当化する事が出来なくても、少なくとも、自分達の戦争は、正当化しなければならない必要が生まれる。そして、戦争を行う為に、必然的に生まれた、戦争を肯定する体制の中では、愛国の士という兵士が生まれ、非国民という戦争逃避者が生まれ、また、犯罪者という反戦運動家が、彼らの戦争の正当性を貫く為に、必要に迫られて、誕生させられる。

現在の日本のような国では、反戦、つまり戦争否定こそが、正当な考えだと唱える事が許されていても、戦争国に於いてではそんな言論は、罪に成されてしまうのだ。

戦争を、絶対的に罪と考えるか。あるいは、基本的には罪であるが、例外的に、罪にはならない、正当であると言える戦争があると考えるが。あるいは又、戦争は全て、正当だと考えるか。戦争は基本的に正当であるが、罪になるものもあると考えるか。そして、戦争をしている国の国民であるという罪と、戦時国における、反戦という罪のどちらを背負うのか。戦争に於いて、正当なのは、その肯定か否定かのどちらか一方しかない。罪は、参戦と反戦、どちらか一方しかない。

いづれかの、正当と罪を選んだら、正当はあくまで守り、罪は徹底的に排さなければならない。安易な妥協は許し難い。勿論、戦争を肯定したとしても、戦争至上主義は避けなければならない。不必然な木を、芽生えた時に取り除こうとすれば、一人ですむかもしれない。しかし、それが大樹と成った時は、多くの人間が必要となり犠牲も生まれるかもしれない。

我々は、そして今、正当と罪とが逆転しないとは言い切れない、

そんな社会に進んでいる。その事実から決して目をそらせてはならない。罪と正当を選択した時、その時に有る現実を、いかにして正当な罪を誘発する物にさせないか。この事は、選択や正当さを貫く事と共に、大切な事だと思う。

安全に自転車に乗るために

二年E組　大谷純一郎

最近の過度の交通戦争は、あしたの命もわからないほどである。しかも無謀かつ異常な精神を有する人間によって、これらをさらにひどいものにしているのは悲しいことである。

ところで、自転車に乗ること、つまりサイクリングも健康的で誰にでも楽しめるスポーツでありながら、道路事情の悪化のため、都会の人にとって非常に危険なものになっている。まして、気晴らしとか楽しみのために乗りまわすことは、ほとんどできないであろう。結局自分の家の付近で乗ることになる。今日の自転車は軽量で変速ギアもついている為、スピードはかなり上がり、特に歩いている人には気をつけなくてはいけない。

前方を見て人が歩いているのを認めた時、あなたがまずすることは、その人がどちらの方向に進んで歩いているか、つまりこれからどこへ移動するか、道路を渡るのか渡ならいのか、道路のどのへんをどの方向へ進んで行くのかを、視的直感によって確かめるのである。そして次に歩行者が進む方向を推測し、その反対側をスピードをおとして通るのである。特に商店街で買物の頃などは道路の真中を歩いている人がいるようだが、よく見るとけっして真中をまっすぐに歩いている人はいないのに気がつくだろう。彼らは必ず左側か右側へ少しは方向が向いているのである。だからこのような場合でも通るやり方は同じである。ここで大事なことは決っして警笛をならしてはならないことである。というのは、相手が自転車の来ることに気がついて、行こうとしていた方向を変更したりあるいは止まったりして躊躇するから、こちらも困ってしまう。これは危険である。警笛などにたよってはいけない。あれは実に無責任なものである。以上のやり方は、一部の場合を除いて歩行者にも乗りてにも安全である。

ところでその例外というのは何かを述べる。それは歩行者の種類によるものである。つまり老人、子供の場合である。歩行者がこれらの人々の場合は、今述べたやり方をあまり進めるわけにはいかない。というのはもし仮にぶつかったり接触したりした場合、彼らのそれに対する抵抗力は危険なほど少ないのである。百パーセント接触又は衝突はさけなければならない。絶対にミスしてはいけないのである。更に子供の場合は自分の行く方向を無心に変更してしまうことがある為危険である。ではどうするかと言うと、前方にこれらの人々の所在を確認したら、直ちにスピードをおとすのである。そのスピードは少なくともその人たちの歩いている速度までおとさなくてはいけない。そしてかなりの距離をとってそれから加速して横を通過すべきである。ところで今理屈ぽく述べたが、この場合これは本能的に行動にでなければならないのである。

「子供を見たら注意、老人をみたらいたわる。」

こういった気持ちは自然に動作に出て欲しいものなのである。そし

てこれは他の場合も通じるたいせつな心がけだと思う。この気持ちさえあれば、上記の理屈ぽいよけ方も理屈ぬきで自然と身について出てくるであろう。

警笛について、これは非常にやっかいなものである。ここでそれを使用するわずかな場合について述べる。それは住宅街など車の通りの少ないところで、歩行者が何人かで道路いっぱいに並んでいて自転車の通るすき間もない時である。その他大通りを自転車で走っている時、前方の左側の横道からでてきた自動車等（いったん一時停止はするだろうが）に対して、自動車に気がつかれない時があるから、警笛を使用すべきだろう。そしてこの時スピードをおとす事は重要である。この他にもあるだろうが、ここでは除くほど、重要ではないものである。警笛はあまり使うことは考えない方が良い。警笛をよく使う人はへたくそだと思って間違えない。自動車などでもそれは言える。

最後に、何と言ってもスピードは控えめにすること。けっして無理をしてはいない。無理をするのは自分の能力の限界を知らないからである。能力（スピード感覚、技術）内で乗ればけっして事故はおきないであろう。

「ゆったりとした気持ちで乗ること」

これがすなわち安全に自転車に乗るための心がけである。

葛藤

二年D組　本田　真也

ここに対話がある。その情景なるものは何もない。一見、無味乾燥と思えるかもしれないが、一人の人間と一人の人間との葛藤であることは、確かだと思うのである。

M　君たちは、一体何を求めているのか。又、ドイツの哲学者ニーチェが言った、「神の死」をどのようにとらえるのか。

C　まず、言っておかなければならないことは、僕は、哲学者でも、神学者でもない。僕のもっているチッチャナ知識と単純ともいえる思考にまかせて、ただ、言うだけである。一つのイデオロギーの代表の意見ではないことを覚えていただきたい。

何を求めているかに答える前に、神の存在というものを話さなくてはならない。未開社会において、植物や動物等が、神であったりする（文明社会にも、そういうような物は、見られるが）又、クセノファネスが言ったように、エチオピアの神は、髪が黒く、しし鼻をしているというようなものもある。それから、哲学的にみた、最高善としての神、第一原動者としての神がある。しかし今日、神が、あそこにいるとか、ここにいるとかなどと定義されるものでない。主観的に思い、感情的にあこがれたものの投影でもない。又、理論的に考えだしたものでない。そういうものは、時が経るにつれ、信じられなくたっている。つまり、そのような神は、何でもない。認識不可能な現実といったものは想像することさえ困難だ。故に、この現実は、ただ一つの現実であるという理解が深まり、神と出会うならば、この現実でしかないという認識にいたる。それを可能なさしめるものは、聖書に証しされているイエスという人間を通してである。彼は、超成的世界に姿を表したのでなく、この唯一つの現実に実在したのである。そして、取税人や罪人たちと同一にな

り社会からのけものにされた人々を受け入れ、彼らと共に食事をし連帯の上において生き、高い地位にある者と低い地位にある者との区別を無視し、人間として受け入れ、当時の律法主義にこり固ったパリサイ人を中心とした抑圧的社会体制を、こわしていったのである。それで、彼は、激怒をパリサイ人たちにおこさせ、十字架にかかった。その彼の人格を通して神を見い出すわけである。そして、彼が示した、人間の底にある、どうしようのないもの、自分を絶対化し、神を信んじないというものを罪とし、それからの救いを希求することである。それは、すでに、得たとかいうものでなく、得ようとする斗いを意味するのである。ニーチェの言った、

M　チョット待ってくれ、ここにニーチェの書いた文献があるので読んで見る。「諸君は、昼日中、ちょうちんをともして、『おれは神を探しているのだ』『おれは神を探しているのだ』、と叫びつづけた狂人の話を聞いたことはないか。そこに、神を信じない者が大勢いたので、彼の叫びは爆笑を買った。『さては、神が行くえ不明になったというのか』と一人が言った。『神が子供のようにまい子になったというのか』ともう一人が言った。『それとも、かくれたのかな』『我々がこわいのかな』『船に乗ったのかな』『移住したのかな』などと口々にののしり合い、笑い合った。狂人は、彼らの中に飛びこみ、彼らをにらみつけて叫んだ。『神はどこへ行ったか、教えてやろう。おれたちが殺したんだ。君たちと、この俺が。俺たちはみな、殺害者なんだ』」、というわけである。

C　非常にユニークであるような気がするが非常にするどい、一種の恐怖を感じた。「神の死」ということは、単なる神というものは、我々と全く関係ないと言うものでなく、むしろ彼が『殺害者』と言った所には、今まで自分たちのより頼んできたものがもう存在しないという、実存的苦しみがあると思うのである。僕は、この中から人間が単なる超越的なもののみに目を向けて現実との関係を切り離すことを否定することを見いだすと同時に、実存的苦しみの中に我々が常に位置しているのではないか、その苦しみを問いかけ、それをぬけだそうとするのが、信仰ではないかと思うのである。『殺害者』と言う所は私が実在するということと神というものが切りはなせない。離した所には、何もないということを記しているのではないかと思う。

M　僕はむしろ、神―殺す―殺害者という中に、歴史的流れをみいだすわけである。キリスト教の歴史において、宗教裁判、魔女狩り、天動説のような自然科学の探究の抑圧、又、抑圧的社会体制の存在を正当化し、さらに、その一部権力者と一体となって、宗教信条などによって、その被抑圧者が、矛盾に対し、立ち上がるのを防いだ。農奴―ギルド―マニュファクチャー―工場制機械工業という資本主義形成段階においても、それが著しい。ヨーロッパのブルジョワジーは、宗教が、労働者、農民に対して聖なる認定を与えることを知っていた。物質が、すべてをきめるものでないというが、我々を形造っているものは物質であり、歴史的先導性の主体、つまり、歴史の被告物であるとともに、創造者であるのが、我々である。社会的要因に我々は形成されるのである。宗教による、不幸な結果は、自己を自己自身から疎外し、貧因によるのである。神の存在を豊かにするが故に、自己を貧因にするのである。そして、それは社会の現像を、科学的形態をもって、見ることをやめさせ、幻想的におちこみ、その抑圧にたえることのみ専念する。まさに、アヘンであ

る。

C　確かに、君の言った歴史過程においての判断は正しい。しかし、物質が、すべてを決めるものかどうか疑問だ。もちろん、その欲求によって形造られていくのであるが、それらのすべてが、得られたとしても、人の心は満足かどうか。「人が、すべてを得たとしても、愛がなければ、一切は無益である。」と思うのである。存在が意識を生む、確かだ。しかし、その意識の方向性というものは、その物が存在するというその存在が、すべてを決めてしまうのであろうか。その方向性は各人によって、さまざまである。君が言った、宗教裁判等、又、資本家が、キリスト教を使って圧迫したこともまちがいない。だが、それは、本来キリスト教によって、正当化されるべきものでない。そのことについて、現在にいたるまで、反省しなければならないだろう。アヘンと言うが、それは、人間が、超越のみに目を向け、「神、神」と言いながら、自分のエゴイズムを、神の名を借りて行うときに、アヘンと化す。イエスが、人間であるときに、どういう行動をしたかをみなくてはならない。アヘンは、一時的幻想であり、自分が自分であることをやめさす。けれども、キリスト教においては、自分を徹底的にみつめることであり、自己否できない自分を、あくまで自己否定しようとする。つまり、自分の主体性の確立と、自分との闘いである。

M　しかしながら、君たちは、何かをしなくてはいけないといっても、ただ、祈れば、そして、聖日の礼拝を守れば、すべてが解決すると思っているのか。キリストの言った愛によって幸福になれるのか、結局は、「隣人を愛せよ、」と言う、ヒューマニズム的言のあいまいさによって追求しないではないか、現在教会は、自分たちの自己満足にひたり、資本家と同じように、一つのおえらい階級を作っている。原始キリスト教においては、抑圧された人民の運動であり、奴隷の宗教であった。そして、当時の権力と対抗して、勝利を納めたが、その革命的蓄積は、人間の救済を、歴史的此岸的未来でなく、天的世界におくことによって、消散させられたのではないか、

C　確かに、祈っていれば、すむことではない。今、目の前でたおれている人に、「神を信じろ」と言ったところで何もならない。彼には、何よりもまず必要なものは、パンなのである。その人が、人間としての最低の権利を、まず、回復しなければならない。「隣人を愛せよ」というのは、何でもかんでも許し、妥協するものでない。まちがっていることについては、ノーである。だけれども相手が、人間であることを認め、憎しみ合い、いがみあうのを、いましめる言である。又、一人その連帯をも意味すると思う。

「現在の教会は……自己満足にひたり……おえらい階級を作っている。」という話が出たが、そのことについて、教会の内部からも批判が、おこっている。例を上げてみれば、二年前、京都丸太町教会において、青年信徒によって、＜造反＞が伝えられた。日曜礼拝の終り近くに、百人くらいのうち、同志社の神学生と思われる五～六人が、「礼拝を討論会に変えよう」と呼びかけた。そのうちの一人が、マイクを牧師からもぎとり、提起した「今の教会は、礼拝をしていればこと足りると思っている。ただ、日曜だけ教会は、礼拝をしていればこと足りると思っている。ただ、日曜だけ教会にきて、「おはよう」「こんにちわ」という言をかわす場だけであってよいのか、安保に対して教会は、どう答えるのか、イエスに従うとはどう

いうことなのか」と、この問いは、現存の教会に肉迫的すごさをもってせまってくる。福音というものは、単なる神を伝えることでなく、社会的要因が人間をいかに、束縛し、疎外していくかを科学的に認識し、その実践を行う中において、その社会的要因が、人間の内部構造をすべて支配するのでないということを知らせるのが福音ではなかろうかということをこの出来事は、我々に知らせるのである。もう一つ重要な出来事がある。それは、戦争責任という問題である。戦争のときに何故、その動きに立ち向かわなかったのかという論議が自問という形をとって教会に起ったのである。しかし、その侵略戦争を肯定したわけでない。何人かの殉教者もいた。一人一人が、厳しい弾圧化に絶えていたのである。故に、この問題は、過去のあやまちを再び起さないために、反省して進んでいこうというものである。今まで、長々と言ってきたことは、次の、フランスの哲学者、テイヤール・ド・シャルダンの言に収束されるのではないか。「私の意見では、キリスト教がまず地上への約束へと改心させられるのでなければ、世界は、キリスト教の天的約束へと改心させられないだろう。」

M　君たちが、自己矛盾と思われたものを自ら打ち出して、さらに新しい認識によって先導していこうとするのはわかった。又宗教が、いついかなるところにおいても人々を闘争と労働から遠ざけるテーゼは、歴史的諸事実に対するはなはだしい矛盾であることは、なんとなくわかった。だが、君たちにとって実践とは何か、今の体制を変えるのは、社会革命によってであると認識する。

C、僕は、キリスト教に、マルクス主義は多くのものを与えてくれたことを認める。だが、高度資本主義社会における賃金搾取に対する、マルクスの攻撃には賛成するが、この搾取を完全に克服する最良の道が、プロレタリアートによる暴力革命とは思わない。というのは一つの階級が絶対化されない、すべての徳を与えられると、それ故に、自らの行動は道徳的あいまいさに盲目となるのではないか。この自負が、目的のためにいかなる手段を用いても正当化されることが恐ろしい。我らは、あくまで非暴力であろう。でも、人間として、相手を抹殺するという意味でなく最低限の物理的抵抗はあるだろう。しかし、そこには大きな問題が横たわっている。疎外された人々は彼らの闘いにおいて、新しい疎外を作りだすことなしに、いかにして疎外に対して闘いうるか、又、罪人は新しい罪を作りだすことなしに、いかに罪に対して戦うか、そして暴力なき王国は、暴力を用いることなしに、いかにして達成できるか。これらは互いに未知の問いかも知れぬ。しかし、我々は最終的には、人間の悲惨が、人間がまだ達成していない可能の中にすべてがあるのではなくて、さらに深く人間の現実的不可能性ないし、失われた可能性の中にあると認識する。

ここに、不完全な形をとり、支離滅裂となってこの対話は、終るのでなくて中断する。みなさんもわかったと思うが、MはMARXISTであり、CはCHRISTIANである。何故、こんなことを書くことになったかと言えば、三年前、「青春の墓標」という本がでた。この本は、奥浩平という二十一歳と六ケ月のときに、自ら命を絶った学生の遺稿である。彼は、青山高校のときは、安保阻止高校生会議で活動し、以後、横浜市立大に入学し、マルクス主義学生同盟・中核派に属する学生活動家であった。椎名訪韓阻止羽田闘争で、警棒の一撃によって鼻硬骨を砕かれ入院したり、恋人との失

恋などを契機とし、服毒自殺した。彼の高校時代の同人雑誌に、MとCという対話形式で、マルキシズムとキリスト教というものが描かれていたわけである。それを見て、僕自身だったらどのように展開するかを試みたわけである。彼は最後にこう言っている。「キリスト教とマルキシズムとは始めから意見を闘わせるべき性質のものではないかという疑問があった。全く観念的に〃神〃を唱えるキリスト教と、全く唯物的に〃階級闘争〃を唱えるマルキシズムは、どちらかを一方が正しいと言えるようなものでなく、現在の世界の二本の平行した柱となって、青年の心を支えているのではないか。私たちがそのどちらを選ぶかということは、どんな見地に立って世界をみつめるかという点にあるのではないか。」と。

僕は、ある部分について彼とは反対の立場をとるわけである。僕は、今、マルクス主義哲学者とキリスト教神学者のある者たちにおいて、自らの主体性をなくすのでなく、互いに、その背後に価値と献身の創造的資源を見出そうという心構えを反映する事実が開けつつあることを、知ったのである。（ラインホルド・ニーバー、ロジェ・ガロディ、エルンスト・ブロッホ等、多くのプロテスタントカトリック神学者とマルクス主義哲学者がある）。今まで、マルクス主義とキリスト教が、全く異質なもの（本質的には、そうであるかもしれないが）近よれないものだという観念がある。しかし、互いに進められるべく多くの点をもっているのではないか。人類の現実的悲惨の下で苦しむということも共通している。人類の歴史的闘いにおける彼ら自身の役割及び教会の役割を明確にしようと努力するとき、互いの相互作用の只中へと我々を推し入れるのである。この対話は、おもにキリスト教が、マルクス主義より多くのものを与えたことを示したつもりであるが、キリスト教が、彼らに与えたものは何か。ある本にこういう文章がある。「聖書的終末論は、現在の悪しき時代の諸限界を突き破るところの質的に新しい未来の出現を指さしている。それは、現在の時代が、「新天地」のために否定されうるのだという約束を提示する。この待望は、人間が自らを希望の人間として、つまり質的に新しい未来の約束に開かれた人間として理解するように導く。そのような理解において、人間は、現在の世界と闘い、さらにはそれに対決し、そして歴史的主導性の主体として新しい世界の創造に参与するように力づけられるのである。このような分析の論点は、それが、ブロッホ及びガロディ両者に対して、聖書的終末論が、現実に対する革命的姿勢の根―それは、マルクス主義的人間観にとって基本的な姿勢であるが―含んでいることを暗示していることである。」つまり、キリスト教的超越理解は、これから先の人間の開放性が、歴史の中で、創造的役割、又は、追求を果たせうる仕方を探究するための刺激を、マルクス主義者に与えるのである。ガルダススキという人は次のように問いかけている。「マルクス主義的無神論者は、彼がすすんで負おうとしているような人類の未来に対する同じ責任を、キリスト者に期待できるか。彼は、キリスト者に有意義であるあの理念、つまり、神の国の到来のために働くという共同責任を、自己自身のためにひき受けうるであろうか。」

個人的悔改めと社会革命による和解というものが、これからの課題ではなかろうか。

自由のために

三年F組　大久保剛史

まずアナーキストのやることは自由を追求したまえ、そして真の自由とは、自由の定義とはなにかを考えてみたまえ。しかしこの世の中のどこに自由などがあるのか。どんな自由主義者に頼んでも自由はもらえないだろう。

アナーキストは権力からの自由を勝ちとらなければならない。この権力は国家権力、警察権力から温情的干渉主義まで。すべての権力のシンボル操作からの自由を勝ちとることだ。その方法は簡単だ。「完全黙秘せよ。」そして黙秘とは権力のシンボル操作との闘いであり、不当な自由の束縛に対する闘いである。一言もしゃべるな、おしになれ、一人ごともいうな、仲間とも雑談するな。アナーキストにとって存在するのは自分の個の世界だけであるということを忘れるな。自分の個の世界で口を割ったということは、世界中でゲロしたことと同じことだ。そしてアナーキストは個の自由を追求しているのである。国家などは存在しない、また世界などは存在しない、ただ個の集合体があるのにすぎないのだ。

もっとも積極的なシンボル操作からの自由とはなにか。シンボルオペレーションの本質とは言葉であり、行動である。権力のシンボルオペレーションを崩壊させるには、言葉を発せられないように、行動を起こさせないようにさせることである。そのためには我々は一時的に連絡し合い、逆に権力へ向かってシンボルオペレーションを行なうことである。（アナーキストは個の自由を追求するのであるから長い期間の連体などは現実矛盾である。）権力のバランス操作である。世界中のアナーキスト諸君、連絡せよ。

すべての権力や干渉に絶対に服従しない。自分のためになることでも、自由を束縛されると思うなら、断固抵抗するというアナーキストとにとって、世界を崩壊させる手段がある。その方法は「自殺」である。無政府主義者、抗権力主義者は、自殺によって自我をとりまく全世界を殺すことができる。これこそ偉大的自殺である。アナーキストにとってすべての権力から逃げまわることは死につながるかもしれない。しかし、アナーキストの行き着く所が野垂れ死にであっても。また自由主義者の行き着く所が行き倒れであっても。体制権力や公安（酒を飲み過ぎて頭のイカレタ連中）には従順しないぞ。

自己完全消滅

俺はやっと頂上の噴火口にたどりついた。爽快な満足感があった。自分がこの頂上に来ていることは自分しか知らないことだった。

今、自分は消える。消える、完全に消えるのである。そして自分が消えたということは誰も知りようがないことだった。消える、はたして自分が消えるのであろうか、それとも自分が全世界を消すのであろうか。どちらでもよい、どちらでも。ただ究極無があるのみ。無認識、無感覚、無知覚……。

噴火口が、大きな口をあけて、おれを飲みこもうとしている。おれは、おれの目には、全身には、その噴火口しかなった！おれには上はない、下もない、右も、左も、前も、後ろも。おれは今、今、噴火口の中を落下している。確実に落下しているようだ。確実に、

いつ落下しはじめたのか、いつ決行したのか、今は分からない。しかし分かることはただただ――落下――アアＡＨ――無。

凍死

彼は考えていた、「現在の自己」というものを。自分自身になんの未練も残っていなかった。すべてはむなしかった。苦しみもなかった、幸福もなかった、悲しみもなかった、喜びもなかった。

もうなにも信じられなかった、誰も信じられなかった。むしろそれがあたりまえだと思った。個は誤の中に浮いているにすぎなかった。結局、人間は誤の認識で生きているのだと思った。偽ではない虚でもない、無でもない、そんな、そんな理念ではなかった。現実の、それこそ強烈な臭いのする誤であった。そんな現実から彼はおさらばしたかった。自殺もできず、現実に執着する餓鬼に、虚栄をはびこらせるｅｄｏに、「あばよ」と彼はいった。

彼に寒さと、眠けと、死が近づいていった。寒さを感じずに神経がイカレて早く眠けがおそってくればいいと考えていた。もう数時間で死ねるんだなあと思った。自分が、かき氷の中のスプーンみたいになって死ぬのがなんとなくおかしかった。

身体じゅうがいたくなって、つぎに感覚がなくなるのを待った。早く眠ってしまおうと思った。まだ雪が降っていた。まわりじゅう雪だった。それこそかき氷の上に寝ているスプーンだった。

彼は孤独がいやだった。孤独のうちにも他人と一緒にいたかった。孤独から必死で逃げてきた。しかし結局は孤独だった。孤独から逃げようとすることによって、よけいに孤独が分かってきた。むしろそれがあたりまえだった、人間はみな孤独なのだと分かった。

思ったように楽には死ねないらしかった。身体じゅうが痛かった。手や足がもう凍ってしまった。たまらなく痛かった。死ぬことより助かる方が恐怖だった。現実にもどるのがイヤだった。現実にもどって恥をかくのがイヤだったからではない、父の理解のなさがイヤだったのではない、母の理解のなさがイヤだったのではない。生まれて来たことがイヤだったのではない。イヤだったのはただ現実のせつなさだ。現実のむなしさだ。

それにしても冷たい。寒さが身体にしみこむ痛さがたまらない。しかし現実の精神苦痛と比べればこんなことはたいしたことはない。もう眠い、もう眠い、早く死なしてくれ、早く死なしてくれ。

彼はもうすぐ死ねる。もうすぐ死ねると思っている。彼は凍死によって絶対自殺できると自信を持っている。高い所からとびおりるのも怖い。薬を飲むのも怖い。電車にぶつかるのも怖い。水におぼれるのも怖い。しかし、この方法で、ただ雪の上に寝て眠くなるのを待つだけで、ただ寝るだけで死ねると、確実に死ねると思っている。そしてこの方法は成功するだろう。

彼はこの世に何も残したくなかった
凍りついた死体さえも。

家庭科から一言

杉浦　文世

昔は家庭科が女子教育の中心でした。その頃の家庭科は裁縫を中心とした家庭生活技術であり、その後も家庭科といえば、料理裁縫と思われてきました。男子に隷属した封建時代の女性の家事は、女性の地位と共に低く考えられてきたといえます。戦後女性の地位は向上しましたが、家事に対する考え方や軽視があまり変わっていないのは大変残念なことです。

男女平等は男と女が同じ仕事をすることではありません。何が女の仕事で、何が男の仕事とはっきり区別することは出来ませんが、女が家庭の中心になり子供を育てるのは最も自然なかたちではないでしょうか。

新しい時代の女性は大いにその能力を伸ばし、社会に出て仕事をしてもらいたいと思いますが、そのために家庭をおろそかにするようなことがあってはならないと思います。

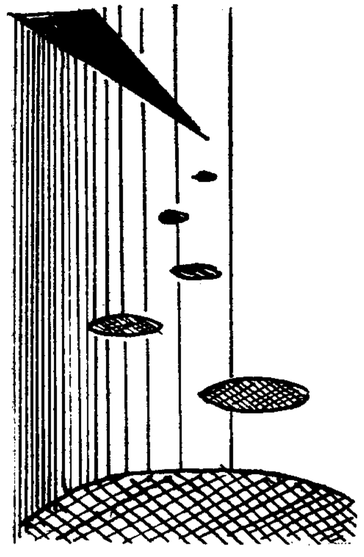
最近の家庭をみるのに、しっかりした家族の結びつきがないため不良化する子供や、蒸発する夫など考えさせられる問題がたくさんあります。人間の最も大切な素朴な願いである平和な生活は、身近な家庭から実現していくものと思います。家庭の責任を女子だけが負うことについては反論があるかもしれません。家庭は男女の協力によって作っていくべきものです。男子も今まで以上に家庭の仕事に参加してもらいたいし、「男は台所に入るべきではない。」といった古い教育をうけた戦前・戦中派の男性には頭の切りかえをしてもらわなれけばなりません。しかし家庭管理の責任者は、やはり、誇りをもって女性にやってもらいたいと思います。あたたかい愛情で家族を包み、すぐれた家事能力で信頼できる。そんな女性になるための勉強。それが家庭科です。

最近の家庭生活は衣食住をはじめとして、日進月歩の機械文明やマスコミの影響を受けて非常に変わりました。家庭科の内容もそれに対応していかなければなりません。例えば、料理も単に作る技術だけでなく、食品公害、物価高の中で健康を守る食事を考えていかなくてはなりません。裁縫は縫うことだけでなく、たくさんの既製品の中から選択し、装うことの意味を追求します又、保育については、集団保育や社会的保育を検討して、よりよい保育について考えようとします。

今の時代に自己を見失わず生活することの意義を、身近な家庭生活を通して考えていくのがこの教科です。これは男子にも必要なことであり、将来、共学の家庭科が実現することを希望しているものです。

四十八年度からは家庭科は女子に四単位必修となり「これは男女平等の原則から逆行するのではないか」という疑問が出ているので、私の考えていることを述べました。

創作



ばちなんてあたるもんか

一年E組　佐藤　広行

「昔おっかさんが言ってたっけ。『悪いことしちゃいかん。悪い事するとばちが当たるぞ、ってな。でも、おれは悪い事したってばちなんてあたらんと思うんだ。』もっともおれは、悪い事なんか、つめの先ほどもしたことがないんだがね。おれががきの頃、よく隣りのガラスが割れたっけ。だけどあれはおれがしたんじゃない。割ったのはボールだ。そうさ、おとなになっても悪いことなんかしなかった。もっともおれは箱集めが好きだった。ある日なんか。箱がどうしても欲しくて盗んじまったんだが、驚いたことには、中に宝石が入っていたんだ。おれのことを空巣をしたと言うやつがいるが、そりゃ違う。家の中にだーれもいなかったから、てっきり空家かと思ったのさ。ところがどうした、そう言ったらあいつめ、テレビがつけっ放しっただんから人が住んでいるぐらいわかるだろうなんて言いやがる。まったく頭の働かん男だ。引っ越す時。テレビを消し忘れていゃたのさ。だがまあ人間だれしも間違いはあると思って反論するのはよしたがね。そうそう、ついでにこうも言ってやがった。放火に殺人だとさ、この寒い冬だ、火ぐらいあたらせてくれたっていいだろ。おれは凍死したっていいってのかい。まあ、そう思って見まわたしてみた。おれより背の高い石がごろごろあるが、木なんてどこにもありゃしねえ。都会なんて不便な所だ。そう思って捜していると、やっと見つけたんだ。もっとも家の形をしていたがな。それに、葉の陰も見あたらなかつたけど、そりゃ冬のせいだと思つたね。しかし、あの煙のものすごさには恐れいった。このごろの木の煙はいやによくでるね。それから、ちょうどその時ナイフを買ってね。なまくらだと困ると思ったのさ。一番手近なものを刺してみたんだ。たまたまそれが人間だったというわけさ。近くにいたのが運のつきってわけだ。とまあ、このくらいのことぐらいしかしなかったのに。まわりの連中ときたら、なんだかんだと騒ぎやがる。最後にゃおっかさんまでが泣いて『おまえはなんでこんな悪いことをしたんだい』ときたもんだ。『だからばちがあたったんだ』とさ。ふん、悪いことしたってばちなんかあたるもんか。」

彼はそう言い終わると、縄のつるしてある頂上を見つめながら、十三段の階段を登り始めた。そぞろ冬風は、彼の首にしみるようだった……

後感

主人公は、自分の不正というものを直視していない。現実逃避型の性格である。そしてサボ行為はこういう精神の中に生まれるのではなかろうか。がしっかりと、現実を見つめられる人間であることを……

「おろかなわたし」

一年E組　林　宏親

私は、目をさましました。そして、目が開かないこと、口がきけないこと、体がどこもかしこも動かなくなっていることに気づいたのです。それは精神的なことから起こることなのでしょう。私のような気の小さい人間によく起こることらしいのです。ところが幸いにも私の耳は聞こえたのです。人間において一番大切な感覚といわれる聴覚だけが働いていたのです。私は、自分という檻の中で、目を開こうと、口をきこうと、せめて指だけでも動かそうと苦しんでいたのです。時計が二時を打つのだけが聞こえました。でも不幸にもその時に外で喧嘩があったようです。ふたりの言葉が聞こえた時私は、砂漠でオアシスを発見したほどの喜びを覚えたのです。が、今の傷ついた私には、かへってその傷口を広げることになったのです。そうなのです。私は心に大きな傷を負っていたのです。それは冬休みのアルバイト先での〝泥棒〟でした。何故したのかなどと話し始めますと、一ケ月や二ケ月では話しきれないのでやめおきますが、ともかく、〝他人のものをとる〟というこの恐しい行為をしてしまったのです。それは、他人には見つかりませんでした。でも、だからかえって自分の心を責めたくなる今の私なのです。自分のしたことを知るのは早いが、実行するのが遅い、これが人間のひとつの悩みであると、しみじみ思わされている私なのです。

〝この悩めるハムレット〟に決断力と行動、つまり度胸を与えたまえさすればハムレットは救われる。おそらくあやまりに行くことができる。しかしそれは無理、現実は、今の私の様に、目を開けることさえできない私の様に、自分の世界に光をつけることさえもまた捜すこともできない位冷酷なものなのです。このもっとも人間らしい状態から誰も私を助けてくれない。その人間らしい苦しみの中で私は独り苦しむ……。

私の罪は、目撃されなかったと、さきほど断言してしまいました

が、そんな確証はまったくないのです。もしかすると目撃者はいてそして彼は黙っているのかもしれません。私をそっとしておいてじっと見守っているのかも知れません。いいえ、もし彼が私のような人間でなければ今頃とんでもない事態になっていて、この罪をもち出して私を傷つけ出すかもしれません。たとえ、今はそうでなくても彼がその罪をもち出して私を傷つけて喜ぶ、最も悪い人間であっても少しも不思議はないのですから、何時そのようなことに成るかはわかったものではありません、ああ――。私はどうしたらよいのだろう。――時計の音が聞こえる。ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ――。四時か。

とその時、目が開き、口がきけ、体が動くようになったのです。でもそんなことどうでもよかったのです。今はもう肉体を超越し精神だけに生きているようでした。夜明けまではまだ長い時間がある。私は考えることにしよう。これからどうするかを。でもその結論はおそらく、誰にも話さずにいようということになるだろう。私は気が小さいから。あなたは私を軽蔑しているのでしょう？　でもあなたにこれを告白するだけの勇気があるだろうか。まずそういう人はいないことと思う。

私は結局告白することはやめました。けれども盗んだものは、これも気づかれずに、もとのところと戻せたのです。そしてあまりに長く苦しんだので、心に光をつけようと、心に光を見つけようと努力したのです。しかしそれは出来ませんでした。そこで私は他人に光を与えることを思いついたのです。でも私はピエロではないから人を笑わせるなどということは出来ません。又、易者でもないので嘘を言って他人に希望を与えることは出来ません。でも私はついにやりました。私は五十円玉をひとつ歩道に落したのです。それを誰かが拾ってくれることを祈って、たとえそれが五十円玉でも、拾った彼は星を拾ったような気持になってくれるでしょう。拾うのは誰でもいいのです、ただ、ほんの少しでも明るい気持になってくれれば。いたずら者はその結果をみずに、その結果を想像し楽しむようになれば一人前だといわれますから……。

そうです、そんなばかみたいなことでも自己満足をしてみなくてはならない憐れな人間になってしまったのかも知れません。

それでも、自分を認めたくない、認めさせたくない私なのです。

傀儡（くぐつ）

二年C組　斎藤　成

人はアヤツリ人形だと言われる。そしてそれを自ら知っていても知らないふりをして、無理に流れに順応していくものだ。しかし、我々は何もせずに流されることを恐れる。さらに我々はその糸の存在を知った瞬間、必死にその糸から自由になろうともする。そのアヤツリ人形から脱することがはたして、今、できるものであろうか。

＊　＊　＊

Mはあすの英語の豆テストのために、教科書の暗記を必死になってやっていた。ここのところMは、英語の勉強をぜんぜんやっていないため、先生と目を会わすのがおこがましかった。高校二年も終わろうとする冬、そろそろMも自分の進路を決めようと、毎日、孤独を愛するように自分の城にとじこもがちだった。深夜放送の騒音

からぬけ出し、真夜中の森閑とした、時を超越した空間に自分を投げ出し、自由に飛びまわらせていた。近づいてくる受験にとまどいを感じ、一人、「なんとかしなくちゃ」と思い、その実、何にもしていない状態に当惑しながら、夜も二時を過ぎると都会の中でもその雑踏は少しも感じられず、時たま犬の遠吠えのようなパトカーのサイレンが遠くに響いている。豆テストの勉強も済み、目覚まし時計を巻いて床についた。この目覚ましの効は全くなく、ただ毎日必死になって起こしてくれる母への多少の敬意の意味でしかなく、実際それが鳴っているのを聞いたことなどないのである。

ところがこの日は、いつもならフトンにはいるかはいらないかですぐ深淵に落ち込んでいくはずなのに、眼がバネのようにとじてはすぐ開くという動作しかくり返されなかった。四時も回り、一睡もできない自分にあきれながら、フトンの中から目だけ出した状態でまっ黒な天井を見出そうとしていた。始発の国電の警笛がきこえたように思えた。何故か電灯などつけたくなかった。そして頭の中では、小さいころの事から回想し今の自分をどう自分なりに納得のいくように生きていこうかと、勝手な想像をしていた。たしかにまばたきもしているし、つねってみてもいたい。しかし、想像のみの世界に足を踏み入れ、夢を見ているとしか思われなかった。甘い女の子との語らいから舞台は一転して、非常に暗い討論の会場へと移っていた。友人たちの顔が無表情の木彫り人形にしか見えないのだ。赤い木で彫ってある赤猿のような顔、石炭で彫られたような黒い顔、メガネをかけている人形も見られる。普段、話をしている仲間たちなのだが、そのあらけずりな刀のあとの表情に笑いも憎しみも浮んでいない。しかし声だけはする。誰が話しているのかさっぱりわからない。Mの仲間ばかりなのに、Mには目をやろうともしない。むしろ見ないようにしていた。Mの在学している高校における学校再建についてであった。しかし片隅では木彫りの人形たちがトランプをやっているらしい。掛金は五円、十円でビビッチイ。この討論の会場は暗いのでよく見えないが、人いきれでかなりの数が動員されているようだった。しかしその人形たちはほんとうに人形であって、まったくの飾りものなのだ。討論の主体は「教育問題」であることがわかった。だがその声々は少なく、その中に自分の声はきかれない。木彫りの討論会にいるMがどういう形をしているのか本人も気づいていない。そのMの姿は、手足を鎖で縛られ口にさるぐつわをかまされた。不自由な姿だった。やがて暗い会場に目がなれてくると、意外にもMと同様な不自由な姿をした人形がいくつも並んでいる。目にはくやし涙をいっぱいうかべ叫んでいるつもりらしい。ところが、その縛られた人形たちには表情があったのだ。人形らしからぬ人形だった。しかし討論の方向は昔の体制へと移行させようとしているのだ。そしてさらに驚くべきことに討論の要を演じているのはMの友人ではなく木魚のような頭をした古い人形なのだ。そのまわりにMの仲間たちが仲間たちが無表情にポカンと聞いている。またその外側にMたちの猿ぐつわの一団がある。このとき初めてMは自分の置かれている立場、なされている束縛を発見した。Mはだんだんその討論から気持ちが離れていた。しかし、その鎖をふり切ろうとすればするほど身体に食い込んでくる。その抵抗をやめれば木魚たちは光のあるうまいもののある宮殿への道をおえてやろうとする。Mは違う身体の鎖は解かれても今度は心の鎖をつながれることを知っている。今はまだ仲間もそばにいて食に窮することはな

い。しかし討論も終わったらしく仲間達が宮殿への道を歩きだした。M達は残った。月日がたったらしく、身体の鎖にもなれ、痛みの防ぎ方を覚えてきた。だいぶ腹もへってきて、体も衰えてきた。そんなとき木魚は最後の通告に来た。「これが最後の宮殿への道を教える機会だ」M達大半は木魚から鎖を解かれ、Mを含む四、五名を残すのみとなった。解き放なされた連中の表情にあのくやし涙は残っていない。二、三十人だった仲間は四、五名なのだ。しかしその残り四名も木魚に従った。Mが最後の選択者となった。「みんなを宮殿につれていってやりたい。そんなに強情を張らずにきたらどうだい」と木魚にしてはしおらしい、優しい言いまわしでMに尋ねた。本当にMは迷った。身体の自由を守るか、精神の自由を守るか――。

朝七時、母のヒステリックな声に起こされ、あわてて家を飛び出る。ギュウギュウ詰めの山手線に乗っている。始業十分ほど前に教室にはいり、なんのあたりさわりもない話がかわされる。

そこに、掲示板を見てきたRが、満心の笑顔で、「3・4時限は生徒大会で英語はつぶれたよ。そうだよ、豆テストはなくなった。」と言って入ってきた。一同は本当にうれしそうな叫び声をあげていた。3・4時限、全校生徒大会が〝教育〟のテーマで開かれた。そして、激しく意見がたたかわされて、Mも必死に討論に参加していた。ふとMが我に返った時、全校生徒は昨夜の木彫の人形と化していた。そしてその人形達は、最後の土壇場の決議に立たされると、皆木魚にさからうことなく、物言わぬ人形としてその内なる木魚を鳴らしつつ血をもった仲間の人形を置き去り、「しかたがないさ。」と言って出ていく。皆は鎖を切ろうとはしなかった。Mはひとりその場に残り、いい知れぬ気持ちが湧きいでてきた。そして自己の木魚をかち割り、高らかに笑い続けた。ちょうどその時、昼の十二時半になるころであった。

笑いが過ぎ去ってから、どのくらいたったかしれない。午後の〝なわとび〟の時間になった。体育館の中央でひざをガックリとつけているMを邪魔にするように眼前を〝なわ〟が異様な速度で回されていた。Mがたち上がり歩き始めたが、〝なわ〟にぶつかり、腹わたまでしみとおる痛みを覚えさせられ自分の教室へ帰っていった。

「何故なんだ……何故みんなは動こうとしない　……みんな口にしているじないか『こんなじゃいけない。』って……話し合いでも合流できるのに……何故最終の決定をしてくれないの……」――「そうだね、君たちはエリートなんだ。君たちは東大という迷信に生きているんだ。それだからこそ頭の中でしか、いや、形式でしか考えをもたない。自分を守るために」教室の後ろで、Mは涙の中で渾沌と自分だけのユートピアへはいっていった。そして、また想像の中でMは暗中模索する。イバラの草原をM一人で歩き回る。見栄も虚偽もない真実の世界を。結局Mの求める世界は、現実に見い出しえないものなのかもしれない。Mのしていることは一歩外れて見てみると、それは、ユートピアへの志向、つまり空想にしか過ぎないものともとられてしまう。

どこの世界にも単々と鳴り続ける巨大な木魚の響きが何か無常感にひたらせる響きをもつ……。内なる木魚をかち割ったM。たまらない単々として巨大なリズムからの逃避をMは夢の中へ求めていった。Mの叫びは過ぎ去ったかのように、クラスには合唱コンクールの歌声がこだましていた。

反吐――へド

二年A組　伊東　重明

地べたのへド
酔払いの影が
そいつにつきまとっている
昨夜十二時すぎ
そこで――外灯の消えさりそうな光の中で
かがみ込んだ男
ネクタイがだらしなくほどけ
背広がへドで汚れても
さも気もちよさそうにしていた男――。

朝とてもいやな匂いが
へドから街に流れ出し
朝を歩み去ろうとする人間は
見ちゃいけないものを見たように
目を周辺の家の木々に向け
足の向く方向をわざわざ変える
――その中に昨夜の男が
顔を二日酔にこわばらせて
通りすぎる、顔をそむけ――。

夜、雨がふれば
へドはどこかに流されてしまう
へドはどこかに流されてしまう
もう、雨は唄なんか唄わない。
唯、一生懸命流すだけ。

次の朝――そう呼ばれるものがくる限り

（完）

一年G組　菊池　洋史

空虚な精神の内部に……自我の葛が起きる……
目覚めるものを全て否定していくような……
全ての矛盾を拡大し……無に還元していく……
飛翔していく……その先は地獄であり……
その門前からも追い払われるだろうことは（を）知りながら…
基盤を失った感性は……亡霊のごとく漂う……
自由という感念（観念）も失いながら……
社会から排斥されてゆく……
寝静まった夜のひとときだけ……
感性は肉性から離れ……解放される……
観念論者と唯物論者の無意味な論争のように……
感性と肉体は対話を続けていく……
自らに吐き出された煙草の煙は……
直接でる澄んだ青いけむりに敵対するように……白濁する……
夢を食べるバクのように……幻想だけを糧として生きるものには……みじめな生と……華麗な死が……

安易な言葉を否定するものには……孤独が待っている……
作られた感情が……そこいら中に散らばっていて……
自身の内にもあることを……見てしまう……
闇空に輝く星……それらは永遠に輝やくのか……泳（永）遠に
……
私は……知っている……暗黒星雲が……いつかは……いつか…
崩壊するのを……音もなく……

（1月30日 Sun day 2:00 A.M.）

強烈な自我によって自己を回帰せしめ
凝集された精神を
暗闇の中で独り光り輝く一個の星のように
転化したとき私の全てはそこから始まる
……そして……死も……

告　白

三年B組　花井　達也

先生私は失ってしまいました
いつ帰り来るとも知れない自分の心の操を
どうしてもそれほど価値があるとも思えない操を
亡くしてしまった今、その価値が身にしみてわかりました

でももう失ってしまいました
閃光のように私の命も一瞬に燃えてしまいました

私は失うことによってその価値を知りました
でもそれが何だというのでしょう
失った操はいったい何時帰り来るのでしょう

先生私は疲れてしまいました
嘘でこりかためた世界に身をまかせることに
先生私は逃げようとは思いません
でも先生私は貴方にききたい
私の操は一体何処へ行ってしまったのか

私は決して操を捨てたのではありません
先生私はもうやめようと思っています
私には人間が何かわからず、人生など生きるに値しないんです
先生、貴方は多勢の人に好かれています
でも好かれるだけで幸せですか

私は幸いにも誰にも愛されていません
先生は嘘だとおっしゃるでしょうが……
だから私はもういやなんです
私が死んでも
だれが本当に悲しんで涙をながしてくれるでしょう
私はもう生きるのがおっくうになったんです

先生、先生は人を愛していらっしゃいますか
人を愛するってどういうことなんですか

私は自分を愛することしか知らない
えごいすとって自称できるのですから
先生は嘘をついたことがありますね

自分の操は雨の雫にうたれあのうすぐらい窓の下に……
もう操はあの世に行ってしまったのでしょうか
先生、もう疲れすぎてしまいました
勝手な私をどうぞお許し下さい
あの世に行ってしまった操はいつ帰り来るとも知れず

私は旅に出ようと思います
帰るところがないものは異邦人とも呼ばれません
帰るところを失ったものの気持が先生にはおかかりですか
ぼんやり後をふりかえり
また何もなかったかのように前を向くものの気持が

反抗の詩

何故おわる
こんなに僕が燃えた思いが
何故おわる
あんなにたかかった心のときめきが

知らぬまに
心臓はひっそりとし
知らぬまに
僕の捨てた街は砂漠になる

何故かえる
出るときは再び見たくもなかった家へ
何故かえる
ちっとも美しくないふるさとへ

いつ再び旅立つ
気づかぬうちに遠くに去る時はくる
何故再び旅立つ
こんなに暖かな家のふとんを離れて

研究発表

七二・五・一五

―アジア・〈沖縄〉・日本―

沖縄歴史研究会　栃谷　泰文

沖縄の施政権がアメリカ政府から日本政府に返還される五月十五日は目前に迫っている。この沖縄返還に対して、日本では「沖縄はかえった、いろいろ問題はあるにせよ、まあよかった。」という一種の（根本的には無関心と無責任による）安心感のようなものまでがひろがりはじめ、ジャーナリズムも返還を既成事実とした、その是否を問わない論調へと流れはじめている。こうした「沖縄問題は終わった。」という気分の日本と返還される当の状況は鋭いコントラストをなしている。

返還があきらかにされた六九年（日米共同声明）から昨秋国会批准をきたしている。沖縄は今一大転機に立っている。この二年間余りという間は沖縄人民の様々な幻想、観念がくずれ去っていく苦痛の過程であり、又一方それらをのりこえる新しいものが生まれ出でんとする過程、二重の過程であった。沖縄人民に動揺と混乱をもたらしたものこそ、皮肉にも沖縄人民が二十数余年願っていたという本土復帰り返還だったのである。

そもそも返還は沖縄人民の願いに応えてなされるのではない。それは返還の内実をみればあきらかである。真に沖縄人民の為になされるのであれば、まず第一に米軍基地――長年沖縄人民を苦しめてきた諸悪の根源こそが全面的に撤去されるべきだろう。沖縄の軍用地は沖縄本島では二十二％も占めているのであり、「基地の中の沖縄」とすら呼ばれてきたのである。ところが米軍基地はほとんど撤去されない。そればかりか日本から自衛隊＝日本軍（沖縄の人々はこう呼ぶ）が空軍を中心として六千八百名が進駐する。

他に日本の独占資本も沖縄の地理的位置、人的資源に目をつけ進出するが、そのほとんどが石油産業等の「公害産業（企業）」なのである。

政府は、沖縄も「本土並み」にするといってさも沖縄人民の劣悪な生活、権利などを本土までに引きあげ、改善するかのごとくいっているが、これとて人民を欺瞞することばでしかないことは現実を直視すれば、全くあきらかである。沖縄人民は苛酷な米軍政の支配に対する闘いの中から多くの権利をかちとってきた（占領軍から与えられた民主々義、権利の日本と対照的）。その諸権利の中には日本に無いすぐれたものさえある（たとえば、教育委員会の公選制度自治制ｅｔｃ）。返還によって「本土並み」になるとは、具体的には「本土」（日本）の法律が適用されることである。その結果、そうした日本にはないすぐれたものは、奪される。「本土」に合わないところは強引に切り落し、「本土」と違うところは無理強いに

「本土」と同じに変えられてしまう。沖縄の持つ固有の歴史性、特殊性を押しつぶし、「本土」へと統合していく。「沖縄の日本への絶滅的同化を不可避的に伴う社会的全面再編」（沖青同の「檄」より）これが沖縄なのである。沖縄によって沖縄人民の生活は悪くこそなれ、決してよくなりはしない。沖縄人民の中から「こんな沖縄ならない方がましだ」という声がまき起っている。

実は沖縄は、沖縄の軍事基地をめぐってなされるのである。佐藤首相は「（沖縄の）軍用地継続契約が返還の前提」といっている。この返還は日本の支配者（支配階級）と米国の支配者（〃）の利益のためである。

沖縄は「極東のキー・ストーン（要石）」として存在し、軍事上の重要地点である。沖縄の軍事基地は、人民中国、朝鮮北半部の社会主義への前進を、インドシナ人民の革命闘争をはばみ、圧殺し、封じ込めるのに全く都合よい地理的位置にある。（沖縄のこの重要性はアジアの地図をみれば一目瞭然である。）アジア人民の解放闘争の圧殺を主要に任ってきたのはアメリカであった。しかし、インドシナ人民の革命闘争の勝利的前進によりアメリカはその力を著しく弱め、アジアから撤兵せざるをえなくなっている。そのアメリカの肩代わりに登場してきたのが日本である。日本はアメリカにかわり、アジア人民の解放闘争の前進をこばむ主役になりつつある。（前進をこばむことは日米共通の利益）。その決定的一環こそ沖縄への自衛隊進駐なのである。米軍基地の縮少を補完し、軍事基地を沖縄人民の反基地闘争から防衛する為に進駐する。

沖縄返還の要は自衛隊の進駐にある。自衛隊が進駐するには法的に日本に施政権がなくてはならない。そのために返還するのであって、返還の中に自衛隊進駐があるのではなく、実は逆に自衛隊進駐を合法的にすすめるために返還するである。

沖縄返還とは沖縄人民の願望に応えるかの如く巧妙に装った日米の支配者の軍事基地を核心とする取引きなのである。

しかし、沖縄人民を欺くことはできない。沖縄人民は返還の本質を見抜いている。沖縄進駐に対し、ある沖縄出身の自衛官はそれが余りも沖縄人民の利益と矛盾することに悩み、自殺してしまっている。又、自衛隊進駐予定地の瀬長村の村長は進駐を「村民の意志は自衛隊の本質を見抜けいなほど幼稚ではありません」と断っている。沖縄返還の不当性を日本に於いて糾弾した闘いこそ、察村順一さんの闘いであり、沖縄青年同盟とりわけ三戦士の闘いであった。

沖縄出身者の察村順一さんは七十年七月八日東京タワー特別展望台を占拠し、沖縄を日本がきめることの犯罪性を、又自己の過去の反省をすることのない日本人を糾弾した。彼の服には「アメリカは沖縄よりゴー・ホーム」「日本人は沖縄のことに口を出すな」とかかれていた。

沖青同国会決起は昨秋批准国会で、佐藤首相の所信表明演説の際爆竹を鳴らし、「返還フンサイ」のシュレヒコールをくり返し、「すべての在日沖縄人は団結して決起せよ！」と訴える「檄」をまき、返還協定批准を強行せんとする日本の神聖な国会を紛砕したのである。（察村さんも、沖青同三戦士も不当に逮捕され、今もなお獄中で弾圧にもめげず闘いつづけている。）

富村順一さんは語る。

「今現在、沖縄にいるアメリカ軍は強盗にかわりはない。沖縄の

土地を無断で分取った上に、堂々とまた沖縄人民を殺していった
あの日本の帝国主義者、あの犯罪者。その犯罪者と犯罪が結託し
ていま現在、沖縄問題を解決しようという。」（公判延での意見陳
述より）

沖青同は語る

「『七二年返還』は沖縄を日米共同管理の〝アジアへの侵略基地化〟
へ落し入れんとしている。」

「一九六九年十一月の日米共同声明発展後、手のひらをかえした
ように帰国後第一声から佐藤首相は国政参加を言い始めた。その
意図は明らかである。日本資本主義がアジア人のその触手を延ば
しはじめ、アジア人民の闘いに米帝国主義が後退を余儀なくされ
たことに伴う軍事的弱まりを補完し更にそこに独自の利害（アジ
アへの派兵）を見出し、その目的達成の国内再編を軍事的拡大と
沖縄返還をテコに押し進めようと企み、その一歩として沖縄人民
の強固な闘争を分断、弾圧し、日本国家への併合を既定の路線化
しよう企む日本帝国主義国家権力の攻勢であった。」

沖青同三戦士はこうした返還に真向から対決し、闘い抜いたので
ある。沖青同、富村さんはさらに叫ぶ。

「われわれは問いたい！　議会制民主主義のもとに日本が沖縄の
命運を決定することができるのかと。」（「檄」より）

「われわれは、はっきりと断言する。日本が沖縄を裁くことはで
きないのだと。」（「檄」より）

「私は日本人としての誇りをもっていません。私は琉球人として
誇りをもっています。決して日本人だとは思っていません……。
沖縄の土地は沖縄人民のものでなければならない。その沖縄人民
を勝手にいま日本の政府はきめようとしている。」（富村さんの公
判延での陳述より）

ここには沖縄返還が良い返還か、悪い返還かではなく、もっと深
い根底的なものが主張され、日本人に問われている。国会で沖縄を
裁くことができるのか、と。返還が良い返還い返還かが問題なので
はなく、沖縄の命運を決めること、返還そのものが問題なのであ
る。しかし、これらの言葉を一般的にとらえてはならないだろう。
これらの言葉はいわば私達日本人総体に対する批判のことばであ
る。日本人、その歴史、存在を根源的に問うものである。

日本と沖縄、日本人と沖縄人との関係、歴史は今まで正しくあっ
たことは一度も無い。その歴史、関係は日本（人）による沖縄（人）
抑圧、収奪の歴史、関係である。

沖縄は古くは三つの王国から成っていたが、十五世紀のはじめに
三つの王国はほろぼされ、統一政権が生まれた。その後クーデター
などもあったが琉球王国として琉球処分まで続いたのであった。が、
十七世紀のはじめ島津によって武力征服されることになって、薩摩
藩下に入ることになった。（しかし乍ら、清国にも琉球王国は朝貢し
ていて二重に服属していたのである。）薩摩による収奪はきびしいも
のであった。明治維新後、明治四年の廃藩置県とともに琉球は一応
鹿児島県の所管の下におかれたが、政府は清国との関係を断ち沖縄
県とする為に「琉球処分」といわれる処置を武力をふくんで行った
のである。琉球処分は近代日本国家への武力併合だったといえる。
そして日本から派遣された知事、官僚らははなはだしい抑圧と収奪
を行った。沖縄はいわば「国内植民地」であった。これに対し謝花
昇は闘った末、発狂して死んでいった。沖縄人は日本（「本土」）

に働きにいっても差別され、求人広告には「朝鮮人と琉球人はおこ
とわり」とさえ書かれていた。そして第二次大戦も末、日本軍人は
「皇民として、天皇につかえたよ」といった形で沖縄の人々を「祖
国」防衛の前線に駆り立て、沖縄決戦を戦わせ、又多くの沖縄人も
勇敢に戦ってりっぱな日本人であることの証しをたてようとした。
その結果、多くの青年、婦女子が死んでいったのである。いよいよ
沖縄決戦も敗北する時になっつ日本軍人は防空壕にいる沖縄人を追
い出し、集団自害を強要させ、自らは生き残ったのである。

敗戦後、日本はサンフランシスコ講和条件によりアメリカに沖縄
を売りわたし、米軍政の下に、軍事監獄へとたたきこんだのである
（第二次琉球処分）

こうした沖縄のたびかさなる抑圧、搾取、虐殺は一部の軍国主義
者、支配者によってのみなされたのではない。確かにこうした抑圧
収奪を中心にすすめたのは。彼等であったであろう。しかし、全く
無自覚にも彼等に従い、差別し抑圧してきたのは多くのふつうの日
本人――私達なのである（中国人、朝鮮人に対しても）。

こうした日本人総体の存在と歴史を根底的に問い、批判をしたも
のこそ、富村さんの闘いであり、沖青同の闘いであったのである。

このような抑圧の構造は今も相変らずある。現代日本の社会構造
は意識しないでも何者かを抑圧する構造なのである。

七二年返還＝第三次琉球処分を黙認することは、我々が処分する
のと同じなのである。

沖縄人民の闘いは、古い闘いの限界が露呈し、新しい闘いが生ま
れようとする転機に立っている。沖青同の返還フンサイの闘いは明
らかに沖縄人民の闘いに一大画期をもたらすものでった。

沖縄人民は戦後米軍政の下、軍事監獄の中で、全く無権利なまま
なされるままになっていた。しかし、過酷な米軍の支配、抑圧に対
し沖縄人民は権利をかちとる為に闘い、多くの権利を現実にかち取
ってきたのである。今の沖縄人民の諸々の権利は日本のように支配
者から与えられた権利ではなく、米軍とのきびしい闘いの中でかち
とってきたものなのである。

その闘いが政治的表現をとってあらわれた運動が、まさしくあの
「本土復帰運動」であった。「本土復帰運動」は基本的人権の保障
を「本土」（日本）と一体化し、平和憲法下に入ることによって、
日本国家に依存するという運動であっただろう。そこには米軍政に
対する闘いの困難さに対し、日本国家というものを媒介として交渉
する方が力強いという、いわば潜在的意意もあった。しかし、現実
は明らかに大きく違っていた。日本は沖縄人民が考えていたような
平和、民主の日本ではなく、醜悪な帝国主義日本へと変転していた
のである。沖縄人民は「祖国」を余りにも美化し、ユートピア化し
ていた。それは余りにも厳しい米軍政の抑圧と支配の苦しさの裏返
えしであった。

だから、返還＝本土復帰が実現し、「祖国日本」の真の姿を了解
するにつれて、混乱と動揺が沖縄人民を襲ったのである。

「もはや、とうすいの時代は終わった。あれほどまでに復帰運動の
生成から発展の過程において熱狂の眼差でもって語られた祖国『日
本』が帝国主義然とした真姿をあらわにするとき、復帰運動は自ら
を沖縄戦後史の墓標として発現しようとしている。」（沖青同、檄）
復帰運動は今や、その論理は破産し、終焉せんとしている。一つの

運動、一つの闘い、一つの時代が終わる時、混乱と動揺はさけられない。しかし、こうした混乱と動揺こそ新たなる闘いを生み出すのである。

「沖縄の人民は試行錯誤をくり返しつつも自らの行くべき方向を模索しはじめている。」（沖青同「檄」）富村さんの七・八決起の数ケ月後の七十年十二月のコザ暴動、右翼（日思会）との実力闘争をまじえて貫徹される全島ゼネスト等々の大衆的な実力闘争の展開。又沖縄人民の中から反自衛隊進駐阻止の闘いが大きくもりあがりつつある。さきに紹介した瀬長村をはじめ反戦地主の軍用地再契約拒否＝土地奪回闘争、自衛官に対する投石等、自衛隊＝日本軍進駐は増々困難さをましている。

これら一連の闘いは、もはや「本土」復帰―国家幻想を礎とする既存国家に依拠する闘いではなく、自分の解放は自分で克ち取るという自己解放の、自力更生の思想に貫かれた闘いである。その闘いは今だ端緒的なものであれ、自己の力に立脚する闘いである。

沖縄人民の自己解放の闘いは一切の私達日本人のあいまいさを許さないであろう。たとえば良い返還か悪い返還かと問題をたてることは沖縄の運命を日本がきめることを肯定し、日本人と沖縄人との決定的相違―抑圧と被抑圧―を捨象する抑圧者の問題の立て方であり、主体的な考え方である。このように問題をたてることは、日本の支配階級が「日本人」という幻想によって実際の沖縄人抑圧・別の現実を隠蔽するのを助長することに通ずるのであり、沖縄人民の自己解放の闘いに敵対するものであろう。

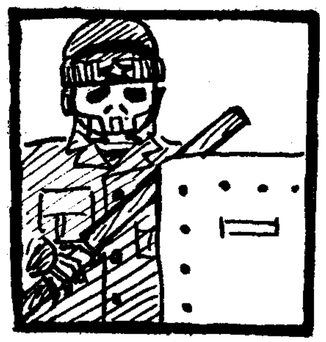
沖縄人民の自己解放の闘いの敵とはアメリカ帝国主義であり、日本帝国主義（ヤマトウ）である。この二つを打すことによってのみ、闘いは勝利し得るのである。

沖縄人民の自己解放の闘いはアジアの他の人民の解放の闘いと固くむすびついている。なぜなら「沖縄人民の対決している敵が日米両帝国主義という全アジア人民共通の敵」（沖青同「檄」）だからである。

私達日本人民は自己の歴史をのりこえ、アジア人民、沖縄人民と連帯し得る闘いを創り出さねばならない。七二年返還＝第三次琉球処分に日本人民の責務として対決し、撃破しぬかねばならない。沖青同の戦い、富村さんの闘いに応える日本人の戦列を打ちかためねばならぬ。

沖縄人民の敵、アジア人民の敵のそのひとつに住む日本人民の闘いはとりわけ重要である。日本国家への幻想を断ち、自己の力に立脚した日本人民の闘いを創出しなくてはならない。

返還の日、五月十五日、自衛隊進駐の日は近づいている。これらと対決し、紛砕する闘いを通して沖縄人民、アジア人民との連帯をともにかちとろうではないか。



クラブ報告

人文科

地理歴史研究部

地歴は一年の部員六名で、現在みんなはりきって、やっています。昨年の学園祭では、新宿の歴史をいろいろな方面から調べ、その発表を行ないました。現在は、それをもう一歩進めて新宿の住居の推移を調べています。これはかつて、人がやったことがないことで、資料は膨大ですが、みんな一生懸命にやっています。

また、冬休みには、東京の奥地の桧原村に訪れて、そこの農家などで、暖かい歓迎をうけました。

特に今年の目標としては、なるべく多くの土地に実際に行ってみようということで、一ケ月一ケ所を予定として、関東地方の各地に足を向けるつもりです。そして、夏休みなどの長期の休みを利用して、毎年一週間ぐらいの旅行を行なっています。

本年は、東海道中膝栗毛をやろうではないか、という案などがもち上がっています。このように地歴では、足で資料をかせぎまわることを第一にしています。

放送研究部

放送研究部の活動は、まず新入部員を中心に、アナウンス練習から始まります。

マイクに向かってはっきりとアナウンスできるように、発声練習から発音練習など、アナウンス読本を基礎に練習が行なわれます。

また、学園祭に発表する放送劇の製作では、シナリオの研究、キャスト、スタッフの割り当てなど、部員全員で協議し、協力して練習を始めます。

そして、二月頃は、都内の高等学校によって競われる、ドラマコントが開かれ、わがRHKは賞賛を博しております。

このほかに委員会としての活動は、連絡放送、朝礼等の準備、昼休みの音楽放送、下校放送、また運動会など学校行事に関する、放送担当もこの部の大切な仕事です。

さて皆さん放送研究部は、RHKと呼ばれ有名であることは皆さんもご承知のように、わがRHKの部員は、NHKの合格率がグーンとアップするとか？高校野球の場内アナウンスにスカウトされるとか？

部員の相互間も、明朗で和気あいあいとした非常に楽しい部です。

お話が上手になりたい方、放送劇を作ってみたい方、機械好きな方、声に自信のある方、朝礼のきらいな方（これはウソ）どんどん入部してください。

英語研究部

我々のクラブＥＳＳは当校の文化部の中でも部員数も多く、活動も活発なクラブである。その活動状況はすばらしく、アメリカンスクール訪問、学園祭における英語劇の発表などいろいろある。

ただし、我々の部にも一つの大きな欠点があったのだった。それは、ユーレイ部員が総部員数の⅓にも及ぶということであった。これは、四十六年度にＥＳＳのかかえた最も大きな問題であった。しかし、三学期になり、すこし落ちついてきてからは、その問題も少しは解消されてはきたものの、やはり相変わらずユーレイ部員の数は総部員数の⅙ほどもあった。

ユーレイ部員の多いことについてはいろいろな意見があったがその中でも特に多いのが、「ＥＳＳの活動は、内容はすばらしいものかもしれない。しかし、かたいことばかりしていて、おもしろ味があまり感じられない。」ということである。

たしかに我部の活動には、おもしろさ、楽しさというものがかけていた。

そこで四十七年度はもっと楽しい活動をしていきたい。

新聞研究部

クラブ活動において一番大切なこと、それは何でしょう。一言でいって自分を鍛えることです。もちろん体づくりや精神の鍛練の場の運動部に目が向いていくでしょう。それもけっこう。しかし、自分を本当に見つめ内的成長を促せるクラブがあるでしょうか？――あります。それが新研なのです。新研の主な活動は、新宿高校唯一の報道機関『朝陽時報』発行です。この朝陽時報は昭和二十二年から発行を始め、現在一六九号を数え都内有数の発行と歴史をもっています。我校の変遷とともに変貌を異にしてきた、実に土台のしっかりした学校新聞です。

ところが、朝陽時報は大きな転換期を迎えています。新聞の本当の姿を求めるべく、静なる変革をしようとしています。でもそれに反し内部討論の不足などからくる退廃そして部員の問題意識の欠如等により今後の発行も危ぶまれるくらいです。ここで、この局面を打壊するには、新しい人材が必要となってきます。そこで新一年、二年生で「いっちょうやったるか」という気迫の持主は是非とも入部していただきたい。

これからは、新聞を発行する他に戸山戦速報・週刊新宿を充実させていく仕事も並列してやっていく予定です。

転換期といっても、朝陽の記事内容が決して低いものではなく、むしろ堂々たるものと言えましょう。それは、学校内ばかりでなく全国的に見ても一、二を争う新聞と自認できます。論評などは、毎回好評を受けています。それに論説などを書くことにより自分の文章力の向上、さらに自己の責任感をもち、思想の追求、向上がなされること受けあいです。今、自分は記事なんか書けないと思っている人があったら、それは思い過ごしです。国語力がなくったって大丈夫、そんなことより気持ちが問題です。新聞に興味がないというのは、自分に負かされてしまう危険があります。新宿高校を愛する人なら誰でも入部することでしょう。

特典として、部費なんてケチくさいものは取りません。また、編集マンとしての充分な

編集力もマスターできます。我校にいて、これほどやりがいのあるクラブにはいらないのはおしいことです。あなた方の到来を本当に我々一同お待ちしています。決断は今――

≪一言≫

自分の書いた原稿が普通の新聞のように活字になった、いい知れぬ喜びをあなたにも味わっていただきたい。

社会科学研究部

我々社会科学研究部（通称、社研）にとって、いわゆる「主な活動」などというものはない。そんな形式的で没主体的なものはいらない。我々の具体的行動は、我々の研究活動の中で必然的に出てくる事こそあれ、決して初めから予定されているものではない。従って、昨年一年間の部活動を主体的に担ってきた我々が、この紙面で述べるべき事は「社研は何をやるところなの」ではなく、「社研は何をしてきたのか」についてだけである。

我々社研は昨年一年間、部活動を集中して一つの政治課題に中心的に関わってきた。その課題とは「沖縄問題」であった。今や今年五月十五日の沖縄返還を前にして、国内の目は「沖縄」に注がれている。佐藤政府は逆立ちまでして喜んでいる。だがしかし、その沖縄返還の本質とは如何なるものか。国内中を「核抜き返還」「沖縄奪還」「返還粉砕」など多種多様のスローガンが乱れ飛ぶ中で、我々社研はこの問題を研究し続けた。しかし、我々は決して部を閉鎖集団に惰落させたり部活動を自己満足的な方向に曲させたりは、しなかった。我々は主に「学びつつ闘い、且つそれをみんなのものとする。」という作風をとった。即ち、「沖縄問題」について部員中心の読書会、学習会、討論会などの研究活動もすれば、大衆的な隊列を形成して街頭闘争も闘い、さらに学内にもどっては全学的規模の討論集会、決定集会を連続的ビラ配りと同時に勝ちとっていったのである。とりわけ10、11月の秋期闘争に於いては我々は精力的に活動しぬいた。また、学園祭の時には我々社研の研究発表「武装闘争」を発表し、共産同赤軍派、日共革命左派によって開始された日本革命戦争について不十分ながらも分析を加えてみた。

部員を除く全ての学友のみなさん！社研に入部して共に社会科学を研究して行こう。社研を創って行くのは我々ではない君たちなのである。さあ社研を君の思い通りにすべく続々と入部し、互いに意見をぶつけあって行こう。

芸能科

写真部

写真部のＣＭ（小野小町を求む！）

外国に出かけていって、メガネをかけて、カメラを持っているアジア人を見かけたら、まず日本人だと言われるほど、日本人はカメラが好きだ。

現在、日本のカメラ保有台数は二千万台～二千五百万台、およそ一世帯に一台の比率である。日本人はどうしてこれほどカメラが好きなのだろうか。

ある人は写真を、昔の和歌と同質のものであると言っている。つまり、日本人の意識の深いところには常に無常感が存在している。そしてその短い一生の中のさらに短い一瞬を、写真や和歌は永久に持続し得る一瞬に変えてしまうというのである。

さればーーこれからが本題ダョ―我々写真部は、柿本人麻呂や大伴家持などの末裔にあたる由緒ある者どもの集まる格調の高いクラ

ブであると言えるのではないだろうか。
これは、部員のあふれるばかりの気品を見ていただいてもおわかりいただけると思うが……。

ところがである、この格調高いクラブに最近憂えるべき現象が起こったのである。それは現在の一年生の女子、つまり小野小町（世界三大美女の一人ですゾ。）や、和泉式部の末裔にあたる女史が一人も入っていないということである。

女生徒諸君（特に一年生）、あなたこそ小野小町の子孫かもしれないのです。もし、私こそと思ったら、お近くの写真部員に一言「あたしが小野小町の子孫です。」とおっしゃってください。あなたの中に眠る小野小町の才能を、永い眠りからさますお手伝いをしましょう。

—在原業平の血筋をひくものより—

理数科

物理部

「四階のかたすみにあるうす暗い、陰険なへや（と人はいうのだが）に黙々と実験を行なう者、十二〜十三人。

これが、ちまたに流れる物理部の印象なのである。

しかし、もし、あなたが物理室のとびらをあけて、私達の活動を見た時、そこに原理を探究しようとする、輝きがあるのをみることでしょう。

原理を探究するばかりが、物理部ではないのです。我々の活動において、重要なもののひとつにアマチュア無線があります。

「CQ、CQ。……。」と全世界をかけめぐる電波を支配しているのです！

情報化時代において、電波は非常に大きな役割りを果しています。交信しても、交信しきれないくらい、あちら、こちらから無数の電波が発信させられているのです。

さて、まだまだ、範囲は広がっていき、物理学のすべてを結集した、エアーカーの製作ということに発展してゆくのです。

今年度の学園祭では、知る人ぞ知るというすばらしいステレオシステムをお目にかけました。腹に響く重低音、歯切れの良い高音なめらかな中音……。

さて、昭和四十七年度の学園祭は、いかなるものをお見せできるか、今だ未知の世界にあるのです。

未知のあるわれわれ四七年度物理部に御期待ください。

天文部

大自然の神秘と驚異に立ちむかうタラブは天文部以外に考えられません。

あたかも銀の砂をいち面にちりばめたような、あるいは黒い下じきの上にケシゴムを細かくちぎってバラまいたような、星々の輝きを一度でも見たことのあるあなたなら、そのすさまじいばかりの感激を忘れるわけにはいかないでしょう。あなたの心にはっきりと思い出されるあの衝撃は、あなたの足を屋上の「天文パビリオン」に向かわせるでしょう。

そうです、頭の中に天文部の存在を、深く刻みつけておいて下さい。そしてあなたが、あの美しい感動をよびおこしたとき、さっそく屋上の、コバルト色に塗られた「望遠鏡格納小屋」に足を運んで下さい。ともに語り合い、一生の糧となるようなものを、つくり上げようではありませんか。

いま天文部は、ヤル気じゅうぶんな部員のみで、その輝かしき十数年の伝統と誇りを守って、日夜活躍しているのであります。そしてわれわれは、あなたの参加を心から待ちのぞんでいるのです。もちろん性別は問いません。男の人はもちろん、女性のあなたもわれわれの仲間に加わって下さい。矢のように降り注ぐ流星を、神秘の星雲を、輝かしき太陽、謎につつまれた惑星、そして赫奕の星団をその眼でしっかりと見て下さい。

われわれは、昼休みに屋上で、そのセンチ屈折望遠鏡を使って、太陽観測をしています。そして、数つきない天文の話に花をさかせているでしょう。その楽しさの満ちあふれたわれわれをみかけたら、ぜひ立ちよって下さい。

大宇宙の美を求める心の集合館、それが天文部です。

生物部

生物部を知ろうと思うなら、まあ一度五階の生物室をのぞいてみて下さい。ねずみとじゃれてる者、魚にお手をさせようとえさをやってる者、冬眠中のカエルを起こそうとする者、ザリガニとじゃんけんをしてグーで勝って喜こんでいる者、（これは少しうそが多いかな。）別に気ちがいではありませんよ。みんな魚や花やヘビやネズミなんかのいろいろなものそれに青い空や青い海がたまらなく好きな人達ばっかりなんです。それに先輩はやさしいし（でも時々こわくなるよ。）野外活動のときなんかとってもはりきって教えてくれる。それに各サークル≪たとえば昆虫課、植物課なんかがある、どういうわけか植物課は女の子だけなんだけど。≫の活動のときは親身になって教えてくれる。まあ生物部に入ってみなよきっと人間的に成長すると思うよ。

同好会

囲碁同好会

「全国八位」これは新聞紙上にも発表になったけれど、昨年行なわれた、「第七回全国高等学校囲碁選手権大会」での我が新宿高囲碁同好会の成績である。何やかやと言いながらも関東地区大会で勝ち進み、全国大会に出場することになった。第三回戦で今回の優勝高那覇高と当たらなければ、もっと上位にくいこんだことは確実である—（うぬぼれ？）

学園祭では、この大会で四位入賞の戸山を招待し、六人ずつの試合は引き分けに終わった。同じ時に、恒例となった我が校諸先生方との対抗戦を行なった。碁会所などで年輩の人がなごやかに対局している場面を想像してくれればいいと思う。しかし今回も負けてしまった。今年こそ…と思うのだが、この春、三年生に卒業されると非常に苦しいことになる。

そこで、もうおわかりだろうが我々の期待は新一年生に向けられる。

男の子も女の子も、そのまん中の人もどんどん入って欲しい。現部員数は二十一名で女の子が三人もいる。（将棋はいないよ）また十七名くらいまでが、高校入学以前は全くの未経験者であった。ただ、「質」に乏しいのが欠点である。今回は量より質を願い、活動の方も、そのように進めて行こうと思っている。

それから、最も重要なことは、我が同好会には、非常に素晴しい特典があることだ。新宿高の中で、我が同好会に限って、あの立派な朝陽会館での活動が許されているのだ。あなたは、我々の部屋に一歩足を踏み入れた時、「あっ。」と思わず声をあげるだろう。空を失った新宿に、どこを見ても灰色のビル街にも、こんな所があるのだなあ、と思わずにはいられない。まだ畳の匂いのするこの部

屋に入れば、あなたは、自分の家を思い出す。床の間に飾られた花はあなたの心を落ちつかせる。たまにうぐいすなどが間違って部屋に飛び込んでくる。もうだめだ。あなたの足はすでにこちらに向いている。最後にもう一つ素晴しいことは——僕がいることだ。

文芸同好会

私は頭を垂れてひと言も言わなかった。私は断末魔の苦患を苦しんでいた。苦しみながらその眼を机の上の白い原稿用紙からはなさなかった。しかし、たまらなくなって言いわけを言うために、一生けんめい舌を動かしながら、しきりに不明瞭な言葉を発するのだが、ドアのところにいる想像の彼女は、私が彼女に赦しを乞おうとしているのを察して命令するように叫んだ——「だまってらっしゃい！……よござんす！……仰しゃりたいことはわかっています！……」——そして私は口をつぐんだ。思えば昼休み、部長が急に教室にかけこんできて、「3時までに〝文芸同好会〟の紹介を書いて、たのむわ。」などと叫ぶやいなや、教室をとびだしていった。しかし、それが5時間目のはじまる寸前だったのである。そして、5、6時間目は2時間続きの体育。教室授業ならいざしらず、体育では、先生の目を盗んで書くことはかなわない。ああ、そして今は六時間目が終わった2時45分。しかも、その体育のマラソンで私は足をつり、つりっぱなしで机に向かっているのである。私は言いわけの練習をもしながら、書くべきアイデアを捜すべく教室のまわりを見まわした。けれども、そのとき、さまよっていた視線が戸口に落ちると、私はそこに彼女、石井文芸同好会長を見つけた。それはもう想像の世界ではなかった。私の言いわけが無駄であることを明らかに示す彼女の顔が一歩一歩近づいてきた。

と、いうところで、教室の机でうたたねをしていた私はおこされた、どうしてこのような夢を見たのだろう。目の前に、長い髪の中に大きな瞳をのぞかせて笑う石井さんが立っているのに。

体育科

陸上競技部

陸上部はどんなクラブかって？

そう「親しみやすい」っていう言葉がいちばんぴったりするクラブだな。

わがクラブの第一条件は手足があること、それ以外はやる気だけ。技術も力も何もいらない。誰でも楽しめる雰囲気がある。

練習の合い間の会話に一度耳を傾向けてみたまえ。一年と二年があたかも友のように話し合っている。

はたから見るときびしくもなく遊んでいるのと変わらないと思われがちだが、それは個人競技という特殊性から非常に個人を重視した練習になるためだ。従って自分しだいで急激なのびも期待できる。

だから陸上部はものすごく強い者がいると思うと、中学生にもかなわないような者がいて、しかもいっしょに何のひけめもなく練習しているのだから不思議なクラブだ。

練習は週に四日、他に自主トレーニングの日が一日ある。あまりバカみたいに走らず、科学的に、いろいろな道具を使用した練習を身上とする。

『技術の新宿高陸上部』の異名をとる。

昨年は入賞を逸しはしたが、インターハイの全国大会にすすんだ者がいたのを始め、都大会にも何人かが進出した。

参考のため、陸上部記録を一部のせよう。

一〇〇米走　十一秒一
二〇〇米走　二十二秒三
八〇〇米走　二分〇五秒六
走り幅跳び　七米〇三
走り高跳び　一米七一
三段跳び　十五米〇二

「これくらいなら」という人、そうでない人も、どんどん入部を期待する。（特に背面跳びをやりたい人はわがクラブに入らないとできない。）

女子が非常に少なく、女子の入部を首を長くして待っている。

最近、二～三年においてすばらしい記録を出した人が多く出た。この全盛期を少しでも長く続けようと努力してやまない、陸上部員たちである。

体操部

体操というとまず思い出すのが、オリンピックでの日本男子の素晴しい活躍や、飛んだりはねたり、宙返りをしたり、人間わざとは思えないようなことをやる競技、というようなことではないでしょうか。この素晴しい日本男子の成績とは逆に、一般人にとってはこの競技を嫌う人が少なくないと思えるのですが。

体育の時間にマットや鉄棒をやると聞いて喜ぶ人は少ないと思います。

確かに体操という競技は、バレーやバスケのようにだれにでもできるというものではありません。しかし、ここに体操の良さがあるともいえるでしょう。

つまり、体操ではその性質上、「できる」「できない」ということがはっきりしているのです。バレーにしても、野球にしても、上手下手はあるにせよ、一応は全員できますが、体操競技においてはそうはいきません。

素人に宙返りや車輪をやれといっても無理でしょう。ここに、他人のできないことができるんだぞという優越感や満足感というものを味わうことができるのです。

あなたは、体育の時間に跳上がりが何回やってもできず、苦労してようやく自力で上がれた時の喜びというものを味わったことがありませんか。この喜びというものは、わざの難度が高い程、また苦しければ苦しいほど大きくなるのです。このような、あるわざの習得から得られる喜びなどを生きがいに練習に励んでいるのが十五人余り。顧問の松崎先生の下で、安全なものの習得のため、週四日練習をやっています。今年度の珍事というとまずあげることができるのは、女子の入部でしょう。それに今年度は今まで大正時代のものではないだろうかと思われる鞍馬と平行棒に加え、新しいものが入り、マットの数も増え、練習場も昨年度のように旧体育館を使うようなこともなく、練習条件は良くなってきました。しかし、松崎先生の豪州行きのため合宿が中止となり成績の方はさっぱり。（それとも女子入部のためかな？）

しかし、今日も体育館の隅で黙々と練習に励んでいる我々の姿を見ることができるでしょう。新しいわざの習得のため頑張っている我々の姿を。

軟式庭球部

軟式庭球部、ほとんどの中学校にあり、大部分の人が見たり聞いたりして、よく知っていることと思う。

コートの中で柔らかいボールをラケットで打つ、見た目には非常に簡単かつ楽しそうにみえるスポーツである。しかし、試合となると、そう簡単にはいかない。相手の動きをよく見、すばやく判断し、ボールを打つ、言うのはやさしいが、やるのは以外とむずかし

い。そういうところに、軟庭のおもしろさがある。

練習は、週四回、第二グラウンドで行なっている。練習はそれほどきびしくなく、先輩ともけっこうなごやかにやっている。しかし、みんな、試合で好成績を残すために、必死に練習をやっている。そのためには我々だけが頑張ってもだめだ。今度入学してきた君達一年生諸君の協力がなくてはだめなのである。いっしょにこれからの新宿高校軟式庭球部の発展のために努力していこうではないか。

四十六年度、我クラブの一年間の主な活動を述べてみると、「戸山対抗戦」、「学園祭招待試合」、「富士見高原の合宿」、「東京選手権」などの大会に出場、その他いくつかの対抗試合を行なった。成績はそれほどすばらしいというほどのこともないが、いっしょうけんめいにやった結果なのだから、それはそれで満足している。

ともかく今年度は、みんなが、悔いを残さないよう活動していこうと思う。

中学のとき軟式庭球をやっていた人、軟庭に少しでも興味のある人、遠慮せずに、どんどん入部してくれたまえ!!

どんな人でも大いに歓迎、楽しくやっていこうではないか。

硬式庭球部

昨年の戦績

新人戦

ダブルス　阿部・福島　ベスト16
川崎ジュニア
ダブルス　小林・相原　ベスト16

対校戦

男子　対都立大付　7—7　引き分け
　　対石神井　5—2　勝利
女子　対石神井　0—9　惜負

我が部は少ない活動時間を有効に用いるため、練習はきびしく、また、平等になるように努力している。

昨年、一昨年と、都立対校戦で、準優勝だったので、今年こそは優勝を目ざして、練習試合を増し、出席をきびしくとって、より充実した練習をめざしている。

卓球部

昨年の一年生が入部当初から、一定のレベルに達していたのに対し、今年の一年生は大部分が、高校から卓球を始めるといった具合であった。したがって一学期は完全に基本練習となったが、これら初心者も合宿等で腕をあげ、三学期現在においては二年生を敗る場面もときどき見られる。また二年生は、各公式試合で実力相当の好成績を残し、あとに続く一年生に貫禄を示している。

なお、わが卓球部は地味なクラブではあるが、部員はすべて卓球を愛する研究熱心な男女ばかりである。また、卓球部の望む人材もそこにあり、新一年生諸君の中で該当者があらば、わが卓球部へ来たれ！　大いに歓迎する。

また今年度の戦績は、二年生の稲垣君が都で16位、世田谷区で3位であったのをはじめ、戸山戦では大差で勝利を得、各公式戦でも上位へ進出した。これからは、現在の一年生に期待がかかっている。

男子バレーボール部

今や最も人気があり、今年はミュンヘンオリンピックの影響でますます盛んになると思われるスポーツ、バレーボール。クイック時間差攻撃、まさに変化に富んだ迫力ある現代的スポーツだ。ところで、我バレーボール部だが、クラブの中ではとても伝統があり、OB、先生、部員が親しく交わり、特にOBには、技術面でもよき指導を受け、その成果を試合ではっきりと表わしている。一昨年は、惜しくも中大に2—1で敗れたが都内でベスト4にはいり去年はベスト16で関東大会へも進出している。また今年も、常にコート決勝まで勝ち進んでいるのである。

現在の主な対戦成績

新宿 2（15—7, 7—15, 15—5）1 尾広（私）北城

新宿 1（9—15, 15—5, 7—15）2 城北（私）広尾

新宿 3（15—7, 15—7, 15—5）0 日比谷

新宿 2（15—3, 15—11）0 九段

さて、現在の男子バレー部の状況だが、練習は週に四日あり、体育館と運動場でやっている。練習は、基礎のパスから高度な技術まで能率的に行なわれている。また、クラブの雰囲気もまたよく、先輩は勉強、遊び、……の話など経験談を聞かせてくれる。

現在の部員のうち中学校でバレーボールをやっていた者は半数にも満たない。別に中学校で経験していなくても結構、また身長が低くても結構、そんなことは、練習しだいでいくらでもカバーできるようになる。

新入生諸君、君もあの豪快なスパイクをいっぱい大地にたたきつけてみよう。そして我々と、我バレーボール部の伝統を築き、我青春をバレーボールで飾ろうじゃないか。

軟式野球部

軟野というクラブは、誰にでもできて、かつ楽しめるクラブなのである。

しかし、それだからといって、遊んでいるクラブと勘違いされては困る。楽しめるクラブであるといっても、やるからには勝つ!!

その為に夏の強い日射の中で、秋の冷たい雨の中で、暗くなってからも、そして夏の軽井沢での合宿などによって、肌と肌をぶつけて練習を積んできたその結果、夏の大会、新人戦と善戦したが、惜しくも敗れた。

夏の大会では、一回戦目、竹早高と当たり、ホームラン三本を含む、十安打のコールドゲームで勝利をおさめた。二回戦目、二商と当たり、激戦のすえ惜しくも敗れた。

新人戦の一回戦目は、大量得点差で勝った。ことに九回二死から横川が放った満塁ホームランはまだ記憶に新しい。

前にも述べたように軟野は誰にでもできるクラブである。それは、部員の殆んどが、高校に入って野球を始めた者だということからもわかるであろう。それでも現在ちゃんとレギュラーとして頑張っているのである。勿論これは、各自の努力とOBの涙ぐましい指導があったればこそであるが。

三年が引退してしまう現在、現役はわずか七人になってしまう。よって少々努力すれば、レギュラーになれるのだ。「運が良けりゃ、運が良けりゃ、レギュラーになれる。」可愛い女子マネージャーもちゃんといる。

諸君！超えてるクラブ軟野は人材を求めている。ぜひ入ってほしい。

対戦成績

支部大会
(1)対大崎高　5—4
新人戦
(1)対明治学　5—27
七回コールド勝ち
(2)対駒場東邦3—1

夏の大会
(1)対竹早高　5—12
七回コールド勝ち
(2)対二商高　5—3

この他に、練習試合をいくつかやって、良い成績をおさめている。

女子バスケット部

全日本チームが、アジア代表に選ばれるようになって、ようやくテレビでカラー中継が

行なわれるようになったバスケットボール。
バスケットボールを女の子がやるには、過激な運動であるし、下品だとか、野蛮だとか言われます。それは、バスケットボールが、バレーボールのように、ネットをはさんで行なわれるスポーツではなくて、一コートの中で、敵と混じりあうスポーツだからです。コート内での身体の触れ合いを厳しくチェックする、さまざまなルールの中で走り、飛び、投げ、敵を欺き、敵陣へ体ごと、とびこんでいくのです。いこうと思った瞬間に、思う方向へ、最高のスピードを出したり、止まったり、またもどったり、持ち前のセンスを生かして一個のバスケットボールを五人のチームワークをもって、ゴールするのです。それが、バスケットボールなのです。

放課後、体育館の中から聞こえてくるボールの音と声がバスケット部の活動の姿です。今年度は、OBのコーチのもとに、六月下旬に新チームが結成され、八月には、今回初めての男女合同単独合宿を行ないました。

その後、夏の大会、学園祭の招待試合、新人戦と、さまざまな試合を経験することによって、チーム力も向上しました。また、本校において、二つの学校を招いて、三校リーグ戦を行なって、他校との交流を深めました。対戦成績は、決してよいとはいえないけれども、部員が一体となってチームワークを育て、先輩達の記録を更新しようと練習に励んでいるのです。

練習戦
新宿 24—24 他校
公式戦
昭和四十五年十一月二十 日
新宿 66（34—16、32—14）30 鶴川 新人戦
十一月二十三日
新宿 40（14—22、26—25）47 武蔵
昭和四十六年四月二十五日
新宿 42（16—18、26—22）40 両国 関東大会
前半 いつもどうしてだめなんだ …北落さん
後半 上の三人がプレス——得点逆点したが、またまた追いつかれた。
四月二十九日
新宿 54（31—14、23—19）33 昇華
合宿で同じ体育館で練習した。その時の試合では負けた。
五月二日
新宿 37（18—43、19—46）89 二階堂
五月三十日
新宿 48（28—19、20—22）41 北園 インターハイ
六月六日
新宿 46（18—20、28—23）43 農大一高
農大一高ファール二人。シュートミスめだつ。
六月十三日
新宿 26（14—24、12—25）49 北野
三年生にとって最後の試合。後味がわるい。気分によっていた試合。

八月二十四日
新宿 35（17—31、18—33）64 三田 夏の大会
後味がわるい。チームワークがめちゃめちゃ。相手を波にのせてしまった。勝とうとする意志なし。
十一月二十一日
新宿 22（13—14、9—7）21 文京 新人戦
勝ったからいいようなもののひどい試合
十一日二十三日
新宿 32（17—9、15—20）29 淑徳
前年、三年生最後の試合であたり、負けたところ。前半九分ぐらいまで、9—0ブリード
いつもへらへらやっている私たち、非常に緊張して、「笑顔をもってやれ。」といわれた。
十一月二十八日
新宿 38（10—23、28—20）43 京橋商
前半の得点が少なかった。

剣道部

関東大会予戦（ブロック準決勝）
女子、新宿1—1関東女子学院（優勝）
代表者戦で惜敗
支部大会（九月）
一年 優勝
六校リード（十一月）
二位
都新人戦（一月）（準々決勝）
新宿1—2巣鴨商（優勝）

以上が最近の主な戦績である。

私立一流校との差をどのように縮めるかという課題のもとに、練習に、励んで来た成果がようやく、実を結び始めたようである。新人戦でのベスト8入り等は、まさにその現われであろう。しかし、これを手放しで喜んでいるわけにはいかない。私立一流校との差が縮まって来たとはいえ、まだその差には歴然たるものがあり、決して予断を許さないからである。

よって、これからも今まで以上の努力が、必要となってくるであろう。しかし、その努力によってのみ道は開かれるであろうことを願って止まない。

ラグビー部

ラグビーは豪快で男性的なスポーツである。それゆえに、ラグビーは危険で恐ろしいスポーツだと言う者がいる。そんな連中に我々ラガーは言いたいのだ。ラグビーは恐ろしいスポーツではなく、楽しいスポーツだと。

諸君も御存じの通りラグビーとは球枝の中でも最も異色なスポーツである。他のスポーツでは見られないものが沢山ある。例えば楕円球だ。バウンド一つで功守が逆になる。ピンチ、ピンチの連続で、今にもトライされそうになった時、バウンドが変わってチャンスがおとずれる。そこをのがさず我々はタックルをかわしてゴールになだれ込む。そこでは体の大きさなど関係ない。ボールを持った者が主役なのである。

また、ラグビーとは十五人で一チームである。これは球技の中で最も多い。つまり、沢山の人間が試合に出られるのだ。我々の学校は、ラグビー場の四分の一にも未たない。その為に、練習を兼ねて、試合を沢山やる。ラグビーは、個人的なプレーよりも、団体的なプレー、つまりチームワークが特に要求される。その点からみても、試合を沢山やるということ

とは、非常にプラスになる。

現在は、二年生が大半をしめ、一年生がわずかしかいない。三年生になると色々といそがしくなるので、レギュラーが、かなりあく、つまり、入部すれば、即、レギュラーになれるわけである。

ところで、諸君らの中に、中学校でラグビーをやった者は、ほとんどいないだろう。我々も入学して初めてボールをさわった者ばかりである。よって、努力次第では、どんどん上達し、学年等関係なくなることもある。また、ラグビーは『体が大きくないとできない』と誤解している人も多いだろう。確かにラガーは体が大きい。しかし、最初から大きかったわけではない。ラグビーをやったから大きくなったのである。

忘れていけない事が一つある。ラグビー部は、実になごやかなクラブである。部室から笑いが絶えたことが一度もない。練習はつらいが、終えた時の充実感は何とも言えないものがある。我々は、これに青春をかけているのだ。悔いのない青春を望むなら、ラグビーをやろうではないか。

サッカー部

新宿高校サッカー部、東京都内でも有数の強豪として、都内に知れ渡っていたが、今のところあまり目立った活躍は見せていない。練習は、火・木の放課後と月の早朝に学校の第一グランドで、新しいサッカーゴールを使い行なう。

新チームになってからは、極端な不振が続いている。合宿は八月に軽井沢で行なわれた。合宿を境として、一、二年のコンビネーションが整い、見違えるようなチームになったようである。しかし、新人戦では、惨しくも敗退した。不振からのがれるため、きょうも、無心になって、ボールを蹴る野郎ども、我等の前途に栄光あれ、そしてサッカー部はきょうも行く。

柔道部

まずクラブの概形とでもいうものを紹介します。一、何をするクラブか——もちろん柔道をするのである。二、部員は何人——三年六人、やさしい?二年八人と一年九人が新入部員を心から待ち望んでいます。現在部員は全員男子ですから御心配なく。三、どこで練習しているのか——現在旧校舎内に道場をつくってやっています。そのうち体育館に移るかも。道場ができることを僕ら一同願っているのですが。四、練習日はいつか——現在月水金の三日間、ふえることはあってもへることなし。五、柔道部は強いのか弱いのか——戸山戦においては近年勝ち続けている。そして都大会において八位、八位といってバカにしてはいけませんよ。国士館高とか日大二高などの私立の強剛を前に都立において八位に入れたとは、強いというか、運が良いというか。そしてこのことにより、都立相手には簡単に負けることはあるまいという自信（過信?）を持つことになったのであります。

次に今年度のおもだった成績は

▽対外試合　新宿3—1武工大付
　　新宿6—0玉川学園
▽都大会予選新宿3—0玉川
　　新宿4—0国学院
▽本大会一回シード
　　二回新宿2—2足立
　　準々決勝新宿0—3修徳

女子バレーボール部

都立新宿高校女子バレー部——それが、私

達のクラブの名前。有名?うーんでもこれからが期待されているnew faceなんだヨ。コーチを中心に、がんばっているんだ。去年の新人戦、結果はあまり良くなかった(2勝4敗)けど、でも、みんなの胸には、全力を尽くして、やれるだけのことをやった、という満足感で、いっぱいだったんだヨ。

そりゃあ、練習は　きびしいし　たいへんだけど、でも　終わったあとの　すがすがしさ！　胸の中で　もやもやしていた事も、さっぱりとしちゃう。汗でびっしょりになったり、どろんこになったり。でもこれが若さじゃないのかナア。

それに、そういう苦しい練習を共にしてきた仲間って、とってもいいものだヨ。いっしょに笑ったり、はしゃいだり、それから悩んだり、泣いたり……。クラスの友達とは違った、何かがあるんだナア。私達がバレーを続けている理由なんて、バレーボールが大好きだ、ってことと、それから、すばらしい仲間がいる、ってことぐらいかナア。

みんなの中には、バレーが好きな人、いっぱい　いるんじゃないかナア。そして、高校生活を有意義に過ごしたい、と思っている人も。もしそう思っているのなら、バレー部においでヨ。どうしようかナっ、って迷っているのなら、とにかく練習に出ておいで。わからない事があったら、どんどん聞いてほしいナ。待ってるヨ！

新宿徒然草

昭和四十六年度新宿十大ニュース（その一）

◎道路問題紛糾
◎規約解釈のための生徒大会開かれる。
◎旧校舎の守衛室全焼（放火）
◎朝陽会館新設
◎ごんべ委員会球根を植える
◎プール廃止
◎自治権問題起きる
◎光化学スモッグの影響大なり
◎今年度中に、修学旅行が二回あった
◎宮川先生にお子様誕生（名前はまゆ子ちゃん）

委員会報告

生徒会総務

昭和四十六年度生徒会総務

会長	前期	加藤志貴雄	2G
	後期	三木悟	2F
副会長	前期	大野仁	2F
	同	長野真一	2C
	後期	本田真也	2D
	同	大原耕人	1D
書記長	前期	本田真也	2D
	後期	吉村仁	2F
クラブ委員長	二期	大久保秀城	2G
クラブ副委員長	二期	松岡吉雄	2G
生活委員長	前期	中村正弘	2A
文化委員長	後期	旦尾衛	2B
	前期	仲尾豊樹	3E
保健整備委員長	後期	塙史生	2F
	前期	梅沢和也	2A
	後期	稲垣敦	2B
体育委員長	二期	高城俊文	2C
図書委員長	二期	森山朝子	2B
○その他諸機関			
生徒代表会議議長	前期	渡部信綱	2C
	後期	加藤志貴雄	2F
HR連絡会議議長	前期	岡本真人	2D
	後期	植田益朗	1A
放送委員長	前期	池山良次	2E
	後期	鈴木真人	1C
新聞委員長	前期	井上一幸	2H
	後期	国府谷明彦	1H
選挙管理委員長	前期	岩下明	3A
	後期	倉方欣平	2E
学園祭対策委員長	前期	岩田裕志	2F
轍委員長	後期	倉方欣平	2E
昼夜交渉委員長	前期	藤原雅夫	2D
	後期	寺井彰	1A
合唱コンクール対策委員長	後期	樋本英一	2A

各種委員会

クラブ委員会

○ハンドボール同好会とスキー同好会の設立に関する議事

スキー同好会は認められず、ハンドボール同好会だけ新しく加える。

○部員のいないクラブ又は同好会の廃止に関する議事

話がまとまらず、据置く。

○新部室の使用方法に関する議事と使用クラブの割り当て、

文化部から積極的に使いたいという希望がなかったので、運動部のみで取り決めることにした。（文化部の了承を得て）

○旧校舎使用に関する議事

使用できるところはできるだけ使用させてもらう。

H・R連絡会議

我等HR連絡会議は、毎週一度は開こうと言うことで、今までやってきた。主な活動は、各HRの調節や、各クラスのHRの調節や、各クラスのHRのの状態や、運営委員はどういう態度でやっていったらよいか、それに学校側に対する諸批判を語るなど、それらが中心であった。しかしながら、前半の調節時は多かった出席者も後半には欠席者が目立ってきた点は反省しなければならなく、それに話し合い等も後半にいたっては、形式的に話されているような状態が明確になってきたその点も・・・。これらの理由としては、会議は計画性がなかった事や、前回の連絡会議が調整のみに終っていたことによって、HRの改善という事についての話し合いは、第一歩からはじめなければならないということからの惑いの状態がいつまでも続いてしまったという事もあげられる。

しかし、これらの諸問題を解決して、今後のHR連絡会議を発展させるという事がこれからの私達に課せられた課題であろう。

図書委員会

図書委員会では、今年度も毎日のカウンター当番はもちろんのこと、ブックニュースの発行、新規購入図書の選定、読書会の開催などの活動を行なってきました。

前期はまだ三年生にたよる傾向があり、一時は後期のことが心配されましたが、それもなんとかなったようです。

しかし、ここで問題が一つ残りました。

読書会のことです。今年度はいままでにない熱心な宣伝活動を行なったにもかかわらず、一般生徒からの出席者が少なく、一同を落胆させました。この悲しむべき結果は無論、生徒の無関心のせいもあるでしょう。

けれどもその前に、なんとなく惰性的に続けてきたこの読書会というものを根本から話し合わなければならない時が来ているのではないかと考えています。

もうすでに読書会の時代は過ぎてしまったというような感じがぬぐいきれません。

そして、そのあとに続くアイディアのないのが現状です。

とまあ、今はこのようなところですが、今後もより充実した活動を目ざして一同ガンバリますので、みなさんもご協力お願いします。

生活委員会

生活委員会は何のためにあるのか。

これはあまりよくわからない問題である。

では、いままでどのような方針で活動してきたかといえば、学校生活を楽しく、乱れないようにするためということである。

では実在に何をしてきたかといえば、
前期―遅刻やバッチ等の生活問題についてアンケートをとることにより生徒の意識を調査し、その結果を報告した。あとは事務的なことで終った。
後期―前期のアンケートの中で示された問題やその他の学校内の問題例をあげ、さぼり・喫煙・遅刻などについて話し合った結果、生活委員は、注意したり、広くアピールすることにより生徒の良識を促し自主規制をしてもらうことになった。しかし、生活委員としては、正面きって同じ生徒仲間を注意するというのは非常にやりずらく、あまり活発な活動がみられないというのが現状である。また後期はユニセフ・交通遺児育英資金という二つの募金を行ない多くのみなさんに協力してもらったことに感謝しています。
また文頭の生活委員会とは何のためにあるのかという問題にもどるが、生徒一人一人が自分たちの学校生活をどうしたら楽しくできるのかとか、なぜさぼったり喫煙したりするのだろうかとかを考えてほしい。
そうでなければ生活委員会の必要性などはほとんどなくなってしまう。
生活委員会としては生徒の良識に期待している。

体育委員会

この新宿高校にあるたくさんの委員会のうちで、もっとも目立つ活動をしているのはこの体育委員会ではないだろうか。
この委員会は各組一名の体育委員より構成されており、毎年、運動会、水泳大会、年二回の校長杯、マラソン大会等、数多くの行事を開催している。
この仕事もみかけほど楽なものではなく、運動会の際には連日、夜遅くまで各用具の準備点検をしたり、校長杯の際には、関係各クラブと、グランド、体育館の借用について交渉するなど、地味でたいへんな仕事も多い。
今年度はプールの使用が不能のため、水泳大会が中止されたりして、例年ほど忙しくはないが。各行事を安全に楽しく行なうために毎日、活動している。

特別委員会

轍委員会

小生らは、何とドジな高校生でありんしょう。実はでヤンス、二学期の期末試験も始まろうとしているあの晴れた日でヤンス。
小生らは、いつものとおり教室で御苑のアベックの実体を観察していたときでヤンス。
放送で一生懸命誰かの名前を呼んでいたのでありんす。小生、よせばいいのに、耳をすませたのでヤンス。するとでヤンス、何をかくそう小生らの名前を呼んでいるではありんすか。まじめな小生らは、わきめもふらず指定の場所に集まったでヤンス。
するとでヤンス、ある人が小生らに轍編集委員にならないかというのでヤンス。
純情な小生らは、彼のおだてにのり、「まかしとけ。」とよせばいいのに言ってしまったのでヤンスよ。
ところが、いざ原稿の締切り日というのに原稿がほんのz枚しか集まらなかったのでありんすよ。小生らはあわてたでヤンス、論文を載せないということは、小生のいない新宿高校みたいなもので、おテントウ様に申し分けがたたないのでヤンス。小生らはあわてて原稿を集めたでヤンス。その結果がこれなんでありんす。「実にすばらしい。」とほめてやって下さいでヤンス。
小生らは、この轍のおかげ、好きな女のコとも遊べず、クラスの集まりにも出られなかつたのでヤンス。ところがでヤンス、小生らはこれで満足しているのでありんすよ。それは、心がこもっているからでヤンス。これを読んでいる諸君にもいいたいのでヤンス。世の中は、「顔じゃないんだ心だよ。」と。
この轍はでヤンス、今までに載せなかった週番日誌、おもしろい読み物も沢山載せたでヤンス。デスカラ、表紙をみてすてたりしないで、最後まで読んでやって下さいでヤンス。さもないと小生らは、「アツ、ピンク色のぶたが空を飛んでいる!」と叫びたくなるのでありんすよ。

道路問題特別委員会

――斗争の機を逃すな!

現在、都市計画における道路行政は転機に立たされている。東京はその典型である。環境破壊の問題が大きくクローズアップされ、道路が自動車の過剰による排気ガス公害などの媒体として懸念さる様になり、建設反対を叫ぶ市民運動やマスコミの攻撃で行政府もほおっておく訳にいかなくなったのである。
私達はこの時期に「教育環境の保全、新宿御苑の保護」をスローガンに「道路建設絶対反対、計画全面撤回要求」の旗印をかかげたのである。これは言うまでもなく当面の我々の利益のための運動であることに違いはない。また、経済流通のための産業道路を否定し、人間性に基く都市での生活を求める選択による運動であり、これは自ら現在の他方面に渡る行政への反省を求める性格の運動になると我々は考えるのである。そしてこれは全生徒において強い支持を受けているものです。そしてこの運動はローテンポながらも活動が始まっているのです。しかし、このローテンポの運動は、場合によれば我々の運動を不利な立場に追い込む大きな可能性を持っているのです。
この問題で我々委員が批判されることが当然である。しかしながら――こう書けばもう何が後に続くのか理解出来るとも思うが――この問題に関する全生徒の関心は高いとしても、全く行動がないのである。そしてこれがスローテンポの活動の原動力にもなっているのです、それどころか、この現状が打破されることなく、ことなかれ主義に陥いれば、我々の運動は総くずれの危機に瀕するのです。つまりこの運動にとって最も大切な精神は運動の持久性を養う生徒間の連帯、結束であると言い切れるはずです。これがなければ、委員の運動さえ成立しないのです。我々はけっして全員の統一を言っているのではなく、種々立場による多くの批判を望むものです。
しかし、ここでもう一つ考えなくてはならないことがあります。それは我々の活動は社会に対するものであり、その社会の流れに合わせる必要があることです。つまり関係各庁の動きをつかんでそれに即応することです。そしてその時期は間近に迫っています。先にもプリントで配布した通り四十七年度に環状六号線以内の道路計画を練りなおすということです。この第一番目の機会に我々は対応して大きな活動を開始する必要があります。この流れに対応し我々は署名運動を展開しその流れに力をかける必要があるのです。もしあなたがこの機に活動――なにも委員と同等の活動を要求するのではない――しなければ、我々のスローガンが貫徹されない事態にもなりかねないのである。
窓の外を見て下さい。あなたのその場所から静かな緑の森が見えますか、見えるのなら東京で少しは幸福なのではありませんか?私達の新宿高校は御苑を望むことが出来ます。しかしこれがなくなったら新宿という地域は教育の場とはなりえないはずです。まさにブ

ルトーザーが入ってきてからでは遅いのです。緑の森を眺めながら、それを保護することが得策なのです。

今、一つの社会の流れが私達の目前にあります。それを逃すことは我々にとって許されません。流れに乗ることは恐しいことかもしれません、しかしその流れへの船出が遅れば、流れは遠ざかり、波止場に留まるのみならず、船は沈没するかもしれないのです。

我々はこの「全面撤回要求」を貫撤するため運動の根源たる生徒全体の参加・協力を切望します。

全定交流委員会

どんなウスラバカでも○○委員などというイカメシイ名称を持つと、一応それらしく立派に見えてくる。それゆえ誰もが一度はその委員とやらになってみたくなる。勿論、委員でなくたって立派な人は沢山いるのだが、それではこの文章を書くに当って大変困るので、一応、立派な人とは委員であるとしておく。さあ、君はその立派な人になりたいと思うだろう。ならば、ぜひともこの全定交流委員になって欲しい。全定交流委員――何と崇高でけったいでかつ神秘的な名前であろうか。実際、その名称はそこら辺の諸先生方をうならせるには十分な効果を持つのである。

一部の人の間では、『全定交流委員会＝有名無実』という等式が成り立つと囁かれているようだが、此れは誠にケシカラヌことではないか。恐らくは私の成績が余りに良いのを妬んで、委員会などというものにワガハイを縛り付けておいて、その間に自分の成績を上げようというこんたんらしい。しかし実際に、この全定交流委員会は、その有名無実という名に恥じないからしかたがないが。いつになったら出るのか全く判らない夜交昼を始め、計算用紙と化した交流ノート、華々しい交流会の計画（だけ。）などなど珍しく流会しなかった委員会では次のような対話が聞かれる。「今度の夜交昼に関して何か意見ありませんか。」「夜交昼ってなんだ。」「困りますな、我々の仕事を忘れてもらっては。機関紙ですよ、いや、正確には機関のごときものと言った方が良いのだが……。」、「ああ、そうですか。」、「ところで読んだ事は有るんでしょう。」、「無い。」笑い事ではなくこれは実際にあった話なのだ。

それゆえ、この委員会を活発化するには人材、特に積極的な人の参加を希望してやまない。自由参加という関係上（もっとも今年は各クラスから一人選出したというウワサもあるが。）どうしても無責任になりやすい委員会をささえるためには、どうしても多くのそう言う人達が必要な人です。全定交流委員会を頭からバカにしないで、一度ぜひ委員になってみて下さい。そして、委員会の堕落した姿を見ても落胆しないで欲しいんです。こんな勝手な事を書いですいません。でも、それ程、定時制との交流に意義の有るものと思うんです。こんなつまらない文章を最後まで（途中をとばしたかも知れぬが）読んでくれてありがとうございました。

選挙管理委員会

選挙管理委員会（以下略して選管）は、そもそも選挙を円滑に行なう為の影の機関である。そのせいか、一般生徒には、我々の存在をわずかな（？）選挙の期間にしか知ってもらえない。

ところで、選挙を円滑に行なうとはいったいどんな事なのだろうか。立会演説会を開き、投票の準備をし、結果を発表する。それだけでよさそうなものだ。しかし、今年度のを思い、夕暮れにいそいそ家路に急ぐ我々とは対照的でございました。

内容は、他校から見ればあたりまえかもしれない。が、この活動により、我々は、選挙さえ行なえばよいという新宿高校の沈滞選管期を、生徒の代表であるということを自覚し、脱皮したのである。

主な活動内容は次の通りである。

一、前後期の生徒会役員選挙の準備
二、規約解釈による討論と生徒大会
三、規約改正案作成（生徒会選挙規定）
四、選管の判こ作り
五、記録の作成と保管

まず、選挙だが、ここでも一般生徒の無関心さがうかがえる。公示しても、立候補者がなかなか集らない。やっとの思いで定員をし越、立会演説会を開くが、ここでは逃亡するもの続出、投票の際には、一位をしめるのが白紙と無効投票である、選管としては、『生徒会は我々のものなのだ』という自覚を一般生徒に持ってもらいたいものだ。

次に、規約解釈だ。これはそもそも規約には不備な点が沢山あった為に生じたものだ。それで、選管は、その不備な点を直す為に検討をかさね、改正案を作成した。内容は、ここでは公表できないが、いずれ諸君らの手もとにプリント等で、知らせるつもりだ。

判こ作りは、ある委員が苦闘し、今、作成中だ。事務的な面に使うので、一般生徒には関係ない様だが、今まで、これがなかった為に、かなり不便だったので、これからの活動には大いに助かる。

記録の作成は、規約にはあったが、今までなされていなかった。その為に選管としてもかなり活動しにくかった。そして、今年度の珍事の際は、とても苦労した。この記録は三さつに分かれてある。この記録が、新選管により、さらに増されることを期待している。

以上が、主な活動だ。前にも述べたが、選挙等にかぎらず、何事においても、もっと積極的にやってほしい。そして「昔の……」なんて比較されないような生徒でいようではないか。

学園祭対策委員会

今は昔、新宿高校のとある一室に「成功させよう学園祭七一！」の旗の元に二十四名が集い、学園対策委員会ができたのでございます。

昨年以上の学園祭にしようという希望と情熱がみなぎっていたのでございますが、一学期末にございましたのは二、三のプリントと夏休みの当番の割当、仕事の分担だけだったのでございます。

仕事の分担を見ますと委員長さんには一見大物、実はなまけ者（失礼！反対でございました）のI氏、その補佐役には予算も担当される全く予算向きの綿密な頭脳の持ち主、いいえ、予算が少ないなどといわれた時のためにはにらみのきく御顔とドスのきいた御声の持ち主でいらっしゃるH氏、副委員長さんには女性らしく控え目なT嬢、その補佐役にはかわいらしくよく気がつくC嬢、その下に、調整、予算、校内装飾、プロ・ポ等の係に分かれ仕事に入ったのでございました。

夏休みの活動といえば、時間がなくなったのではないかと思われるほどのひまな一日を机に向って宿題など開き、ちばてつや先生の超大作「紫雷改のタカ」「ハリスの旋風」などという本を読破していたのでございます。しかし、不可思議でございましたのは三十枚近くございましたガリ板が半分になっていたでございます。そのような中でがんばっていたのはプロ・ポの方々でございました。やれ広告だ、委員長のことばだとドタバタ騒ぎ回っていらっしゃいました。その姿は夕立に彼選管はそれだけでは気がすまなかった。目を

大きく見開いたのである。これから書く活動

そのうちに二学期に入いりますとさすがの私達もあせりを感じたのでございます。皆様が仲良く楽しそうに御仕事をなさっていらっしゃるのを横目に、日夜、雑務に追われたのでございます。東に劇をやるクラスあれば行って進行条件を見、西に展示のクラスあれば行って備品の調整をし、南に何もやらないクラスあれば参加した方がいいと教えてあげ、北に居残りあればいって人数が多いと追い返し、上に音楽室あれば行ってスケジュールを決め、下に招待試合をするクラブあれば早く相手校を決めろとわめいていたのでございます。そんな中、私達は「体育館での劇の練習はどうするんだ」「ガリ板と鉄筆がないじゃないの」等こわい顔なさった方の御質問から「学園祭、いつですか?」という無邪気な疑問まですべてに親切に御返答いたしたわけでございます。その折、こちらのいたらなさから多くの方々に御迷惑をおかけしたことをおわび申しあげます。

そんな中で学園祭はやってきたのでございます。土曜日はうまくいったのですが、ところがところがでございます。特にたくさんの方々の御来校を期待しておりました日曜日に雨がふってきたのでございます。それも次第に激しさを増していったのでございました。

翌朝は初めての試みである厚生年金会館小ホールにおける演劇関係の集いでございました。楽しく観劇しているうちに五時終了の予定がアレヨアレヨといううちに七時になってしまったので、そのため、楽しい楽しい後夜祭（特に今年はインディアン・ハットを作り大好評を得たのでございます）が体育祭の後になってしまったのでございます。

ハプニング続きの学園祭ではございましたが、大きな事故もなく、アンケート調査でも多くの方々が示しておいでになった意義であるクラブ、クラス間の交流も深まったようなので私達一同喜んでいるわけでございます。

特殊委員会

新聞委員会

朝陽時報を発行するために特別に設置された委員会で放送委員会と並んで特殊委員会となっている。構成は、総務との協力によって成されることになっているが、実際は、新聞研究部の独壇となっている。

新研が土台をつくるのは本来の姿だが、今は、完全な新研の所有物と化している。本年度は、予算の都合などにより、五回しか発行できず、その面数も少ないものが多かった。記事・論説にも深みがなく内容も問題点の中核をえぐるようなものは少なかった。そして、一年、朝陽時報の意義・方向性を求めるために暗中模索したが、そこからの出てきたものは皆無だけだった。

また、長年続いてきた職員会の新聞委員長による検閲も大幅にゆるみ、新しい新聞にとって期待できる材料となった。

道路・新部室・規約問題などで、生徒会に波乱のあった年に朝陽がそれらの問題に対し、幾分か全生徒に反響を及ぼせたことは、使命を果せたといえよう。だが、論説・中性点などの充実、特集の取り上げ方にかなりの難点がみられる。

今後も、かなり高校新聞界が変質を遂げていくだろう。そこにあって当委員会が選ぶべき道を全校で考えていかなければならないだろう。

朝陽時報は、学校の新聞であり皆んなの新聞であることを忘れては困ります。

週番日誌だより

一年A組

十一月十五日　月　曇り

「波高し」「うそつけ、チョンボするなよなー」「俺、チョンボしてないぞ」「見せてみろよな」バリバリ、「コラ!」「すみません」「まじめに聞いとれ」「見ろ!おまえのせいだぞ。」「うそだ」

月曜の授業は固いものばかりで、おもしろくない。この文章を見て、君は言うだろう。「今週の週番は、ネコか?」

一月十日　月　曇り

一時限目は英語の宿題テスト。三学期、初めての試験にみんな真剣な顔つき、冬休みの遊びすぎがめだっていたようだ。

三年生の受験が影響してか、学校の中も何となく暗く感じる。昼休みに校庭で遊ぶ人も少ない。冬の重苦しい雲の為でもあろうか、気が重い。

それにくらべ、我々のクラスのにぎやかしいこと。休み時間となれば、友を呼ぶ声が、クラスの中をかけめぐる。「受験戦争どこ吹く。」とでも言うように……。

一年B組

五月七日　金　?

明日は数学のテストがあります。みんな、「大変だ。大変だ。」と言いながら、放課後、遊んでいます。

九月二十日　月　曇り

眠い!。T先生の顔が「玉ネギ」に見える。N先生は、相変らず短気丸出し!

早く帰りたいなー。

十月十八日　月　曇り

先生よ、生徒諸君よ、今こそ立ち上がるのだ。月曜は、体育と芸術にするよう立ち上がるのだ。こんなことを書いていると、私のすわっているつくえの前に立っている人間がいる。「あ!」月光仮面だ!いや仮面ライダーいやよく見ると、ジュリアス・シーザーの○○君、が言った。「おい、ガスもれのことも書いておけよ。」

そう言われて思い出す、四時間目のマシュマロの驚きよう。まるで、豚が殺される時の驚きようである。思い出すだけで、おかチクテ、おかチクテ、てなことを書いていると、私のカワイコチャンが「帰らない」と言いに来る。私、大いに喜ぶ。

十月二十一日　木　快晴

六時間目、S先生はみんなの期待を裏切り、二日酔いせず、授業にやって来た。そして、私とK大先生を虐待した。

一年C組

十月十三日　水　曇

きょう十三日、待ちに待ちった運動会が行われた。朝、家を出るときは、小雨が降っていたので、これはどうかなと思つた、けど、学校に来てみて、運動会の音楽が、ガァーと鳴らされていたので、「アア、これはやるなあ。」と喜んだ。我赤組は、ひごろの行いよろしく優勝をした。それも最後の色別リレーでカッコ良く、逆転優勝。応援団も、一段と他をひきはなし、応援合戦も一番。さあこれから、後夜祭がありますので終わります。

十月二十日　水　晴れ

HRで、ツィスターゲームをやった。みんなとってもいい格好。

体操部のN君、T君、女子ではNさんが、がんばっていました。M先生も参加しました。H・R運営委員の健闘のおかげで、みんな楽しみました。よく、四十七人が協力して集まったと思います。

遠足について、我がクラスでは、飯合炊飯をすることに決めました。

十月二十九日　金　晴れ

リーダーのテストがもどってくるとみんなが楽しみにしていたのに、もどってはきませんでした。

地学の時間のことです。T先生が、水曜日と同じところを、三十分ほど説明。

みんな、いわく「あまり先に進むと、お勉強が大変だから、だまっていよう。」

一年D組

六月二十九日　火　雨

今日は、朝はくもり、昼は雨、放課後は晴れ、と目まぐるしい日であった。それに、欠席が三人もいて、教室は気のせいか、とてもガランとしていたようだ。クラスの男子は、近ごろ、実に陽気になった。休み時間になると厚さ二センチくらいの歌の本を持ち出して、美声をはり上げる。女子はうっとりと聞きほれないで、さわいでいる。

九月十一日　土　雨のち曇り

今は、数学の時間、みんなはあせって黒板にアンチョコから写してきた答を、書きなぐっている。カチカチというチョークの者が、白々しい。今、I君がさっそうと教だんを降りた。後ろの黒板では、まだひとりもうつし終っていない。

教室を見回すことにする。まず窓側、M君が、机の下で何か読んでいる。教室の反対側では、T君がぼんやりと横を向いている。僕の前にいる、Y君は、おかしな顔をして後ろの黒板とにらめっこ。そして、肝心の僕は、先生が近ずいて来るのにもめげず、日誌を書き続ける。

十月十九日　火　晴れ

あっ空を見ろ！鳥だ、飛行機だ。イヤ、○○キャベツだ!!○○キャベツは、日夜、我々の為に、植物関係の講義をしてくれるのである。彼は、遠い南方の彼方から、カメに乗ってこの日本に姿を現わし、月曜日と木曜日に我々の前に○態をさらけ出し、いつかなどは一時間に二百九十回も「……ネ。」と言ったのである。

一年E組

十月四日　月　晴

I先生が、授業をだいぶつぶして、大学受験の話をしてくれた。よい話だが、なんとなく、ゆううつになる。後の方では、話にあきて寝ているやつがいた。きっと就職するやつだろう。

十月八日　金　快晴

昨日の雨でスモッグが洗い流れたためか、今日は素晴しい「秋晴れ」である。ところどころに浮ぶ白い雲が、青い空を一層輝かせているようだ。御苑の緑も美しい。

昆虫の標本を作るのには、「毒ビン」を使う。びんの底に酢酸エチルを入れ、その中に虫を入れて殺すのである。都会というスモッグのつまった毒ビンの中で、死んでいくのは何という動物たちだろうか。

遠足の話が委員の方からでていたが、たまには、こんな空の下、野原にとび出すのも良いものだろう。

十二月三日　金　晴れ

六時間目の植物の時間、勉強疲れの為か、Nさんがコックリ、コックリしているのも知らず、となりのO君は、一生懸命まわってきた標本の説明をNさんにしていた。

まわりの男子に笑われた彼女は、きっとお嫁に行けないだろう。

一年F組

六月二十五日　金　曇

一時限　植物

先生は何故、女の子に色目を使うのであろうか。

二時限　地理

後の劣等生が全員、おこられた。（E君を除いて）

三時限　動物

教生のネェチャンは何故、男子に色目を使うのか、授業中に検尿の容器をなめている人がいた。（I君です）

六月二十八日　月　曇り

一、二時限、数学

今日から不等式。そんチャン、授業は日本語でやって下さい。E君は、東大へ行くそうです。僕も燈台へ行きます。

突然、テスト、答はみんなとなりのを見た。

六月三十日　水　曇り

古い奴だとお思いでしょうが、古い奴ほど新しいものを欲しがるものでございます。どこに新しいものがございましょう。生まれた土地は荒れ放題、今の世の中、右も左も、真っくら闇じゃございませんか。

（タワシが書いた）

先生！タワシの頭をひっぱたく時には、充分、気をつけてください。とげがささります。

一年G組

五月二十七日　木　雨

三時間目、生徒大会、誰も聞いていない、何で有元先生が休みなのに、生徒大会がありのだろう。

十月十六日　土　晴れ

地学の時間が数学と替わって授業するつもりであったが、私達が先生を呼びに行かなかったので全く来ない。そこで、私、ひとりが呼びに行ったのである。

二階の地学の教員室に着き、戸を開くと、T先生ともうひとり、I先生がいらした。タバコを吸っていて、私が入っていくと、何だろうという顔をしていた。私が、「G組は授業あるのでしょう?」と聞くと、「あれ、そうだっけ。」

一年H組

五月四日　火　雨

今日から一週間週番だ。今までの週番のように、ヘマはやらない予定。二時間目が図書館教育に変更される。まったくうれしい限りである。

休み時間は、ピンポン、花札、マージャン、トランプ、ショーギ、の花ざかり、四時間目テストの返還式、教室内は、歓声とどよめきの渦と化す。

九月三十日　木　晴れ

本日は、晴天なり、朝から雲ひとつない。こんな日に、学校で授業。気乗りしない。どこか草原でねころんでいたい……。クラスの状態は、いつもどうり。授業もいつもどうり。なんの変化もない。生活に変化をあたえる為に、授業をやめて、御苑に行く、などということは、ないものだろうか。

K先生いわく、「こんな日は、俺も、勉強する気になれない、山でも歩きたいな……。」

十一月十一日　木　？

楽しい、楽しい数学が、三十分ばかり遅れてはじまった。男子はニコヤカに話しながら勉強しているのに、女子は小声で歌など、歌っている。あの余裕、あのカンロク、男子もあの度胸をみならったらどうだろうか。先生が、教室に現われた時のはかない希望が破られた、あの絶望！

二年A組

四月三十日　金　曇り

二時間目は、T先生の漢文なのでしたが、クラスの希望で、T先生と共に、楽しく野球をやりました。六対三で、出席番号奇数のチームが勝ったのでした。

五月十二日　水　晴れ

今日、楽しい遠足だ。空にはひばりも鳴いている。やっぱり遠足はいいな。みんな自然に近って、欲求不満をぶちまけたのだ。しかし、はたから見れば、そうとう下品に見えたことは、まちがいないのです。

九月十八日　土　曇り

土曜日は腹へること甚し。四時間目、数選英選の時間ともなれば、いうべきにあらず。しかし、休み時間、必死になって、トランプする者四人、五人。その顔のけわしきこと、いとおかし。

十月十九日　火　曇り

試験があっても、そうでなくても、あいかわらず騒がしいクラスなのだ。N君も休んでいよいよ、試験前という気がしてきたが、実質上、物理、化学、数選の三課では、頭がいたくなるだけで、やる気がでない。

二年B組

十月八日　金　晴れ

今日は最高にラッキーな日、授業が二時間しかないなんて、それも、漢文と現国だもの悲しくって……。

五、六時間の合同練習の時、女子は男子の前でリレーをやり大恥をかいた！先生は陰険なのダ!!放課後の応援の練習にも熱がはいってきて、体育祭が楽しみでーす。

十一月九日　火　曇り

Nは週番なのに休みである。けしからん！とは別に思わない。Nがいないと、古典や、現国のグループ学習の時、静かでこまる。

十一月十八日　木　？

二時間目の保健の時間、○先生が、「○先生はタバコがなければ、死んじまう。そんチャンは、酒を飲むと機嫌が良くなるので、まだアル中にはなっていない。」とおっしゃいました。

二年C組

十月二十一日　木　晴れ

職員室前の黒板にA先生の自習の知らせがあった。しかし、先生は来ておられた。楽しい、いたずらだった。

朝、出席をI先生がおとりになった時、N君が返事をしわすれ、「先生、十九番います。」と言った。ところが、遅刻してきた、Sのやつが、「十五番もいます。」と言った。そして、何人か後から入って来たので、I先生は、かんかんだった。そして、今学期初めて、遅刻したT君にもあたっていた。

十一月二日　火　晴れ

今日、初めて中間テストの答案（化学）が返された。

六時間目の古典の時間、子犬が入って来て教壇の上にチョコンとすわり、日なたぼっこをしていました。N君がパンをあげたら、無視されました。

十一月十日　水　曇り

今朝、僕は学校の門の所で、A君たちの配っているビラを一枚、わけてもらいました。ビラには、「77・10、沖縄ゼネストに呼応して沖縄人民との連帯を勝ちとれ！」と題してありました。この時、僕はガーンときたのです。僕は「沖縄」について何も語らない事、知らないこと、しないことは、全て犯罪なのだと見抜きました。（というより彼らがそう言ったのを、長い討論の結果、認めざるを得なくなったのです。）彼らはつけ加えて言いました。「闘いは、始まったばかりだ。今からでも、遅くない。君もついてこいよ！」と。でも、僕には、その勇気がなかったのです。

（書いたのもAなのです。これを読んだ人彼のこれはすべて演出なのですから、惑わされないようにしましょう。）

二年D組

六月四日　金　曇り

僕はただ「自由が欲しい。」って言っただけなのに……。その言葉はそんなにも、大げさなことだったのか。向うからは、警官が走ってきた。親爺は俺の口をふさいだ。先生は俺の頭をたたいた。そして友人達は大声で笑った。僕は何が何だか解らなくて、ただ驚いた。「自由が欲しい。」って言葉はこんなにも大きな物か。こんなにもみんなをあわてさせる言葉なのか。君はこんな時、僕の前でどんな行動をとる?。もちろん、大声で笑うだろう。ピエロの僕を見下して、まるで、女学生のように笑うだろう。そうだろうな、君は女学生だったもんな！

（あるクラスのノートより。）

十一月八日　月　？

遠足の日、本栖湖での飯合炊飯の後、みんなは、うしろからI先生の石を湖に投げている無邪気な姿を、見ていました。昔を思い出していたのかな。「おい、写真撮ろうぜ！カメラは。」「あっないや、A君、向うに行っちゃったよ。」「残念だ……。」でした。

十二月三日　金　晴れ

今、クラスでは、机を二つ合わせて、ネットがわりにキャンバスをはさんでつくる卓球がはやっている。

○○君いわく、「試験前だろ、帰って勉強しろオラオラ。……ぼくも入れて。」

二年E組

五月四日　火　雨

数学の時間、I先生がプリントをかかえて教室に現われた。

「ワアー、テストだ！。」

「オレ、もう覚悟決めたョ。」

一瞬、教室内は悲鳴の渦と化した。その間I先生は笑顔でプリントを配りながら、曰く

「俺は、君らがそうやって、騒ぐだろうと期待してこれを刷ってたんだよ。」実は、このプリント、テストではなかったのだ!!

教師という職業、いくら楽しみが少ないからといっても、悪趣味じゃのお。まったく困果なもんだネ。

九月十七日　金　晴れ

今日の倫社の時間、先週に引きつづきまたもや、代返がばれました。ばれたやつの運が悪いのか、それとも先生が鋭いのか。前者のほうと思われる。あの先生をみればわかるが。

十一月二十九日　月　晴れ

今日は、ちょっとしたハプニングがありました。物理の時間、D組の○○君らが、ロッカーをたたいて歌を歌っていたのです。K先生、始めはしぶい顔、けれども、「K・K、まだやっているのか。」なんていう声を聞いて、とうとう○○袋の尾が切れたというか、先生いわく「私の限界をためしているのだな。おいかけていこうか、どこまでもおいかけて行くぞ。（ここらで、白衣のボタンをはずしながら準備。）君達、ちょっと見ていなさい。」

D組の○○君ら、そろそろ逃げた方が…。

二年F組

四月二十八日　水　晴

朝礼が始まる前の会話。

ある先生　「てめえ、週番じゃねえだろう。」

「早く出ねえとぶっとばすぞ、この野郎。」

ある男　「すぐ出ますよ。」

ある先生　「ぐずぐず言わずに、でやがれ。」

それを見ていたある男の感想。

「あの野郎、あれで先生かい？。」

「あれじゃ、○○だよ。」

「先生にならずに、○○になりゃいい人だよ、もう家帰って、ねやがれ。」

（嘘、嘘、嘘がないのがこれ）

六月二十三日　水　曇り

女子の校長杯は、連日の練習にもかかわらず、おしくも、おしくも、D組に負けてしまった。明日から自習時間がなくなるとは？

休み時間になる、F組の野郎どもは、教室の後ろの窓に集って、外でバレーボールをしている女子を見て、よだれをたらしているようだ。

十一月二十日　水　晴れ

このごろ、変な男子が目立つのです。秋の不順は、天候と試験の為に、おかしくなったのか、なにしろわけのわからぬことを口走るのだから、面くらってしまうのですヨ。それに授業中突然叫んでみたり、近くに位置してる私などは、このところどうも変なんです。でも今のようなマジメ人間の多い世の中、少しおかしいのがいなくちゃ、面白くありませんですよネ。その点じゃ彼等は、楽しく気楽な生活しているわけよネ。

二年H組

五月十三日　木　晴

このところ良いお天気がつづきます。きのうは遠足でした。良すぎる程良いお天気で、汗ダクダクでかなり大変でした。でも五合目まで雪をかぶった富士山と、上からは鏡のような、濃い青緑色の水を満々とたたえた山中湖。とても美しく、登りの疲れをいやしてくれた。

十月五日　火　雨

Y先生はいつも変だが、ますます変になったようだ。これも例の薬の副作用のせいか。この学校には、変った先生が多すぎるようだ。

十月十四日　木　雨

また雨、晴れることを知らない雨、腹立たしさと、あきらめにも似た気持ちで窓から空を見上げる。昨日の興奮はどこへやら、運動場に、無残に残った、応援団の看板が寒々と立っている。

新宿徒然草

ENGLISH講座

正解英文法

The teacher says that that that that that boy used is not correct

「あの少年の書いたところのあの that は正しくない」と先生はおっしゃる

Mary and May met at the mill

She sells six sea-shells by the seashore

A big flack bed-bug bit a big flack bear
ナンキン虫

45文字の単語があるのですが信じられますか？信じられない人は辞書で調べて下さい。

pneumonoultramicroscopicsilicovolcanokoniosis
〔njú:mənoʌltrəmə̀ikrəskɔpiksílikəvɔlkéinokouniósis〕
肺塵症

（轍14号への挑戦）

ひと言スピーチ

三年有志

孤独不安に始まり、それに後悔、倦怠が加わり、これらのものが交互に、あるときは二ついっしょになって、現れつつ消えていったのがこの三年間だった。

私の好きなものは、別にとりたてて書くほどのことでもないのですが、しいていえば、人です。

——山下

私の目の前に一本の道がのびている。そして、今、私は歩まなければならない、どこに行き着くかもわからないこの道を……

——横山

何でもよい、無中になって私はこれをやったというものが存在する人は幸福な人。

——石原

ソフトクリームに始まり、ビリー・ホリディを踏んで、真実へ向う。新宿や、ああ新宿や、新宿や。

——稲垣

好物……犬。（コッカー）・トマトジュース・冗談・セロリ。自分の好きなように、納得のいくようにこれからも生きて行きたい。

——長田

〝人生とは出会いであい、その招待は二度と繰り返される事はない〟おえらい人のいったことは本当ですね。

——角取

エイゴなんて大きらい。エイゴがおいかけてきます。夢の中までおいかけてきます。おにごっこの三年間です。

——河口

いろいろなことがありました。ともかく、無事卒業できてヨカッタヨカッタ。楽しい、貴重な、忘れえない三年間でした。

——木野

遠びたい。遊びたい……。遊びすぎたけど……もっと遊びたい。

——栗田

新宿高校さようなら。思い出がまたたくさんふえました。顔のお肉がゆるみっぱなしの三年間でしたけど、これからも愉快にやっていきましょう。

——広瀬

眠かった。眠かった。とても眠かった。非常に眠かった。しかし眠かった。毎朝毎朝三年間、かなり眠かった。遅刻常習犯卒業万才

——藤井

心で見なくちゃものごとはよく見えないんだよ——星の王子様が言いました。むずかしいけど、本当のものが見える人間になりたい。

——松島

何故。どうして。どうしょう。わからない。こまっちまった。死にたい。バカ。そんな三年間でした。忘れられない三年間です。

——宮崎

この三年間で一番ガンバッタのは私の「上バキ」でして、よく耐えたなあと感激しています。ケチというのか、貧乏症というのか…。

——山賀

現在の政治の貧困は、目をおおうばかり。政府が悪いのか。野党が悪のか。一般民衆が悪いのか。いまにみておれ、この俺が。

——片野　進

ぼくが暮したこの校舎。今去る気持ちは複雑で、見上げる大空まぶしくて、なぜかあの娘の笑顔が、目に浮ぶ。

——石崎　芳行

われら一同、神奈川県人会として小田急愛用し、毎日、朝の暗いうちに家を出た苦しい思い出も、今になってはなぜか楽しい。

——匿名

剣道あってのこの人生。なんで忘れられようあの響き。書くことないのでこれで終りなのだ。

——いそべ

三年になって、年賀状どさっと届いた。あて名をみたら女の子から？いや違った。予備校からの誘いの手紙だったヨ。

——秋山　勝男

〝轍〟委員会がなんだか知らないが、まったくくだらん。こんな企画は、来年はやめておけ。

——匿名

眠い。眠い。眠い。眠い。眠い。眠い。眠い。ああ、ばからしいぞ。まったく。

——匿名

さみしいわ、淋しいわ、寂しいわ、なんだかとっても、さみしいわ、でもこのクラスとももうすぐお別れ、なんだかとってもうれしいわ。

——淋しい女

もうすぐ卒業ですね。もうすぐ大学に入れますね。大学に入ったらはりきって彼を見つけて高校時代の遅れをとり戻しましょうね。

——三年間もてなかった女の子

今まで信じていたものが、すべてくつがえされてしまった私の高校時代。これからだ！ 私達が本当に生きるのは!!

——フンソウを知らない子友達へ

社会的責任が、だんだん重くなる、それにつけても、年をとったなあ！

——匿名

新宿高校女子のアイドル田村正和とも、もう会えなくなると自殺を試みる者が続出。駿台に行けば、会えるのに……。田村正和後援会。

——安田　信子

早く大学にいってわたしは、ヨウちゃんとあそびたいなあー。

——スランプ脱出者より

アカイタ陽が目にしみる。とめてくれるなオッカサン！男一匹どこへ行く。ウキョのカゼはつめてえゼ

——コドクナオリナヨリ

マッシュの授業に出ないでマッシュぐ帰るとせいせきがマッシュ、マッシュ悪く（良く?）なりマッシュ。

——匿名

ソンチャンの授業に出ないで帰るとソンジャン?ソンジャン出よう。

——匿名

私の特長。わざとわらい、はみ出たおなか、ぱっつら顔、空を見あげるお鼻くん。自他称モンゴル豚、豪快な授業の椿（つばき）姫

——匿名

カチャ、カチャ、カチャ……47キログラム——……しっかり長生きしろよ！ ハアー

——匿名

オゾウさんの授業に出ないで帰ろうか?それとも出ようか?オーゾウとする。

——匿名

初めてふたりきりになった時のこと覚えているかしら、あなたは遠い雲ばかり眺めていて私は足元のタンポポばかり見つめていたわ……。小さな恋の物語

——匿名

でもホントはあなたの顔を見ていたかったのですけど……。でも相手がミジンコじゃ……人間以外のものを恋した定めでしょうか。

——匿名

男のくずと女のくずが集まった我クラス、この二年間、何故か恋もめばえなかった、いやあたりまえ悲しかった我高校生活

緑　舎　　芳　之

眼下望見御苑森　春夏秋冬養恒心
修身励学経三年　吾将去之不忘訓

——匿名

當世流行る奇装束、車公害情報洪水、是皆華美なる文明の放つ糞なり嗚呼！うんこだらけの獣たちよ何処へ行く其糞捨て足元耕すべし

——黒田

みんないつまでも元気でいろよ。そして困ったときは助けてネ。

——牛坂

昨日麻雀今日遊球省球美離矢亜怒　明日和暴輪愚

人間が数年かかる計算を機械は数秒でする。とすれば、人類数百万年の歴史も機械が数年間でかたをつけてくれるだろう。

——石川

怨辛みは数々あれどピーナツ〇〇に三十の〇〇彼等一代名は未代燃える夕陽に背を向けりゃ烏が彼方でアホーと叫ばア。チョンチョン。

——石束

およそ考えうるかぎりの悪事は、歴史の本を読めば大抵わかるが、考えうるかぎりの善行は、宗教書でも読まなくてはだめだ。

——岩下　明

何から何まで真暗闇の、どこにあるのか男の生きる道。真実一路に三年間、男一匹目蒲線、今日もどこかで泣いている。

——上村

汝、キュプリスの捕虜、ミネルバーを冒瀆したものよ、潔く死ぬがいい、バッコスでさえ汝を救えはしないだろうから。

——近　達也

田舎芝居は終った、拍手は、要らない、早く、速く、馴合の茶番劇の幕を降ろしてくれ、もう止めてくれ、盗作氏

——合津

ああ時間がない。時間をとめてないときは、早く過ぎさるのか。少年老易く学成がたし、このままじゃ何もできないよ。

——作井

人生の目的は、無為に長命することにあるのではない。永遠とはこの一瞬にある。この一瞬を完全に生きる事にある。—吾が信条—

——佐藤　元太

時世時節は変わろうとままよ、吉良の仁吉は男でござる。俺も生きたや仁吉のように義理と人情のこの世界一男子の言

——橋本

人間の長い長い歴史、その一コマのぼく、その一コマのまたすみっこの高校生活でした。

——日比野

空から星が消え、町からは緑が消える。　そして僕の希望も消えちゃった。ぼくの青い鳥を捜さなくっちゃ。

——匿名

可愛いてめえ達と長い間つれない浮世を渡ってきたが、別れの時が来ちまったぜ。じゃあばよ。　多摩市の琵琶法師

——小川

明日ある悦びを待つ時、その悦びは明日になく、今、それを思うその時にある。すぎさった悦びを顧りみる時、そこには後悔のみが漂っているものである。

——大池

二年生の諸君へ!!　今からでは遅すぎる。一年生の諸君へ!!　まだ大丈夫、死ぬ気でガンバレ、そうすれば自ら道は開ける。私についてらっしゃい。武井正教

——橋口　利文

自己には傲慢に生きたい。

——辰巳　宏行

みなさん！音楽を聴きましょう。音楽はたとえ浪人中でも、あなたの心に安らぎと喜びを与える泉です。あなたの心の泉を大切にして下さい。

——橋井　真

顔に微笑を　心にやさしさを　右手に酒を　左手に女を
ムズカシイ

——佃

バカバカしさ真っただ中で、何をすればよいのでしょう。何をするしかないのでしょか。

——匿名　希望

野球面白かった。それ以外何もなし。

——小谷野和義

ぼくはショウギをがんばって、第二の坂田三吉になるぞヨ。そしてクラスで一番のショウギの名人になるのだ。それが僕の夢なんだ。

——志賀

とにかくやってみようではないか。(J・F・ケネディ) 壁にぶつかった時、わからなくなった時、これを思い出して進んでいこうぜ

——石井　聖一

ワラッテクレ…。三年間女を知らずに過ごした男がここにいる。

——匿名

朝遅刻して入る教室は冷たかった。授業中、窓から見る御苑はきれいだった。放課後、下校の曲の中のクラブは寂しかった。みんな終った。

——宮崎　直道

必ず訪れる時の前に、成すべきものがある。すべてのものの前に、余りにも無力な僕等だけど、せめてそれだけは、成し遂げたい。

——高松

三年間も過ぎてしまと、なんとも短いもの。この間、いろいろなことをやってはきたが、有意義なものであったろうか。

——M

僕、三年間、ちゃんといい子にしていました。ママに言われたとおり、悪い子ちゃんや、ばっちい子とはおつき合いしなかったし、お勉強のじゃまになるから女の子とも、お話をしませんでした。僕をほめて下さい。

——秋山

さあ!!皆さん　これから一年予備校でガンバロウ!!

——藤巻　春樹

君は昔カモメだった。太ったカモメだった。君を見て波は笑った。君は昔波だった。下敷きの様な波だった。君を見てカモメは笑った。

——北出　俊次

さてもさても、世の中なんとも騒がしきもの。うちでもそとでもあわただしく、何につけても、乱戦模様。

——鹿都部真顔

今頃は、丹沢の峰々も、純白の衣をまとい静まりかえっていることでしょう。あの頃の感動はこの一年、大部すすけてしまいました。

——山岳部　桧山　治国

仁義

——細谷　和夫

一人の婦人が立ち上って次のように発言した。「原子爆弾の脅威が続く限り子供を産むのは無責任なことです。」——理あるよ—

——丹羽　創

晩秋、獅子座より流れる一群の星あり。星の炎、荒野に墜ち、野に生命を吹きこむ。火！星火燎原

——管原　昌平

天皇陛下万歳・腕白でもいい。

——藤巻　春樹

今ごろ、テテなし子を産むなんて騒いでいる人はだァれ

——匿名

おい避けるな。ハッハッ。馬鹿ごまかされるな、偽りだぞ。ハッハッハッ。何てこった、ちっとも判っちゃいない。ハッハッハッ。

——芳野

今日は醒めるか、今日は醒めるかと思い続けて三年間、悪事はやり尽くしました。次は何を？　おしえてください。○○子ちゃん!!

——高山　道夫

人生を強いて理解しようとしてはならぬ
日々はそのまま祭日だ……(リルケ) 彼は強いと思います。

——川妻

やあ、やあ、どうも、どうも、おひさしぶり、吉沢です。もうおわかれですか、ところで、あなたはどなたです。

——吉沢　弘

明日は何のために行くのだろう。政経倫社地理地学物理現国日本史古文漢文化学数学世界史体育自習そうだ!!自習だ!!打ち切りだ!!

——匿名

我等3F四歌仙、今時なりても、歌仙を作る。
試験迫りぬ、この時に、眺むるばかりは、予備校案内。

——匿名

ほんとうに幸福になるには、白痴になるほかあるまい。俗世の人間は、常に幸福を考えすぎるのだ。幸福を追いすぎるのだ。(展開) でもほんとうに幸福を求めるのなら、ぼくらはみんなもっと貧乏にならなくてはならない。今の利潤ばかりを追う世の中を廃さなくてはならない。いかに頭打ちの世の中であっても、ぼくらは下から真の改革を起していこう。(転回二) 幸福を追いすぎると自分が不幸になる不幸になるとまた幸福を願う。結局人間は白痴になる以外幸福になれないのだろうか。いや、幸福になる方法は、なにも白痴にならなくてもある。これを昔人は、知足という言葉であらわした。

——匿名

ぼくは車輪!!後には最新しい—轍—が続き、前には荒涼たる道なき道がはるかに……。ぼくの上にはどのような車体がのることか?!

——匿名

一に勉強二に勉強三に勉強四に勉強なんて遠い昔のおはなし。そんなに勉強したらバカになるよ。せいぜい楽に暮らそうよネエ。

——匿名

ああ、あと数日しかないというのに、彼女に「I love you!」といえないのだ。急がなくては。次に会うのはさ来年の試験場か！3—3!!

——匿名

太平のねむりをさます模擬試験だった5%で夜もねられず。（十茶）たった0・1%で大いびき。万年浪人生。

——匿名

高校を卒業すれば浪人生。ただ夢に見る　大学生活

解説　高校を業してみると入る大学がない。結局一浪のことをしようと、予備校に入った。季語は卒業で春。（河童）

——匿名

百の勝利が一つの平和にさえかなわないことは歴史が証明している。平和こそ永遠の勝利である。

——匿名

きさらぎのさいつころ風狂の士集まりて、狂連歌を巻き侍りき。

春の巻

表六句

春きたり　味わうものは　秋の感　樹行
一人さびしく　合格の夢　明直
頭髪は　心悲しも　抜けにけり　宏洋
後から出るは　白髪ばかり　行
冬山は　雪にうもれて　春を待ち　直
コブシの花は　芽をふくらまし　洋

裏十二句

春風や　手を拡げたり　日の光　行
血潮流るる　わご手を見れば　直
恋の花　活力得たい　我が心　洋
明日の世界に　我ここに立つ　行
今日過ぎて　もはや戻らぬ　昨日より　直
手紙を埋めよう　タイムカプセル　洋
将来の　我が恋人を　思いつつ　行
授業の話も　春のまた夢　直
うららかに　かすみ立つ見つ　窓の外　洋
春陽やわらに　面さしこむ　行
留守番や　ねことじゃれにし　縁の先　直
指くわえて　古だぬき見る　洋

名残の表十二句

酒もなく　女すらなし　長屋かな　行
となりはナニを　しているのかも　直
三味線の　音は野原を　渡り来て　洋
ねこの鳴き声　いとあはれなり　行
野の風や　足につめたし　冬の風　直
地蔵に衣　そっと被ける　洋
亡き児らを　しのびて参る　道の脇　行
寺の鐘の音　樹々よりもれる　直
名月に　ひとりこころを　さそわれて　洋
ただふむ草の　露のつめたさ　行
緒がきれて　左にふろしき　右にげた　直
ただ急ぎ行く　町の雑踏　洋

名残の裏六句

夕ぐれを　家路にむかう　若妻の　行
背後に迫る　黒い人影　直
メロドラマ　見すぎた妻の　夢枕　洋

現実的に　めざましどけい　行
試験中　昼寝している　我耳に　直
見せろ見せろと　隣席の人　洋

巻後言

古へより、芭蕉らが集いし真似事を我ら三人せむとて、小一刻ばかり、狂ひけむ。世に是が才を問ふ。

注　ただし、連歌はすべて現代語によった。

だめだ。こっちも撃ってやがる。あっちから行こう。あっちもだめだったら、銃座へたてこもって最後の一戦を交えるまでだ。

急に六十字書けったって書けるわけねえじゃねえか!!あほぬかせ!!　何書こうか。……あと20字……。ふてくされるうとさん。

一月二十九日土曜日午前十一時八分五十二秒、急にハゲのやつがさわぎはじめた。ハゲって誰かって？　もちろん出席番号24だよ。

ちょおくでうすよごれたこくばん、ざつぜんとならんだつくえやいす、らくがきでよごれたかべ、これがわがきょうしつなり。

今日は何のために来たんだろう。政経現国古文漢文世界史日本史英語化学物理数学倫社地理地学生物保体音楽美術書道工芸HR自習。

あともう三週間もない。どうしよう。そのときある人が云いました。いやいやまだ一年と三週間もあるじゃねえか……。

ああのはいくのせろよ。いやつまらないよ。うち二枚しか当たらなかったよ。お宅は？　家中で七枚当たった。わあすごい。

先日ある大学生がいった。大学に入ったら、バカになる。ああ予備校時代はあんなに頭がよかったのに。現役ではいる所じゃないよ。

私立ならば三十万、国立ならば五万円、私立行きたし金はなし、国立行きたし頭なし。とかくこの世は住みにくい。

昭和元禄田舎芝居。大学入試則之也。予備校数無限。

どこに入ろうか？　駿台予備校、代々木ゼミナール、新宿予備校早稲田学院、東大国立ゼミナール　武蔵予備校それとも新宿高校？

昨日への船はもうない。遠く過ぎさる日を大切に、大いにあばれ、飲み、食い、時には考え、アジリ、楽しくすごそうではないか。

——H・S

知に働けば、かどがたつ。情にさおさしゃ、流される。意志を通せばキュークツだ。兎角この世は住みにくい。——枕草子——

白銀も黄金も玉もなにせむにまされる宝子にしかめやも!!　万葉のむかしは子どもを大切にしたのですなァー!!

横井庄一さん帰還できてよかったネ!!　さて○○観光団はグアム島へ旧日本兵さがしツァー!!　お一人さま……万円。喜ばれるよ。

ソクラテスはその昔　客観的真理の存在を主張した。現代には、プラトニック＝ラブの主観的不真理の存在の主張を○○君は……。

河童君東大うかってなおうれし。予備校おちてなお悲し。この世はとかく住みにくい。さわやかカッパここにあり。

卒業巻言　私はめでたく高校を卒業したのであります。こんなにうれしいことはありません。有意義な浪人生活に後半生をかけます。

今の今までわたくしめの敵は浪人生であったが、試験二十六日前においてついにわたくしめの敵は二年生ということがわかった。

ある受験生の悲劇。　どうゆうわけか大学入試を受ける前に予備校のパンフレットがうちにとどいた。ぐやじい。

大学入試とは落ちたとき悲しみは大きいし、体力を消耗するから損である。……∴大学をなくせばいいのだ。

ぼくは大学受験、めざすは私大!!ぼくのいとこ国立の付属の幼稚園受験である!!先の模試で僕は5％彼は90％これどうする？

私は男女共学が夢でした。　おれなんで、男子校に入ったんだろう。

——無　頓　着

私が、あなたに望むこと。それは、あの時の涙を忘れずに、いつまでも純粋に生きてほしい……。

明日は明日の風が吹く　邪見にとらわれず自分の思う道をただ一途に進んでみたい。そこに決して後悔はないはず……。

——佐野　良雄

真剣さ真面さ正直さ素直さ熱意。これをすてたふりをしましょう！　新宿高校生の立派な姿ができます。

——三無推進者

ぼくらにあいたくなったら、いつでもいらっしゃい、代々木ゼミでまってます。

新宿高校普通科は、㊙ながら四年制である。第二校舎は一応代々木ゼミという名になっている建物です。

メトロノームトパーズプリンスランブルパピロンセブンコーナーウィーンサソリライオンロンコウジプリンセス！ありがとう！石の家どさん娘天寅かつ亭オリンピックこまどりさらしなカレーコ

ーナー十紀和白馬幸華やふ時とん子エッセン！ありがとう。

タバコの本数と入学可能性は反比例する。

——有賀健治のタバコの法則より

先生様がきたら、火のついた煙草をたべてしまうぐらいの訓練せえよ。

第一志望校は、考えることはありません。だって模試の結果は、いつも第二志望校の検討ありと書いてあるから。

いいですか、先生はさして愛してもない妻や子の重みを肩にうけ、びくびく暮しているんです。弱い者いじめはやめましょうね。

卒業する前になんとかして結婚しなくちゃ、この子がかわいそうだもの

どこでもいい、模試の成績優秀者表をみてみなさい、学校の欄に〝新〟の文字はたまにあります。でも〝新潟高〟ですぞ！

煙草一本につき英単語十個忘れるなんてワリだ。本当ならオレはもうマイナスなんだがＴＡＢＡＣＯほら覚えている！

先生が「質問ないですか」ときいたら、例え質問があってもにっこり笑って黙ってましょう、彼等は心臓が弱いんです。

欲しがりません、勝つまでは、Ｍ嬢よ、おお僕のサビーネ、君に恋をしてしまったんだよ。耐えておくれ、Ｘ大の門をくぐるまで。

右手にせい書を！　左手に剣を！

〔事務室への要望〕　母子手帳の交代は、内密ニネ！オネガイ　だって彼女、ハズカシガルンダモン

——博　之

明日の天気を気にしながら生きる人、僕は実は、そんな人間になりたいのです。ネエおまえ……「ウン」……。

偽善より憎むべきもの偽悪！

全ての先進的、革命的後輩諸君、おいぼれ狂師、バカ職員など相手にスルナ！　権力中枢＝自民党本部をヤレ！ファシストを殺れ！

パトスは遠く　デカダンは近し

荒廃した死春期でした。

——京都のサ店より愛をこめて

都落ちや私大行きを恐れることはない。そこには先輩があたたかく待っていてくれる。

二十一群合格者ふり分け方法は写真選考による。美男は新宿に、そして美女は駒場に！

——（バカタレ……駒場高校　教員一同）

レッドで三本半、日本〇で二升半。先代の記録はなかなか破れませんでした。

全ての進歩的な学友諸君！　我々は感覚的憂鬱性にかかっているのだ！　和己の死は、我々の精神的仮死を意味したのだ。

「不合格の影に女あり」……「見ない、しゃべらない、さわらない」を毎朝百回唱えよ！　そうしたら駒場の門は　眼前だ！

うちの学校の先生みたいに……責任結婚をせまられると思も終りだよ。

イメージその2とイメージその3との断絶に恵子が生まれ　恵子と僕のイメージその4との間に僕の子供が生まれた。

新宿徒然草

十代ニュース（その二）

◎御苑新宿高校通用門できる

◎火災訓練の時、女子生徒救助袋につまる（煙突さん苦しそうね）

◎誰もプールにおとさなかった（プールさんもお年でお水がたまらなくなった）

◎紙飛行機2E～旅館間無着陸横断飛行成功（翼よ、あれが旅館の灯だ）

◎幻の生徒会長わずか〇週間の命

◎冬、花壇に白いお花が咲いた

◎学園祭で旧校舎大いにこわされる（工芸のベニヤ代が助かった）

◎〃お兄さん〃にお金を取られる生徒続出（仮面ライダーさん助けに来て下さい）

◎一年の転校生、二年の宿題テストうける（感想は？……簡単だったよ）

昭和四十六年度年間行事

四月　八月　入学式。始業式

九日　一年オリエンテーション

一〇日　一年オリエンテーション

一二日　生徒会各種委員選挙

一三日　ツベルクリン反応検査

二二日　定期健診

二三日　定期健診

二六日　間接撮影

二七日　間接撮影

二八日　立会演説会

三〇日　生徒会役員選挙

五月　一日　校外授業。月光菩薩展

八日　一年各種委員選挙・入部決定

一一～一五日　修学旅行（三年）

一二日　一・二年遠足

二七日　生徒大会

三一日　第一学期中間考査

六月　一日　第一学期中間考査

五日　対戸山高校定期戦第一日

一二日　対戸山高校定期戦第二日

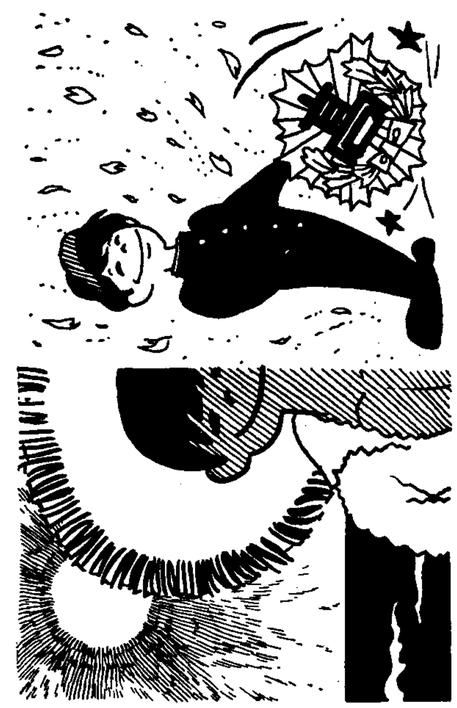
七月　九～一三日　第一学期末考査

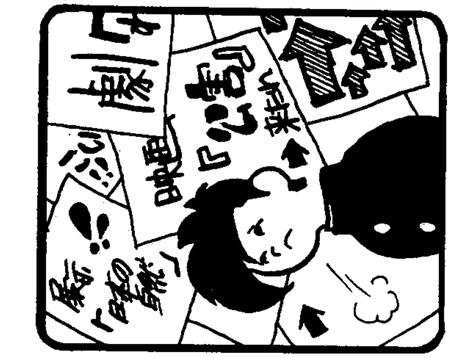
二〇日　終業式

二一日　夏季行事開始。一年館山臨海行事（八月二日まで）

八月　七～一四日　合同合宿

九月　一日　始業式





二五～二七日　学園祭
二九日　後期生徒会役員立候補者立会演説会
三〇日　後期生徒会役員選挙
十月　二日　生徒大会
六日　各種委員選挙
一三日　運動会
二二日～二三日　第二学期中間考査
二六日　生徒大会（規約解釈について）書記長立候補者立会演説会
二七日　投票
十一月　四日　一・二年遠足
一〇日　会長立候補者立会演説会
一一日　会長選挙
十二月　一三日　第二学期末考査
二五日　終業式
二五～三〇日　スキー教室
二八日　元守衛室全焼
一月　八日　始業式
二月　八日　マラソン大会
二六日　合唱コンクール
三月　八～一一日　学年末考査
一二日　卒業式
二二～二三日　修学旅行
二五日　終業式

表紙に寄せて

二C　中久木　均（表紙）

何を呟いているんだい
……聞こえないよ
そんなちっぽけな声で
……だめじゃないか
君が何を言いたいのか
僕はそれを　知りたいんだよ

過去から未来へ
永遠に刻み込まれる時間
大空から大地へ
無限に広がる空間

その中に置かれている君なんて
小さい……小さすぎるんだよ

叫べ！
もっと大きく

編集スタッフ

一A　植田益朗
一E　高橋修
一E　奥田述夫
二C　斉藤成
二C　渡部信綱
二D　本田真也
二D　小久保和子
二E　倉方欣平
二F　三木悟
二G　石井浩子
二G　高城佳代子

助手

一B　森伸二郎

校正主任

二E　佐藤任